の運命を免れざりし西羅馬帝國と共に希臘以來蓄積し來りたる文明をして北方楚人の一炬に歸せざらしむる爲めに又一は西羅馬の殘墟に建立せられたる西歐諸國が外來の攻擊に對抗して其の獨立を保持し得るに至るまでビザンツ帝國は歐洲東部の藩屏胸壁となり以て年毎に增りゆく亞細亞民族の侵入を支へしなり。西方諸國の基礎全く成就し了るに及び是帝國は茲に其の職能を全うして滅亡し、多年其の城壁裡に保存し來りし古代文物を西方諸國に撒布せり。這般の興亡殆ど天のアールヤ人種に與みして故らに作爲したるの觀あり。想ふに若しコンスタンチヌス帝が別に東羅馬の一帝國をボスフォラスの海頭に建立する微りせば希臘以來の文物は西羅馬沒落と共に來りたる混亂時代の間に堙滅し了り中世以來の邦國は更に人文の大部を其初めより新たに建設せざるべからざりしやも知るべからず。且亞刺比亞土耳其諸民族にして西帝國崩解の罅漏を衝きて歐洲中原を蹂躪したらむには、チュートン諸民族の運命はた測知し難からじ。若し又ビザンツ帝國にして土耳其の民族の爲に亡ぼさるゝなく其の獨立を永久に持續したらむには古代文化の寶庫は空しく閉鎖せられ西歐諸民族は永く其の澤に潤ふこと能

はざりしならむ。此を以て是を見れば、ビザンツ帝國の建立及び其沒落は、アールヤ人種の爲には共に其の時を得たるものと謂はざるべからず。是れ豈宛然たる天命攝理に非ずや。

加ふるに、アールヤ人種は西南にチャーレス・マーテルを有せしが如く、東北にスラヴ民族を有したり。是れ亦一の天惠なりし也。是民族の頑强剛毅は、匈奴韃靼の歐洲侵入にとりて幾何の障害なりしや。千二百三十六年以來中央亞細亞より潮の如く寄せ來りし蒙古人も、遂に深く日耳曼の境に入る能はず、サマルカンドの帝王帖木兒は、匈牙利を掠め、莫斯科を燒き（一三四八）幾度か魯西亞を蹂躪せり（一三九七）然れども遂に『スラヴ』人の頑强を奈何ともする能はざりき。一千四百七十四年に至りて、魯王イワンは遂に全く韃靼の人を外國に放逐せり。是を以て全體より觀る時は、セムッラン等の非アールヤ人種は羅馬帝國の末路より幾度か力を極めて、歐洲の中原に向て鞭を擧げたりと雖ども、其馬蹄の印する所西南はピレニー山を限り、東北はヰスチュラ河を越えず、南部はドナウの中流、匈牙利の以北に入る能はず、中央歐羅巴は依然として『アールヤ』人種の爲に安全なる住居を供へたり。彼等は茲に其

の文化を修養し、其の倉に滿たし、其の馬を肥やし、國を治め民を齊へ、徐ろに時の到るを待てり。待ちたる時は遂に到りぬ。コンスタンチノポリの陷落は彼等にとりて出陣の曉鐘に均しかりき。是に於て彼等は防禦の態度を改めて靜に攻擊の姿勢を取りぬ。人種競爭の歷史は茲に其局面を一變せり。

顧みれば、三世紀より十五世紀に到る一千二百年間に於ける世界歷史の大觀は、非アルヤ人種のアルヤ人種攻擊に存せりき。然れども十六世紀以後は則ち是に反し却てアルヤ人種の非アルヤ人種攻擊を以て史的活動の一大主腦と爲さゞるべからず。喩へば奔濤岸を打ちて巖壁に遮斷せられ、飜て二倍の强力を以て反對の方向に退轉し來りたるが如し。非アルヤ人種は旗を卷き枚を銜みて、鐵鞭又北斗を指さず、首を回して境塲を守り、自全の計に遑あらず、遙にアルヤ人種の馬首漸く南するを望み、悚然として怖れたり。

是に於てかコルドヴの政廳は半月旗を撤回し、『コラーンか、貢か、はた劍か』と呼びしもの、今や跼天蹐地、厘にジブラルタルを渡りて、東南に走れり。オットマン土耳其も、ソリマン帝（一五五九）以後、又振はず。スラヴ民族はコサック族の故を以て復讐

の刃を提げて北境に迫り、第一魯土戰爭は一千六百七十八年を以て起りぬ。越へて二十一年、土耳其の權力は殆ど崩解し、波斯より追はれ（一七三四）、エリワンに敗れ（一七四三）、對外の威力全く地に墮つ。一千七百七十三年、魯人大擧してドナウを越へ、鐵馬一路、直に土京を指せり。幸にして將軍ハッサンの力によりて之を擊退するを得たりと雖も、厘に一日の禍を緩うしたるのみ。一千七百九十二年、所謂ヤッシーの條約によりて土耳其の疆域はドニエステル河に退き、且土領内に存せるスラヴ人、希臘人等は魯人使嗾の中に、動もすれば叛亂を企てたり。今世紀の初に到りアルヤ人種の同盟軍は遂に土耳其より希臘を奪ひて是を獨立せしめ、更に魯土戰爭の結果としてバルカン半島の大部分は事實上全く土帝の羈絆を脱したり。土耳其以外歐羅巴に於ける唯一のツラン人種國たる匈牙利も、コッスートの義戰遂に其獨立の功を奏せず、墺露聯合のアルヤ軍は之を墺地利に併せたり。茲に於てか中世紀に於けるツラン人種侵入の唯一の結果たりしマジャール民族の遺業も、遂に全くアルヤ人種の足下に仆れ畢むぬ。

匈牙利滅び、ムア追はれ、ツラン人種の歐洲に邦するもの厘に土耳其あるのみ。

若し十九世紀外交史の特徴たる權力平均てふ一事微りせば魯國の朝廷は夙にコンスタンチノポリに移りしならむ。列强相牽制して其過重の權勢を容さず、是れアールヤ人種が非アールヤ人種を攻擊するの緩漫なる所以なり。アールヤ人種の各邦國は、互に猜疑疾視しつゝも尙ほ其の非アールヤ人種攻擊の事業を遺れず、彼等は權力平均の上に於て土耳其を歐洲の一角に殘し置き、更に等しく步武を進めて今や東方諸邦に干涉し初めたり。埃及先づ其の衝に當りてアラビー・パシャ國命を懷て仆れ（一八八二）英露各々中央亞細亞を分割して、遙に成吉思汗・帖木兒の枯骨に鞭ち、南洋諸島亦血ぬらずしてアールヤ人種の正朔を奉ず。印度既に久しく起たず、緬甸亦國を成さず、西力漸く東して將に馬來半島の海角を越えむとす。是に於て清國安南を爭へども勝たず、暹羅も亦國勢競はず、湄公河東岸の地遂に安南と共に佛國の手に歸せり。スラヴ民族は中央亞細亞に同人種の制肘ありて十分に其羽翼を伸ばす能はざるを見、方向を轉じて東半球の上北部を橫斷し、黑龍江畔及びサガレン島より直に支那、日本の背後を衝き、遙に英佛獨の北進軍と呼應して、ツラン人種最後の國家に對して、一大包圍攻擊を行はむとす。極東の雲脚是に於てか急なり。

嗚呼書して玆に到り、飜て日淸戰爭の顚末を沈思すれば、吾人は憮然として長大息するを禁ずる能はざる也。嗚呼日淸戰爭なるもの、何が爲に起りしや。朝鮮の獨立を扶翼し、東洋の平和を維持せむが爲に作されたりと云ふに非ずや。朝鮮の獨立、東洋の平和、是れを以て名とするの戰は、天下の義戰なり。吾人は吾が國人が是天下の義戰を以て中外に誇耀するを不可なりとせざる也。然れども、吾人は是義戰を鬪はむが爲に支那帝國を再び起つ能はざるべく打擊したるに非ずや、吾人實に是を悲むなり。支那は吾人と同人種に屬する唯一の帝國に非ずや。ツラン人種の國家は、極東以外に於て全くアールヤ人種の爲に勦滅せられたり。吾人の日本と支那帝國とは、世界に於ける最後のツラン人種の國家として、相抱擁し相提撕して其の運命を共にすべきことを誓ふべきに非ずや。支那は吾人の唯一の同胞なり。アールヤ人種は是の非アールヤ人種攻擊の最後の局面を以て、吾人の極東に擬せむとす。吾人は當に來るべき兩人種最後の大格鬪を眼前に望みながら、是唯一の同胞に大打擊を加へて再び起つ能はざらしめ、而して自ら快しとすべきなる乎。嗚呼支那を半死せしめたる吾人は、自ら其一手を斷ちたる者に非ざるか。思ふて

茲に到れば、吾人の誇りとする所の日清戰爭は畢竟極東の奇禍ッラン人種の一大不幸に非ずや。

然れども日清戰爭は實に已むを得ずして起りたるものなるべし。吾人は今に及びて隣邦の頑冥を咎めず、唯謹で天命の司配常に正しきを享受せむと欲する也。

さもあらばあれ、日清戰爭に依りて世界に知られたる日本の强力は、アールヤ人種の極東攻擊の態度に多少の變更を與へたり。彼等は安南、暹羅、埃及に對せし所のものを以て、日本を待つべからざるを認識せり。是に於てか彼等は戰勝の結果として要求せられたる遼東半島の割取に容吻し、以て東洋の平和を危殆ならしむる所以なりと抗議せり。同時に彼等は日本の武强と共に、支那の文弱を確知し、大國古國たるの故を以て多少畏懼したる從來の態度を一變し、其國防の備はらざるに乘じて猥に沿岸の地を占領し、兵を陸し、砲を架し、軍艦を增發し、列强手を携へて互に其の暴慢を過不及なからしめ、東洋の局面を壓して以て事局の急轉を耽視せり。

是時に當りて日本の位置如何。嘗て東洋平和の擔保として、國命を懸けて爭ひたる朝鮮は、已に殆どアールヤ人種の保護國となれり。而かも日本は其對手の支那

たらずして魯國たるが爲に、袖手して傍觀するに非ずや。若し東洋の平和を言はむか、朝鮮の支那の有たると、魯人の有たると、其安危同日の論に非ざるなり。膠洲灣占領の極東の平和を害すること、更に魯人の朝鮮を有するよりも甚しからむとす。而して日本は未だ一片の抗議だも挾まざるなり。今やアールヤ人種の勢力は極東の分野を掩ひ、交貫連綿してッラン人種の老帝國に集注す。曾て義憤の刃を提て膺懲の戰を起したる日本は、是同胞の存亡の危機に際して果して何事をも爲す能はざるか。吁アールヤ人種一千年の大運動に注目せよ。東洋の事局は膠洲灣の風波を以て終結すべきに非ず。今日鄰邦に施したる所、彼等は以て明日吾人に對せざるべき事。波濤は遂に岸を打たずむば已まず。人種競爭の最終の大格鬪は其れ我島帝國にあらむか。

吾人は茲に政論を論ずるものに非ず、又外交を說くものにあらざる也、而かも一事の我邦人に告ぐべきものあり。世界の大事の道理によりて爲されず、人道によりて爲されず、一に利害の爲に爲さるゝ事是れ也。人種競爭は利害の最も大なる競爭なり。今日一個人の道德は稍々進步せり、一錢を盜むも法律の罰を受く。然れど

も一國の道德は今尙ほ食人俗の狀態にあり。夫の公々然として人の國を盜み、人の地を掠むるもの、天下仰で强と稱す。德義、道理、人道は國家の暴橫を爲す時の假面に用ひらる、要は獸慾の滿足に資するのみ。北米合衆國は、自ら自由、正義、人道を以て國是となすと稱す、而かも今回獨逸の暴橫に對する彼が宣言に聽け。北米合衆國は自國の利害に關係無き限に於て、膠洲灣占領に容吻せずと言ふに非ずや。正義人道を以て國是と爲すものは、正義人道に背戾する者を敵として戰はざるべからず。自國の利害と關係無きが故に吾れ與らずとするものは、是れ自主のみ、自利のみ、豈正義人道ならむや。要するに、今の時は國家至上主義があらゆる方面に於て國民的活動の原動力たるの時なり。日本國民は飽く迄日本主義によりて今後の態度を決定せざるべからず。

遮莫、人文史上より人種競爭として極東問題を觀察する時は、ツラン人種今後の運命果して如何。嗚呼是れ日本帝國民たる吾人にとりて最も重要なる死活問題に非ずや。

吾人は過去を知る。然れども未だ將來を知らざる也。アールヤ人種が非アールヤ

人種、就中ツラン人種に對する一千年間の姿勢は、吾人已に是を知れり。西力東漸の急潮は十九世紀の末葉に臨みて澎湃として極東の海に注ぎ來りたる事實、亦已に了しぬ。而れども是西力の東漸は何處に到て究るべきや。其地を以て言へば、極東は即東大陸の極まる所、是より東の方海を指せば、萬里の煙波渺茫として涯際無きを見るのみ。其國を以て言へば、支那、日本は非アールヤ的國家の最後の遺孽なり。是生殘の遺孽にして東大陸の極東に邦するもの、今や戰勝千年の勢に乘じ來れるアールヤ人種の勢力の掩擊する所となる。ツラン人種最後の運命を決定すべき最後の大格鬪の早晩來るべきは、瞭々として火を睹るよりも明なる事ならずや。

咄を決して前途を望めば、覺えず骨鳴り肉躍らむとす。あゝ日本男子の眞に義憤すべきの時は夫れ來らむとする第二十世紀なる乎。

國家の强力を試むべき機會の接近することは、寧ろ眞正なる國民の樂しみ待つべき所なり。吾人安ぞ今にして徒に悲歌慷慨せむや。想ふに吾人の祖先は吾人が今アールヤ人種の凌辱を受け居るが如く、アールヤ人種を苦めたりき。然れば則ち今の吾人は古のアールヤ人種を以て自ら任ずべきに非ずや。東はボスチュラの河を

限り西はピレニーの山を境として、アールヤ人種は自衛自全靜に時の到るを待ちたりき。彼等の西班牙、葡牙利、魯西亞、希臘の斃れたるは、猶ほ吾人の埃及、土耳其、安南、朝鮮の仆れたるが如かりし也。天吾人をして極東に邦せしむ、豈夫れ偶然ならむや。ツラン人種が最後の城廓は、吾人の大八洲にあり。再び風雲を掀飜して天下に雄飛すべき時代は、幾もならずしてツラン人種の頭上に落ち來らむ。十九世紀の末葉はアールヤ人種の第二の極盛期なり。然れども誰か安ぞ來るべき第二十世紀に於て人種競爭史上の局面に更に一回轉を起すこと、猶十五世紀に於けるが如くならざるを知らむや。

（三十一年一月稿）

國粹保存主義と日本主義

何ぞ世人の褊狹にして他の言説を正解する能はざるか、預め成心を挾みて他に

臨まむは、若かず、寧ろ初めより人に聽かざらむには。吾等は讀みて而して解せざる者を咎めず、そは其知見の進むに隨ひて早晩解し得るの時あるべければなり。されど解し得べくして而して解するを欲せず、若しくは解し得て而して尙ほ其成心の非を遂ぐるものはげに思想界の外道とこそ云ふべけれ。

眞理は天下の眞理なり、一人の眞理に非ざる也。是を以て吾人は其言を採るものゝ爲に說かず、年齡の老弱を問ひ、出世の先後を見、而して其人の弱齡にして後進なるを見れば、則ち後れ到りて事を共にするを屑しとせず、斯の如きは一人の私見に雷同するのみ、天下の眞理に殉ずる所以に非ざるなり。かゝる襟度なく雅量なき者は、畢竟何事をか爲し得べき。吾等其所信を告白し、同志を天下に求めて其運動を共にせむことを望むや切なり。されど斯の如き瞶々者流に向ひては、むしろ吾等の說を讀まざらむことを希ふ。

今日に於て國粹保存主義と日本主義とを混同する者あるは吾等の甚だ遺憾とする所なり。是れ畢竟吾等の言說に對して眞摯なる包有的批判を施さゞりしが爲なりと雖も、抑又日本主義の由來せる歷史的徑行を審にせざるの弊に坐せずむ

ばあらず。

國粹保存主義は如何なる時代に興り、如何なる主張の上に立ちたるか。是二點を明にすれば、そが日本主義との關係及び差別はおのづから瞭然たらむ。

國粹保存主義は如何なる時代に興りたるか。抑明治の初年以來、歐化主義の勢力は、原燎の枯草を燒くが如く、社會の全部に蔓延し、徹上徹下、底止する所を知らず、一二皇學者流の反動ありと雖も、例へば、一掬の水を以て車薪の火に灑ぐ如し。其勢力の政治上に表はれたるもの、民選議院設立の建白となり、愛國公黨の組織となり、高知立志社の宣言となり、民約論的佛蘭西思想は一世を風靡せり。『我輩の政府を見ること斯の人民の爲に設くる所の政府と看做すより外無かるべし』とは、愛國公黨の『本誓』にして、『政府は約束より成り、納稅の義務は參政の權利と相對す』とは、民選議院建白の主腦なりき。かゝる幼稚なる自由主義が政治界に大流行を極めつゝある間に、社會は盛に英米の功利主義、平等主義を歡迎し、君父に對する義務よりも己れに對する義務を重じたる勸善訓蒙、智氏家訓等の飜譯的倫理書は、公然として國民教育に用ひられ、殊に西南戰爭終りを告げて西洋心醉の政治家等が內閣

を組織するに及び、外尊自卑の氣風は上下に普く、有形無形一切の事物を擧げて西洋を摸倣するに到れり。天賦人權說は男女同權論を產出し、『板垣死すとも自由は死せず』と云ふ夢の如き言葉は、殆ど聖者の福音の如く傳へられ、和漢の學は弊屣の如く、淺薄なる飜譯書は殆ど無上の聖權を以て迎へられき。今の外山博士が『漢字に反對するものには何でも贊成する』と公言して、羅馬字會、かなのくわいを起したるも是時代なり。西洋風の假裝會、舞蹈會は盛に奬勵せられ、大學々生と女學生と混じて英語演劇を催したるも是時代なり。所謂愛國の志士が民權自由の詭辯を弄して連りに好で囹圄の人となり、革命戰爭に關する飜譯小說の盛に行はれしも是時代なり。政治界に於ける帝政黨と、教育界に於ける弘道會とは、多少反動の氣勢を示したれど、南風遂に競はず、佛教徒が是等守舊派と聯合して『破邪顯正』の旗幟を飜したれども、其勢亦遂に振はず、基督教は歐化主義の後援に賴りて前後比類無き全盛を極めたるも是時代なり。凡そ明治七八年より二十年に到るまでの十數年の間、國民思想の大勢は歐化主義によりて壟斷せられたりき。是に於て二十年間の新經驗、新時勢に教育せられたる國民は、漸く中心に於て是極端なる歐化主義

の弊を覺り來りぬ。

國粹保存主義は是の如き時勢に乘じて起りたるなりき。然らば則ち國粹保存主義とは如何なる主義なるか。

雜誌『日本人』を機關として、三宅、志賀等諸氏の唱道せる所は、今日より見れば甚だ漠然たるものなりき。既に名けて國粹保存主義と云ふ、保存せらるべき國粹の存在を假定せるや素より論無し。然れども、是の如き『國粹』の何物なるか、何故に內外萬千の事物の中、是の如き『國粹』の特に保存せらるべき價値ありとするか、社會經營の全局面に於て所謂國粹保存てふとは幾何か國家國民の幸福を增進するに益すべきか。是等諸般の問題に就いては一も明示する所なかりしなり。諸氏の說く所は、單に『猥りに歐米を摸倣する勿れ、我國粹は是を保存せざるべからず、一も二もなく外邦の文物に心醉して我の長所、美所、即ち國粹を拋棄するは甚だ不可なり』と云ふに過ぎず。是れ雜誌『日本人』の初號に徵して尤も明かなりとす。

是の如く、是主義の興りたる時代と其の依て立つ所の主張とを比照する時は、吾等は國粹保存主義の歷史的位置に就いて最と明瞭なる概念を得べし。蓋し明治

思想の歷史は即ち國民的意識の發達の歷史なり。明治の初めにありて、國民は外來文物の新奇と盛大とに眩惑し、未だ世界各國の人文は其國民的性質の必然の所生なることを覺らず、專念一意、歐米を崇拜し、追從し、摸倣して日も尙足らざらむとしたり。是時に當て國民は未だ自己の存在と獨立と特性とを覺悟せず、其意識は全然外界に投射せられ、偶々駭目驚心の事物に遭遇し、茫漠渾沌の中に其無我的活力を放散したるに過ぎず。既に我無し、隨て我と我に非ざるものとの明白なる差別を知らず、目的なく、考察なく、唯々本能的に盲動したるのみ。矣れ唯盲動なり、故に外物を摸倣せむが爲には、其數千年の歷史を打破するを憚らず、是歷史によりて陶冶せられたる特性を損害するを顧みず、猶ほ小兒の我れを虛うして偏に他の顰笑に擬するが如きなり。明治の初め、歐化主義が國民思想の虛漏に乘じて一世の人心を風靡したる事實は、是の如くにして解釋せられ得べきのみ。

然れども小兒は長へに小兒たらざる也。國民性の彈性極限に達したる極端なる外物崇拜と摸倣とは、茲に端なくも國民的意識の反省を促がし、遂に多年の抑壓を忍びたる國民的特性をして猛烈なる反動を提起せしむるに到るは蓋し尤も自

然の數なるべし。國粹保存主義は即ち是の如き反動に外ならざるなり。而して此の如き單純なる反動の性質として、其の外を排して己を伸ぶるに急にして、未だ顧みて自他内外の得失を比量するに遑あらず、是れ國粹保存主義論者が消極的に歐米を斥くるに急にして、積極的に自家の主張を暢ぶるに遑無かりし所以也。是を以て彼等は漫然國粹を呼ぶ、然れども其の所謂國粹の何物なるかに就いては一も明言する所あらざりき。當時反對者が是主義を目して攘夷論の再燃となしたるは、素より誤解なるべしと雖も、而かも國粹保存主義其物の性質として、是誤解を招致すべき因緣を具足したりしに依らずむばあらず。是を要するに、國粹保存主義は思想發展の歷史に於て、國民が外來勢力の抑壓に反動し、翻て自己の存在を自覺し初めたる一契點を標示せるものなり。夫れ唯存在の自覺に止まる、自己の依て以て存在し、發達し得る所の諸般の制約に就いては未だ一も思料する所あらざりし也。其の言ふ所は全く抽象的なり、全く形式的なり、國粹を口にすれども其國粹の何物たるを說かず、彼の長を取りて我の短を補ふべしと言ふと雖ども、何物か彼の長にして何物か我の短なるかを明かにせず。抑も又是の如き折衷は如何な

る制約の下に成立し得べきものなるか、換言すれば依て以て外來勢力を同化する所の主腦力、中心力は何處に求むべきかを說かず、唯漠々然として國粹保存を唱へたるのみ。

且夫れ國粹保存主義論者の唱へたる所は、其名の示す如く、單に國粹の保存に止まる、故に其の外來勢力に對するの態度は全く受動的なり。彼等の所謂國粹を見るや、猶ほ古物の如し。其中何等發達の活力を具足せず、何等進歩の性質を包有せず、只務めて其舊形を保ち、故色を失はざらむと欲するのみ。彼等は國體國性の特質が一國人文の大把柄なることを明知せざりしのみならず、未だ是の如き概念の依て立つ所の國家及國民の眞意義をだに解せざることは、彼等の言論に徵して尤も明白なる所なりとす。彼等の主義や素より國民の反省に本く、然れども國民的意識の發達の上より見る時は、從來物我を分たざるもの、茲に初めて自他内外の差別を自覺したるに過ぎず、未だ一國文明の特質を明にし、其の國體及び國性を以て國民的思想の中心となすに至らず、所詮は幼稚單純の主義なりと謂はざるべからず。

然れども吾等は歴史上の一思想として國粹保存主義の功績を否定するものに非ざるなり。少くとも國民的意識の覺醒に一歩を進め、從來徹上徹下に全盛を極めたる歐化主義の適否に就いて、國民に一大反省を促がし、兎にも角にも獨立の日本思想に據りて歐化主義に對壘したるの一事は、明治思想史上に特筆すべき者なり。是點に於ては國粹保存主義は慥に今日の日本主義の先驅たりと謂ふべし。

是に於て吾輩は勢ひ日本主義に就いて一言せざるべからず。げに是主義や、其系統に於ては國粹保存主義の後を受けたるものなりと雖も其内容に於ては日を同じうして論ずべきものにあらず。今其差別を説明するに先ち、便宜の爲に世上の論者の誤謬を指摘せむ。而して是の如き誤謬の一例として水城學人の日本主義論を擧ぐべし。實に吾等は水城の如き少壯有爲の學者にして尚ほ且つ是幼稚の見を持するを見て、成心私情の如何ばかり論理の公明を累はすかと想へば、覺へず悚然たらずむばあらざるなり。水城希はくは心を虛しうして吾等の説に聽け、而して靜かに省みる所あれ。

水城が明治思想の變遷を論じて、是を人間思想開展の三大段に擬し、第一を獨斷

の時期となし、第二を懐疑の時期となし、第三を合成的建設的の時期となせる事に就ては、吾等玆に異議を唱へざるべし。唯水城が所謂第二期の懐疑説たる國粹保存主義の一時の反動的復興として日本主義を觀察したる事に就ては、眞に是れ菽麥河嶽を辨せざる夙斷なりと謂はざるべからず。水城説を爲して曰く、

摸倣と自覺の二大主義明治の思想界を振盪するや、第三期的開展は日尚遙にして、乃ち這般二大主義の反動的復興は起れり。摸倣主義の反動的復興は即ち西園寺公望氏等の唱説に係る所謂世界主義即ち是にして、自覺主義の反動的興起は近來一派の儕輩の呼號に於ける所謂日本主義即ち是なり。所謂世界主義は單に過去に於ける歐西の文物思想を以て文明の究竟的理想と爲す漠然たる淺見にして、所謂日本主義は十年前國粹主義が夙に既に道破し了せる所を取りて、新なる衣裳の下に之を衆人の前に開陳する硯然たる陋見なり。

而して日本主義は國粹保存主義の單純なる摸倣に過ぎざるを證せむが爲に、二者の類似を比較して曰く、

雜駁なる思想の範圍に坐して、社會上國家上の實務に關し未だ一定の識見を立するに至らざるは、兩者同軌の一なり。思想開展の理勢に通せず自個の地位を覺知せざるは、兩者同軌の二つなり。第十九世紀の末葉に於ける世界文明、世界思想の大勢を了せざるは、兩者同軌の三つなり。大勢上より觀るに於いて大波瀾の後の小波瀾として、反動的復興の現象として、自動的態度を具有することなきは、同者同軌の四なり。

終りに大に日本主義を罵りて曰く、

所謂世界主義の時勢に後るゝこと數舍なるは更にも言はず、所謂日本主義亦國粹主義の後に出でゝ同一思想を反復する、若し以つて新と爲すか則ち迂、若し自ら其陳なるを知ると雖も、且其貌を新にし其の聲を大にして以て自ら售るに資せむとするか則ち鄙。鄙なる者と迂なる者と日本主義や必ず一に此に居らざる可からず。苟くも學識氣力に於いて日本思想の先覺者を以て任ずる者、固に宜く斯の如くなるべけんや。明治思想界の病的現象は吾世界主義及日本主義に於いて之を看る。

水城の言や洵に壯なりと謂ふべし。然れども如何ばかり確的の論據あれば水城は斯かる壯語を敢てし得たるぞや。是れ吾等の茲に問はむと欲する所なり。

苟も明治思想の歴史を理解し得たる人ならむには、國粹保存主義と日本主義との間に一の著大なる差別あることを認識せざるべからず。是の著大なる差別は、內にありては即ち國民的意識の明白なる自覺なり、外に表はれては即ち內外事物の眞正の性質に據りて、其取捨撰擇を決し、其方法の全く研究的なることなり。但し兩個の主義は、日本を主とし外邦を客とする事に於て、素と同系の思想に屬するが故に、是の差別は根本的なりと謂ふを得ずと雖も、其懸隔の大なる殆ど將に天淵の別あらむとす。水城是二大差別を看過して而て尙ほ『明治思想の變遷』を論じ得たりとする乎。未だ愼重なる學者の意見と謂ふを得ざる也。

然らば則ち何をか日本主義に現はれたる國民的意識の自覺と云ふ。他なし、國家及び國民の眞意義を解釋し得たる事、即ち是れなり。抑々國家及び國民の概念が自覺的に國民思想に上りたるは、明治二十二三年以後の事なりとするを妥當とすべし。其以前にありても、是を言說せるもの素より尠からざりき、然れども國家

と國民の依て以て其獨立の存在を維持し得る所の國體及び國民性に就て明白なる概念を有せざるは言を待たず。當時國家と言ひ、國民と謂ふ所のもの、多くは單に外邦の思想を借り來りて漠然たる觀念を構成せしに過ぎず。我が國家、我が國民に就いては殆ど思料する所なかりしなり。國粹保存主義は、是間に一段の反省を齎らしたりと雖ども、畢竟未だ遙に國家主義と云ふを得ず。明治廿二年に發布せられたる欽定憲法は我國體の特性を明かにし、政治上に於ける民主主義者流の空想を打破し、以て國民の政治思想を統一し、同じく二十三年に煥發せられたる教育の大詔は國民道德の大綱領を指定して以て國民の道德思想を糾合し、茲に國家主義の精神は初めて社會の人心を司配するを得たり。然れども是の如くにして成立したる國家主義の思想や、未だ國民の明白なる自覺心によりて執立せられたるものにあらず、多少頑迷固陋の嫌ありしは時勢の然らしむる所、畢竟國民的意識を覺醒すべき十分の刺戟を缺きたればなり。もし當時國家及國民の概念にして明かに會得せられたらむには、夫の教育宗教衝突論に際し、本來基督教と共に非國家的なる佛教徒が、井上博士に左袒して却て基督教を攻擊したる笑ふべき矛盾も

無かりしなるべく、又一史學者の論文に對し、國學神道家者流が國家主義の名によりて無道の迫害を加へたるが如き醜態も無かりしなるべし。是の如き尙ほ幼稚なる國民思想を根抵より搖撼し、國民的意識に最も明白なる覺醒を與へたるものは、即ち二十七八年に於ける日清戰爭なり。日本主義は是國民の明白なる自覺心を代表せる主義たるなり。

日清戰爭によりて獲たる勝利は、一部國民の自負心を鼓舞し、排外自尊の病的思想を熾ならしめたるは甚だ悲むべき結果なりき。然れども遼東半島の地理と共に、東洋の局面世界の大勢は是の戰爭によりて初めて國民の間に知られたり。戰に勝ちたる國民は世界に於て尤も危殆なる位置にあるの國民なることを覺りたり。黃白人種最後の大格闘は如何に其千年の歷史を紹ぎて、將に絕東の風雲を掀飜せむとするか、黃人種最後の運命を決すべき一大危機の如何に肅々として眉睫の間に近づきつゝあるか、日本の戰勝は如何に外邦の猜忌を增し、如何に國民の前途に一層の險巇を加へたるか、戰勝の祝宴に醒めたる國民は悚然として怖れ、猛然として省みたり。是に於て、世界に於ける日本の位置てふ觀念は國民の間に最も

痛切なる疑問として提供せられぬ。日本主義は是疑問に答へむが爲に起りたるものなり。

されば、日本主義の最大事業とする所は、世界今日の事局に處し、日本國家の獨立進歩と日本國民の安寧幸福とを保全せむが爲に、最も適切なる國民道德の實行主義を立て、是れによりて闔國の人心を統一するにあり。是に於て、先づ縱に成敗の跡を過去の歷史に徵し、横に興亡の理を世界の大勢に求め、國體民性を中心として、廣く且深く自他内外の事物に對して精微なる商量を遂げ、以て一國思想の指針たらむことを期せり。其目的は素より國民にありと雖ども、是主義の由て來る所は獨り國内のみに止らず、遍く世界列國の大勢より打算し來りたる者なり、是意味に於て日本主義は一個の世界的主義なりと謂はざるべからず。是を夫の國粹保存主義の主我的盲動と混同せむとするが如きは、全然歷史に盲なるものに非ずして何ぞ。水城が『日本主義は十年前國粹主義が夙に道破し了せる所を取り來りて新衣裳の下に衆人の前に開陳する靦然たる陋見なり』と罵詈せるが如きは、殆ど沒理の言に類す。抑々水城は如何の材料、如何の研究、はた如何の覺悟を以て『明治思想

の變遷』を草したるか。何ぞ其題名の堂々として其所說の杜撰なるや。愼重なる學者の意見は決して是の如くなるべからず。

以上は日本主義の據て立つ所の國民的意識に就て概說したるのみ。其の執る所の方法に於ても國粹保存主義と日本主義との間には最も顯著なる差別あり、何ぞや、日本主義の研究的態度是れなり。

抑々日本主義以前の凡ての主義は一個の獨斷の上に立てりき。獨斷とは何ぞや、他なし、洋の東西、國の内外を以て其取捨去就を決したること、是なり。精しく云へば、苟も東洋もしくは國内に發達したる一切の文物は、凡て本來一致結合すべき性質あり、是に反して西洋もしくは國外に興起したるものは、凡べて本來是の東洋もしくは國内の文物に反對すべきなりとする獨斷說、是れなり。是を以て明治初年の皇學者流にまれ、明治二十年の國粹保存主義にまれ、苟も外國思想に反對の態度を取りたるものは、何れも概して外國思想の全體に對抗し、轉て東洋又は國内に其歷史を有するものに對しては凡べて友朋與黨として是を收容し、是と結合せり。是を以て佛敎徒が督敎徒に反對する時は、國學者、儒敎者流は常に佛敎徒に左袒

し、弘道會の如き儒教主義の團體が歐化主義に反對する時は、神道、佛教者流は期せずして是を助けたり。國粹保存論者が其保守主義によりて外國思想に反對するや、是を助けたるもの亦神道、儒教、佛教の者流なりき。夫の教育宗教衝突論にありても、井上博士の國家主義を援助したるものは、神道、儒教者流なるは論を待たず、非國家的主義者として基督教徒と共に井上博士を共同の敵とせざるべからざる佛教徒は、其の最も熱心なる贊成者なりき。夫の尊皇奉佛大同團と云ふが如き奇怪なる團體も、亦是幼稚なる獨斷に基けるものに外ならず。所詮日本主義以前の國家思想は洋の東西、國の內外によりて分派樹黨したるものなり。內國東洋の文物は必ず本來の性質に於て必ず一致すべきものなる乎、外國西洋の思想は果して本來內國東洋の文物に反對すべき性質を有する乎、將た又世界現下の局面に處して國家の獨立と進步とを保全せむが爲に必要なる一國の道德主義は、是の如き國の內外、洋の東西によりて離合するが如き單純なる方法によりて樹立せらるべきものなる乎。是等は凡べて當時の思想に全く知られざる問題なりしなり。是の幼稚なる獨斷を離れ、汎く內外東西の文物に對して研究的態度を取りたるものは即

ち日本主義に外ならず。

日本主義は團體の維持と民性の滿足とを以て國家の獨立、國民の幸福を保全し得べき二大制約となし、是二大制約を中心とし、核子とし、以て內外諸他の文物に對して公平なる研究を試み、是研究の結果によりて取捨撰擇を行ひたり。故に日本主義の眼中には國體と民性とを外にして、國の內外なく洋の東西なし。苟も國體民性に適合するものは、外邦の文物と雖も是を收容同化するに躊躇せず。是に反して、苟も是に有害なりと認むる時は、設令ひ數千百年の間、我國に存在し發達せるものと雖も是を排斥打破するを憚らず。要は毫しも名義外形に拘泥せず、唯其眞正の性質によりて取捨を決するの一事あるのみ。是を於て日本主義は內に向ては基督教と共に非國家的非現世的なる佛教を排斥し、保守的退步的なる儒教の一部を排斥し、外に向て獨逸の國家社會主義を容れ、英國の功利實驗主義の一部を容れ、內外一切の文物に向て縱橫の撰擇を行ひたりき。是に於てか從來國家主義とは離るべからずと信じ居りたる佛教徒(及び儒教徒)の如きは、大ひに狼狽し、俄に舊來誤て敵視したる基督教と聯合して是に反對するに至れり。日本主義が是の如

くにして一時思想界を攪亂せるは素より免れざるの數なりとす。國粹保存主義の如き幼稚なる獨斷論を以て日本思想の本色となしたるの徒も、一見する所大膽無法の觀あるに驚き、危疑逡巡、俄に贊同の色を示さざるが如き、亦自然の勢なるべし。然れども單に東西內外の名義に拘泥して其離合を決めたる獨斷的思想を擺脫し、純然たる研究的態度を取りたるの一事は、實に日本主義の特色にして、又國民的意識の發達を示したる所以なり。

吾等は茲に是主義の性質に就て多言すること能はず、唯以上擧げたる二大特色は、是主義と國粹保存主義の差別を最も明白に指定するものなるを注意するを以て足れりとせむ。夫の水城尙ほ且つ日本主義を以て『十年前國粹主義が夙に既に道破し了したる所を取りて衆人の前に開陳する覿然たる陋見なり』と公言する乎。斯の如く論じ來れば、水城が勿體らしく列擧したる所謂『同軌』の四ヶ條なるもの、悉く皆な杜撰無根の漫言たること問はずして明なるべし。想ふに水城は、依て以て是の如き斷案を下し得る所の事實の研究を經由せず、預め成心を挾み、思想開展の空想に擬して、漫然抽象的理義を揣摩したるものゝみ。明治思想の變遷は斯の如

き論法によりて解釋せられ得べきものに非ざるなり。吾等の見る所を以てすれば、水城は殆ど全く現下の思潮たる日本主義をすら誤解せるに非ずや。氏が是の如き言論によりて是の眞摯なる道德主義の問題を輕々斷じ去り、『迂』と、嘲り『陋』と笑ひ、『病的思想』と罵詈し去るに至ては、吾等潛に有爲の學者たる水城の爲に甚だ歎惜に堪えざるなり。夫の文の莊にして語の快なるもの偶〻矯飾塗抹の詆を受けむのみ。

水城の說は日本主義に對する誤解の一例のみ。吾等は徒に誤解するものを識るにあらず、唯江湖有識の士が一段曠雅の襟度を披きて吾等の言に聽かむことを希ふや切なり。今にして國粹保存主義と日本主義との差別を說く、豈吾等の本志ならむや。

（三十一年四月稿）

明治思想の變遷

（明治三十年史總論）

明治初年以來三十年間に於ける最近の歴史を述ぶるに先ちて、そが根柢となれる國民思想の推移を尋ねむに、そも〳〵維新の當時にありては、幕府仆れて王政古に復へりたれども、未だ然るべき政體だに定まらず、嘉永このかた一國の怖れとなりし外國の事情も定かに知る由もなく、尊王討幕の餘燼は未だ志士の胸に消えざれども、誰ありて國論の向ふ所を一にし、萬邦對峙の中に我國民に千萬年の進路を示せしものなし。『廣く天下の公議を盡し聖斷を仰ぎ同心協力共に皇國を保護仕候へば必ず海外萬國と可並立候』とは、慶喜將軍が大政奉還の奏聞中の語なれども、狼狽爲す無きのさまはこゝにもおのづから現はれたり。洵に數百年の長夢より目ざめたる國民が、頭を擧げて世界の大觀に眩惑し、一朝かゝる亂離の世に處し、剩へ外邦の交渉を控へたるもの、如何でか明確なる國民思想を作り得べき。今や王政維新を促したる國學神道は是國家の大局面に何の力もなく、往にし日の攘夷の

志士亦爲すに所無く、國民一般の思想は謂はゞ渾沌の裡に自然の成行を待てる有樣なりき。幸に聖天子上に在まして、鋭意勵精輔弼の翼贊を納れさせられ、天祐を保全し、大業を克復し、茲に新政の大本、百代の鴻謨を立てさせられ、天下の人心を率ゐて向ふ所を一にせられたるは、洵に天地の佑澤、我國家の慶事なりとこそ謂ふべけれ。誠にかゝる危殆の世にありて、國家の中心として萬民を率ゐさせられたる我皇室の稜威功德の程は、我國人の夢忘るべからざる所なり。

されば維新以降の國民思想は、一に聖天子の叡慮によりて其方向決まれりと謂はむも不可なし。明治元年三月、恐れ多くも聖上には親しく紫宸殿に臨ませられ、公卿諸侯を率ゐて天地神祇を祭り、五事を以て天下の億兆に誓はせ給ひしは、とりも直さず我國民上下の思想を統一せむとの聖旨なりき。後年の國是は一に是五事よりして定まれるものなれば、こは吾等臣民の金科玉條として日夕體認すべきものなり。

一　廣く會議を興し萬機公論に決すべし。

一　上下心を一にし盛に經綸を行ふべし。

一　官武一途、庶民に至るまで各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめむことを要す。

一　舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし。

一　智識を世界に求め大に皇基を振起すべし。

是五つの事は、洵に當代の急務にして、かねて永世の基礎なり。敕意の宏遠なること誠に感銘に堪えざるなり。上は國交政治より、下は文學美術に至るまで、一として是大旨に本かざるものなし。廣く會議を興し、萬機公論に決すべしとは、まさしく立憲代議制の濫觴にして、官武一途、庶民に至るまで各々其志を遂げしむとは、即がて門閥の舊習を打破し、廣く人才を天下に求むるなり。知識を世界に求むとは、廣く世界の文明を收容し、長短互に相補刪して我邦の新文明を開くなり。三十年間明治の歴史は何れか是大御心に本かざるべき。げに是五事の詔敕は明治思想の根源とこそ謂ふべけれ。

遮莫、維新の革命によりて、社會百般の制度は殆ど其根蔕より破壊せられたれば、世はさながら餓え渇えたる者の如く、苟も是缺陷に投じて新世紀に處するの道を

示せるものは、最も熱心に歡び迎えたり。げに聖詔の示す所によりて、大體の方向は定まれるものから、實行の機に臨みて聊か望洋の嘆を免れず。時の人が新に唱へたるものが果して永世の主義として依頼するに足るものか、其利何處にありて其弊何處にかある、等の問題は、未だ思料するの遑なく、ひたすら目前の急需に迫られて、新たなるものを迎ふるに忙はしかりしぞ自然なる。斯くて先づ入り來れるものは、西洋主義なりき。こは一旦國を開きて西洋の事物に親めば、見るもの、聞くもの想ひしに優りて、驚かるゝもの多かりければなるべし。

是主義を輸入するの緣となりし事情はくさ〳〵あれども、朝にありては貴顯高官の人々歐米諸國を視察し、歸りて彼邦の文物の我れの比に非ざるを唱へしと、野にありては福澤諭吉、中村正直(敬宇)などの諸學者が私學を開きて盛に洋學を世に擴めしとは、其最も直接の緣となりしならむか。就中福澤氏は、慶應年間より已に是目的の爲に今日まで是年號の名を冠れる私塾を東京三田に開き、政治、道德、風俗、習慣、一に西洋の功利學によりて子弟を訓へたるは、是主義の擴張にはゆゝしき勢力なりき。其所記の一二の例を擧げむに、我國人は古より天理人道を一定不變、萬

古動かざる者の如く思惟すれども、こはいみじき誤りなり。『忠臣二君に仕へ、甲州武士が德川其他に仕へて働きたるも、亦天理人道に戻りたるに非ず。年若き寡婦が落髪して尼寺に入り、亡夫の菩提を吊ふも天理人道なり、再緣して子を生み、よく其子を敎育するも天理人道なり。今の世に兄弟同胞が夫婦たらば、天理人道に戻るならむと雖も、アダムとイブの子供等は誰と緣組したるや。又日本書紀に、仁德天皇八田の皇女を皇后とすとあり、然るに皇女は天皇の妹なり。今より思へば不思議なれども、其時代には矢張り天理人道に基きし也』云々と說きて、本邦古來の固陋なる道德を根本より覆へし、又『楠權論』と云ふを說きて、楠正成は我邦にては古今に双び無き忠臣の鑑と稱せらるれども、湊川にて死なでもよきに死したるは、是れ權兵衛が褌にて首をくゝれると同じ事なりと論じ、苟も事の實際に益なくば、其行爲毫も賞するに足らずとの意を述べたり。又世の人が空名に拘はりて實益を知らず、爲す所概ね迂濶なりとて、『學校に石盤を用ひて數學には明なれども、店先の帳合には暗く、作文暗誦は上手なれども、手紙の文句は出來ず、窮理書は讀みたれども、籠の築き樣と流しの水はきには工風を用ふるを知らず。化學の吟味は經たれど

も、甘酒の作り樣と、豆腐の製法は未だ之を聞かず。或は十二三の娘子が西洋流の學校に入り、又は西洋人の手に就き、西洋音の唄を習ひ、西洋風のメリヤスを組み、却て糠袋の縫ひ樣も知らず。或は和漢洋の書を讀みて三十一字も少しは出來れども人身窮理は忘却して自分の體の骨も知らず、風を引て容體を述ることも知らず』云々と說き、從來の敎育が實際の世事に疎遠なるを諷せり。福澤氏の是等の說は、今日より見れば何でも無き事なれども、維新草創の當時、廢れたりとは謂ひながら古來の武士道、儒敎、國學の敎、尙ほ人心に浸潤せりし際に於て、敢て斯かる說を唱道していさゝかも忌憚する所無き其識見と膽勇とは、眞に敬服すべきものなり。斯かる人ありて是實益功利の學を呼號し、其荊棘を拔き置きたればこそ、爾來諸般の西洋文物の斯くは容易に入り來り得しなれ。想へば日本の新文明が是『三田の先生』に負ふ所如何ばかり大なりけむ。其說の中にまゝ奇矯にしてやゝ正經に遠かれるものも無きに非ざれども、病に應じて藥を與ふるの道としては、寧ろ其眼識の明を稱うべきなり。『福澤全集』が明治の小歷史なりとの意も是邊りに存すべし。福澤氏の外に中村正直氏ありて、東京小石川に同人社と云へる私塾を開き、均しく

西洋の功利主義に本きて社會の教育に力め、英人スマイルス氏の諸著を譯して『西國立志編』『西洋品行論』などを公にせしは、福澤氏と共に其功沒すべからざるものありき。されど其說は福澤氏のかた遙に平民的、通俗的なりしが爲に、社會の感化力に於ては中村氏のかた遙に劣れりしは是非も無し。

斯く上下の風潮は西洋主義に傾きければ、西洋語、殊に英吉利語を學ぶもの年毎に增さり行き、隨うて幾多の著譯書は踵と跡と相接して世に出でぬ。其三四の例を擧げむに、歷史には萬國新誌、泰西通鑑、西洋英傑傳あり。地理、風俗には輿地誌略、西洋新書、西洋見聞錄あり。修身倫理には、智氏家訓、勸善訓蒙あり。政治經濟には、新政大意、立憲政體略、萬國公法、民約論、銀行論あり。其他開化問答、文明開化、世渡りの杖、道理圖解等、一々枚擧に遑あらず。鐵道電信より衣食住百般の有形的事物が、靡然として洋風に化しつゝある間に、是等の著譯が諸官私立學校の洋學教授と相呼應して、如何ばかり當時の人心を風化せしやは、恐らくは今の人の想像し得ざる所なるべし。民約論の如きは殊に甚し。是書は前世紀の佛蘭西人、ルソー氏の著にして、極端なる民主論なり。其要旨は、社會の主は人民なり、君主政府は人民が自

己の利益の爲に造作したるものなれば、人民に都合惡しゝと見る時は、何時にても是を改廢するの權は人民にありと云ふにあり。是れ佛蘭西大革命の一原因を爲せるまで彼邦にては勢力ありたる書なり。是の書一度び中江篤介氏によりて譯されてより、急進改革を喜ぶの士は、爭て是を讀みて其說を皷吹し、民權自由の聲一世を聳動せり。西洋に心醉せる當時の社會亦漫然是說激の言說を看過して多く怪まず、一部の保守の士、もしくは先覺の士の外はそが我民情國體と相容れざることを認めたるものなき程なりき。げに代議政體は明治元年の五事の御誓文に本けりと云ふものから、そが開設をして一日を速からしめたるは、是民約論の如き書によりて淘冶せられたる急進者流の運動與て力ありと謂はざるべからず。

斯く民間思想の大勢が、西洋主義に靡ける間に、朝廷にありても人材公撰の詔あり（明治二年）。明治四年には廢藩置縣を斷行し、五年には初めて京濱間の鐵道を開業し、同じ年に從來の太陰曆を廢して太陽曆を用ひ、八年には政體釐革の詔を發し給ひ、かの御誓文の意を擴充し、元老院を設けて立法の源を廣め、大審院を置きて審判の權を鞏くし、且地方官會議を招集して民情疏通の途を披き、漸次に立憲政體の

完成に近づかむことを期せり。當時朝野の心を一にして改進の道を急げる樣は、是等の事實に就て見るも略〻明ならむか。

茲に是革新の氣勢を助長するに少からざる力ありしは、新聞紙なり。こは朝野の間に立ちて、當時にありては活眼達識の士を多く記者として網羅したりければ、其の說く所は幼稚なる當代の社會にとりて光明となり、指針となれるも少からざりしなるべし。新聞の由來を尋ねむに、元治の頃、米人某が横濱に於て毎月數回期を定めて刊行せし『新聞紙』と稱せるが、本邦新紙の嚆矢ならむ。其他維新の前後、京濱間に萬國新聞、內外新報、中外新聞、藻鹽草等の數種ありしが、其頃のものには社說と云ふもの無く、唯公私の報導を秩序なく臚列せしに過ぎず。新聞紙本來の品性は、其當事者にだも知られざりし程なれば、まして社會の是に對する眼も甚だ低かりしものなるべし。されば兎にも角にも新聞紙の體裁を具へたるは、明治五年以後に出でたる東京日々、京濱毎日(今の毎日)報知、朝野、曙の諸新聞に初まれりと謂ふべし。是等新聞の記者は如何なる人々なりしと云へば、東京日々の福地、末松、京濱毎日の沼間、報知の矢野、藤田(茂吉)、朝野の成島、末廣、曙の岡本(武雄)等、當代の名士にし

て、中には然らざる人もあれども、其の多くは何れも西洋思想を抱持し、所謂新文明の先覺を以て自任せし人々なりき。されば其主張唱道は、其說に漸急の差別こそあれ、西洋思想を以て一世を率ゐむとせるものに非ざるは無し。人若し當時の新紙をとりての其論說を讀まゞ、西洋主義、歐化主義が紙面に横流せるを見む。

げに當時の社會に最も勢力ありしは、一言すれば歐化主義なりき。是主義は其の現はれたる形の上より見れば種々あれども、其根本の目的は我邦一切の文物を西洋化するにあり。啻に其の衣と食と住とを洋にするのみならず、啻に鐵道を布き、電線を架し、其外部の生活を洋にするのみならず、國體も、民心も、出來得るならば其髮をも、眼をも、皮膚をも、洋にせむとするにあり。素より當時の急進者流と雖も、斯くは明に其目的を自覺せず唯漠然何とはなしに洋風を欽慕して是に摸倣せしならむも、其形迹に就て見れば、一般に甚だ極端無謀なりしなり。隨て是より漸く尊外自卑の風習を馴致したるは、是亦おのづからなる勢なりき。是の外を尊ぶの傾向は、明治の初年にも已に明に存せしことは、當時の横濱日刊新聞に左の如き記事あるにても知らるべし。

此程横濱に居られし大原前侍從殿、昨十一日九ッ半に御入城に相成る。……さて通行の道筋にては、家々戸を鎖し、細紙札にて目張りをなしたり。通行の時道路にありし士民は皆平伏蹲踞せり。然るに西洋人は、更に我國人の爲す如くせずして、馬上にありて傲然と是を見物するに、誰も咎むることをせず、聊か故障あること無し。實に日本人の開けしこと是にて知るべし。云々。

數年前には、一諸侯の行列を妨げしとて外人を斬り捨てにせし勢なりしに、今は却て外人の無禮を咎めざるを開化せりとて賞贊す、時勢の變遷を見るべきなり。横濱は夙に互市場なりければ、外人崇拜の風も最も早く行はれたるべく、之に反して全國是風潮に靡きしは、明治十年近くにありしも亦怪むに足らず。當時の國民は、外を容るゝに急にして内を顧みるに遑無く、遂に全く我國粹を抛却して偏に外物を尊びしも、一國思想の發達上已むを得ざる一階段なりと謂ふべし。然れども是傾向に對して全く反動無きに非ず。明治六七年の頃に一時盛なりし皇學の如きは、其一例として見るべし。

顧ふに尊皇敬神を以て立てる國學が、幕府と相容れざりしは、自然の勢にして、斯

道の豪傑平田篤胤の如きは殊に殘酷なる迫害を受けたりき。然れども幕府の權威漸く衰へ、其根柢漸く搖ぎそめし頃より、國學者流は多年の壓制に對する反動として、陰に陽に尊王討幕の氣勢を助け、維新の大業を成就する上に於て多少の力を寄與したり。然れば、維新以後の社會が上下を擧げて偏に西洋に心醉し、是大業を成すに力ありし本邦固有の國學を顧みず、以て是を芟除せんとするの有樣を見て、爭でか多少の反動無くして已むべけんや。殊に一方には、朝廷にては國學の徒を用ひて復古の政を助けしめ、明治元年の祭政一致の詔を初めとして、同三年には神靈鎭祭の詔あり、大教宣布の詔あり、教部省を設け教導職を置き、神道國學を布く、上に於て多少力を盡せしかば、歐化主義の大勢動かすべからざる際にも、社會の一部には國學の餘燼全く消えずして殘りき。是餘燼は明治六七年の頃に至りて、一時に揚がり、國學神道の研究を以て東京に遊學せる書生一時頗る多かりき。されど、其勢ひ固より旭日中天の勢ある歐化主義に比すれば、十の一にも足らず、例へば一枚の板を提げて江河の横流を防ぐが如く、何等著しき効果を貽さゞりしは、是非も無き勢なりと謂ふべし。

かくて所謂皇學者流の些細の反對を蹴倒して、歐化主義は一瀉千里の勢を以て進行せり。是際社會上下の事の注目すべきもの多々ありと雖も、是歐化の傾向は板垣、副島、後藤、江藤、四參議の民選議院設立の建白、及び是等の諸氏を中心とせる愛國公黨の組織に到て其頂點に達せりしが如し。

所謂民選議院設立の趣旨と稱するものは、今日より見れば誠に單純幼稚なる思想にして、所詮は歐米各國の政躰の美に眩惑し、民約論的の思想を以て是を解釋し、是を我邦に施さむと力めたるものに過ぎず。我國躰民性の特質、歷史、及び當世の現勢に就いては殆ど顧みる所無し。其觀察素より一面に偏れるの誹を免れず。四參議等の建白の要旨に曰く、方今政權の歸する所、上皇室に在らず、下人民に在らず、而して獨り有司に歸す、是を以て政令百端、朝令暮改、政刑情實に成り、賞罰愛憎に出づ。是を振求するの策、唯天下の公議を張るにあり、天下の公議を張るは、民選議院を立つるにあるのみ。夫れ人民政府に對して納稅の義務あるものは、理として當に其政府の事に關與するの權利あるべし、是れ天下の通論にして、民選議院の據て立つ所の原理なりと。同時に建白者諸氏が組織したる愛國公黨の『本誓』に左の

一條あり、以て當時民選議院を主張したる諸氏の思想の如何に民約論に感化せられしかを知るべきか。曰く、

我輩の斯の政府を視ること、斯の人民の爲めに設くる所の政府と看做すより外なかるべし。而して吾黨の目的は、唯〻斯の人民の通義權理を保全主張し、以て斯の人民をして自主自由獨立不羈の人民たるを得せしむるにあるのみ。

同じ『本誓』の中に、『斯主義は愛君、愛國、一片至誠の上よりの發憤』なりと辨じ、天皇陛下御誓文の旨意を遵奉するの意に外なしと述べたり。されど當時諸氏は、是の如き極端なる民約論的民主思想と兩立すべき『忠君愛國』の道とは、果して如何なるものなるべきかを明かに自覺したりしや、否や、洵に疑はしき次第なり。是時民選議院の主唱者の一人板垣氏が、高知の青年を皷舞して起したる立志社の趣意書を見るに實に左の如き言あり。

夫れ我輩齊しく日本國の人民たり。則ち三千有餘萬人盡く同等にして、貴賤尊卑の別なく、常に其一定の權利を享有し、以て生命を保ち、自主を保ち、職業を勤め、福祚を長じ、不羈獨立の人民たるべきこと昭々乎として明白なり。是權

利なるものは威嚴以て是を奪ふを得ず、富貴以て是を壓するを得ず、蓋し天の均しく人民に賦與する所のものにして、而して斯權利を保有せむことは、亦人民の宜しく勤勉すべき所のものなり。云々。

こはまさしく天賦人權論にして、帝王にも乞食にも同等の權利ありとするものなり。

斯かる極端にして且幼稚なる思想によりて、國家の大事を料理せむとしたるも、所詮は明治初年以來の歐化主義の頂點に達したることを表はせる也。是過激なる歐化主義は、端なくも國民の間に枉屈せる保守主義の反動を惹起し、其結果は遂に民選議院反對論となりて顯はれぬ。こは當時獨逸學者の泰斗なる加藤弘之氏によりて其緒を啓き、西周、森有禮、諸氏是に和して一時新聞紙上の論壇に兩派互に火花を散して戰へり。其意見の要に曰く、制度憲法を創定せむには、先づ邦國今日の世態人情を詳察して、是に恰當適切なるものを撰ばざるべからず。今日未だ進まざるの民智に委ぬるに民選議院を以てせば、是れ愚人をして愚論を闘はしむるに過ぎず。民選議院の主論者は、ルソー氏の說により、政府を以て全く約束より成

るとするも、政府の事を與知するの權利は、納稅と相對する權利にあらず。況や一國の政府は、必ずしも約束に起るものにあらず、古來歷史上の沿革其源を異にする者あるに於てをやと。

是保守說の見るところは、歐化主義者流の見る所とは大に異なれるを認むべし。歐化主義者流は他まで民を以て主となし、政府君主を以て民の爲に存在せるものとなす。然るに保守主義者流は、各國特別の歷史に本きて、政府と人民との關係おのづから定まれるものあるが故に、政府は必ずしも人民任意の約束に成るものにあらずとなす。兩者正に相反す。然れども當時の言論に就て見れば、保守論者が指摘せるは、我政府と人民の關係は歷史的に成りて歐米諸邦の比にあらずと、漠然と言へるのみにて、一も國躰と云ふことに言到せず、想ふに政躰と國躰との差別の如きは、其の深く區別せし所に非ざりしならむ。且つ我邦にありて、『政府と人民との關係』の如何なる點が、如何に歐米各國と異なるか、其歷史上の沿革の那邊に彼此の差ありや、等の疑問に對する精細なる解釋に至りては、是等の論者一言も說き及ばざれば、其說に果して如何程の確實なる論據ありしやも知り難し。想ふに唯ふ

漠然たる信念と觀察とに本き、其保守的感情に導かれて、歐化主義の極端說に反對せしに過ぎざるべきか。

民選議院に反するものには、尙ほ早しとするものと、絕對的に非なりとするものとの二種ありしが、廟議は遂にかの五事の御誓文に本き、欽定憲法制定の詔を奏請し（九年九月）、後に到りて國會開設の期をさへ定めたり（十四年十月）。こは素より萬機公論に決する當初の御誓文を貫通する聖旨に出づと雖ども、抑〻又一世輿論の向ふ所を容納させられたる大御心に依らずむばあらず。

政治上に於ける歐化主義の流行は、國民思想全躰の反射とも見るべきものなれば、そが社會の內部に於ける影響も亦推し測らるべし。されど社會の上に於ては、一國の政躰に於けるが如く直接の利害未だ甚だ明かならざるを以て、是れに反對する主義も亦現はるゝこと比較的に遲かりき。されば民選議院反對の聲可成りに喧しき時にも、帝政黨の如き保守主義の政黨の現はれし時にも、君父に對する義務より自己に對する義務を先にせる勸善訓蒙、智氏家訓等の譯書は依然として倫理教科書として國民教育に用ゐられ、殊に西南戰爭終を告げて、西洋心醉の政治家

內閣を組織するに及び、西洋の文物は上下の社會を擧げて歡迎せられたり。自由主義の政黨が其機關新聞紙上に鼓吹せる民權論自由論は、依然として一部の社會を司配し、其首領が『板垣死すとも自由は滅びず』と叫びたる言葉は、改革に熱心なる人々には殆ど聖者の福音として傳へられき。天賦人權の說は更に男女同權の論を產み出だし、女子にして所謂憂國の志士と共に囹圄の人となるものすらあり。革命に關する飜譯小說は、盛に讀まれ、リットン、ヂスレーリ等の政治小說亦盛に世に出でき。當時和漢學者の間に多少の反動はありしかども、左したる效果もなく、從來の漢字を排せむとする『かなのくわい』さては國字をも共に捨てむとする羅馬字會等、踵を接して起りき。獨り學術の上にて、西洋の我に優れるのみならず、其文學にまれ、美術にまれ、我に取るべきもの無しとせられたれば、和漢の古書畫は殆ど其價を失ひき。西洋風の假裝會、舞蹈會は盛に奬勵せられ、大學々生は女學生と混同して英語にて忠臣藏を演じたるも是頃なり。西洋人と云へば、何處にか我よりも高等なる人間の如く思はれ、社會一切の事物の中にて我に取るべきもの殆ど無しと思惟せられき。斯かる時に弘道會の如き日本固有の道德主義を唱ふるもの起り

たれども、其の說く所は固陋に過ぎて、汎く時の人に容れらるゝに到らず。佛敎界の人々が是等守舊派と連衡し、破邪顯正の旗幟を飜しけれども、基督敎は歐化主義の後援に據りて、前後比類なき全盛を極めたり。世界的眼光を以て日本を觀察すると呼ばはりたる德富蘇峰の『將來の日本』は、一世の讀書社會に歡迎せられ、續て世に出だせる雜誌『國民の友』亦青年書生に愛讀せられき。されども其の唱導したるは民約論の亞流なる平民主義なりき、其系統より云へば、無論歐化主義の一產物にして、我國體民性の特質、本邦固有の美所長所等に就ては、一も言ふ所なかりき。兎に角明治二十年の頃まで、國民思想の大勢を壟斷したるものは、西洋主義、歐化主義、隨て外物摸倣主義、外人崇拜主義なりき。

玆に一言すべきことは、吾人が是迄西洋主義、もしくは歐化主義として呼び來りしものゝ中に就て、審に是を檢すれば、更に數種の小分派の對立を見るべきとなり。其旗幟の最も鮮明なるもの凡そ三あり。第一は英吉利流の功利主義にして、こは福澤氏を首めとして、すべてミル、ベンサム等の說に私淑するものゝ唱ふる所なり。第二は、佛蘭西流の自由主義なり、こは民約論の譯者たる中江氏を首めとして、大井、

板垣、諸氏の祖述したる所なり。第三は獨逸流の國家主義にして、こは加藤、海江田、諸氏の唱ふる所にして、近世獨逸の國家學者スタイン、ビーデルマン諸氏の說に本づく。是中尤も根蔕深く且勢力あるは、無論英吉利流の功利主義なり。然れども是主義は主として社會の實利にのみ注目し、政體等に關する大問題には比較的に冷淡なりき。然るに佛蘭西流の自由主義は、社會の根本的改革の根源を政體の革新に存せりとなし、目前卑近の功利を措きて、驀地に是大問題を捉へて是を鼓吹せり。是れ民選議院の首唱者が福澤氏一派の功利論者に非ずして、主として佛蘭西流の自由論者なりし所以なり。若し夫れ獨逸流の國家論者は、本邦の舊習を打破して西洋の新思想を輸入することに於ては、他の二派に均しと雖も、政治の問題に關しては全く佛蘭西流の自由論者に異り、飽迄君主の無上權を主張し、萬民平等の權理を認めず。是れ民選議院の設立に反對せるものゝ中に純然たる保守論者の外に獨逸學者の多かりし所以なり。社會上の勢力の上より見れば、獨逸派の勢力微々たりきと雖も、政府の要路に當れる人々の中には、彼地に遊びて國家學の講義を聽き、もしくは其感化を受けしもの割合に多かりしを以て、官吏社會には勢力ありき。

かく西洋主義の中にも、おのづから三黨分立の姿ありけれども、民選議院の問題に關しては、繁を避けむが爲め其大勢の上より歐化主義と保守主義の爭として說述せり。先に述べたる如き歐化主義の勢力漸く其極端に近くに隨ひ、二十年間の新敎育新時勢を經驗せる國民は、漸く中心に於て其弊を覺り來りぬ。今や一反動の提起せらるべき時機は方に迫りぬ。是反動の氣勢を代表して蹶起したるものは、雜誌『日本人』を機關とし、志賀、三宅、諸氏によりて唱へられたる所謂國粹保存主義なりき。

國粹保存主義とは如何なる主義ぞと云ふことに就きては、當時區々の論戰ありしが、詮ずる所、其名の示すが如く、我國粹を保存するにあり。既に保存すと云ふ以上は、保存せらるべき國粹の存在を假定せるや論なし。而して特に是國粹を保存すべきを主とする以上は、是を打破するの反對主義を預想する亦勿論なり。國粹保存論者は、素より夫の歐化主義を以て是反對主義と思惟せること明なれども、保存せらるべき國粹の何なるかに就きては、明に說示する所無かりしが如し。唯漠然彼の長を取りて我の短を補ふは、是れ眞に一國文明に裨益する所以なり、夫の一

も二も無く外邦の文物に心醉して、我の長所美所を拋棄するは、甚だ不可なりと說けるに過ぎず。然れば其所說の多少明確を缺きたるより、反對論者より、無差別に歐米の文物を排斥し、我佛をのみ獨り尊しとする固陋なる保守者流と同一視せられたり。こは誠に誤解なるべけれども、其說の消極的方面を說くに精しくして、積極的方面を說くに粗なるが爲に、國粹論者が自ら招きたる廉も多少あるべしと思はる。所詮は國粹其の物の性質に就て、確的なる科學上の說明を缺きたるの弊なりと謂ふべきか。

然れど國粹保存主義其物の價値は如何にあれ、そが國民思想を覺醒し、是れまで徹上徹下に跋扈し來りたる歐化主義の適否に就いて一大猛省を促したる功績は、明治歷史の上に特筆すべき者なり。げに一個の主義の勝敗は、一時の論戰に於て決せらるべきものにあらず、其主義の依て以て起りたる國民思想の根抵にして確乎不動のものならむには、終には最後の勝利を占むべきなり。國粹保存主義は、決して二三氏の創意に與りたるものに非ずして、維新以來歐化主義の爲に多年の屈辱を忍びたる國民精神の自然の發露なりとすれば、根抵たる國民の精神にして衰

へず、渝らざる限りは、依然として其勢力を保持すべし。其名或は變らむ、そを唱ふる人も或は變らむ、其の說く所の說の形も亦或は變らむ、されど其主義の實質に到ては時勢の進歩と共に益々進歩して、決して衰退すること無かるべし。國粹保存主義は慥に是の如き主義なりしなり。

げに國粹保存主義の唱へられたる頃より、國民思想の漸く其方向を轉じ來れることは、掩ふべからざる事實なり。從來にありては、國民の思想を動かしたる主力は、常に西洋思想なりき。かの民選議院の爭論の際にありて、是を主唱せる者は素より論を待たず、是に反對せる主力も西洋學者なりき。國學神道の系統を引ける純粹なる日本主義論者も、是中にありしかど、そは極めて少數にして、特に言ふに足らず、爭論は主として西洋學者の爭論なりき。故に加藤氏一派の獨逸學者が民選議院を尙早とし、若くは非認するにも、其論據は一に西洋の學理にあり、一も本邦固有の國體民情を根據として立論したる者あらざりき。然るに國粹保存主義は、其根本の精神に於いて是等の說とは異り、其立論の基礎を外邦の學理に求めずして、飜て本邦の特質に求めたり。其說は如何に粗笨にあれ、其論は如何に幼稚にあれ、兎

に角獨立の日本思想によりて歐化主義に對壘せしは、實に是國粹保存主義を以て初めとすべし。是點に於ては、是主義は慥に今日の日本主義の先驅たりしもの也。

斯く國粹保存主義の勃興によりて代表せられたる如く、國民的意識は漸く其自覺の域に進みたれども、未だ俄に歐化主義積年の勢力を凌駕する能はず、其爭漸く激しからむとせり。宗教界に於ては、佛教は保守思想と相呼應し、以て歐化主義と密接の關係ある基督教を攻擊して甚た力め、漢學は國學と相携へて遙に佛教に聲援せり。廿二年二月に於ける憲法の發布は、我欽定憲法の性質を明にし、かの英佛諸國に於ける諸種の憲法と日を同うして論ずべき者に非ざるを知らしめしかば、多年佛蘭西風の民約憲法を望みたる自由論者は、定めて多少其の空想したる所と違ひたるを驚きたるべし。然れども是より政體上に關する急進論者の聲は、憲法解釋の上に多少の異議を挾むの外、氣勢頓に衰へ、獨逸的國家學と抱合せる一種の國躰論は、汎く國民の政治思想を其根本に於て統一せり。然れども社會上教育上に於ては、西洋主義猶ほ未だ力を失はず、國學、儒教亦一方に割據して各〻其雄を競ひ、人々其の信ずる所によりて左支右吾し、一般國民は其の適歸する所に迷へるの

觀あり。偶々教育勅語の煥發するあり、國論是に於て、一定し、忠君愛國、擧國一致を以て國民道德の大旨趣として奉體するに至れり。是勅語の教育上、社會上に於けるは、猶ほ憲法の政治上に於けるが如し、共に人心を統一し、國民思想の大方向を規定するの一大要素なりき。(上三二二頁以下參照)

斯く記し來れば、我皇室が實に我國民全體の依賴する大支柱大中心なるの事實は、いよ〳〵明なりと謂ふべし。先に維新草創の際、擧國亂離して爲す所を知らざるに當りてや、かの五事の御誓文を以て天地億兆に誓はせられ、茲に明治新文明の大方針を示し、民をして其の向ふ所を知らしめられき。西洋心醉者流が、民選議院の設立を建白するや、國體の特性、民情の現態を鑑みさせられ、假すに年月を以てし、國民をして其準備を致さしめ、更に期に先きて欽定憲法を發布して我國體の萬邦に冠絕する所以を示し、以て國民の覺悟を定めさせられ、今や又維新以來麻の如く亂れたる德教の爲に、是千古不磨の大詔を下し給はり、民をして國民道德の大本歸趣を知らしめ給ふ。實に國民の盲動を導き、各〻其正路に就くことを得せしめ給ふ叡慮の程は、我國民の幾重にも感銘奉體すべき所なり。

遮莫、教育の勅語一ひ下りてより、從來の國粹保存主義が、一轉して國家主義の思想となり、益々其全捷の途を急ぎしには反して、自由平等を言ふと厚くして、忠君愛國を說くこと薄かりし從來の歐化主義は、今や其所信を枉げ、勅詔の示し給へる國家主義の道德に調攝せざるべからず。西洋心醉の風是より漸く衰へ、基督教亦漸く其世界的性質を改めて國家的となり初めぬ。國家主義は其勢に乘じて次第に歐化主義の城壘に迫り、茲に端なくも最も激烈なる爭論を惹起しぬ。所謂教育宗教衝突論是れなり。時方に二十五年の暮なり。

是爭論は、讀者の記憶せる如く、井上哲次郎氏が宗教と教育との關係に就いて教育時論記者に對する談話に其萠芽を發し、次で『教育と宗教の衝突』と題する一論文に枝葉を成し、而して當時の宗教教育社會に、民選議院の爭論以後に倫ひなき論戰の花を咲かせたるものなり。氏の說の要に曰く、(第一)耶蘇教は國家の差別を認めず、其の說く所の道德は純然たる出世間の道德なり。是を勅語が忠君愛國を以て國民最高の德と爲せるに比すれば、全く兩立し難きものなり。(第二)耶蘇教は既に出世間の事を主とすれば、常に重きを未來に置き、現世は僅に未來世界の門戸に過

ぎずとなす。是れ敕語の精神が全然現世的なると相容れざるなり。（第三）耶蘇教説く所の愛は無差別的博愛なり、然るに敕語示す所の愛は差別的の博愛なり。是を以て二者互に衝突するを免れず。（第四）耶蘇教の缺點として特に著しきは忠孝を言はざる事なり、啻に言はざるのみならず、往々是に反する教旨あり。是れ敕語が示す所の克忠克孝の教と容れざるなりと。氏は博引旁證、最も鋭利明快なる論法を以て其旨趣を敷衍せり。是れ實に基督教徒の死活問題を含蓄せる最も手痛き攻撃なりしを以て、本多、横井二氏を初めとして、苟も耶蘇教内に身を置くものは、筆に口に極力其論を駁し、就中高橋五郎氏の如きは『僞哲學者の大僻論』と題する長論文を雜誌國民の友に掲げ、井上氏の論旨を反撃し、且つ讒謗罵詈を極めたり。和漢學者及び佛教徒は是に反して井上氏に左袒し、基督教徒に當り、甲論乙駁、歸結の決すべき模樣なく、裁斷を後年の輿論に殘し、數月を經て漸く鎮靜せり。當時是爭論の盛なりしことは、實に驚くべきものにして、新聞雜誌として是爭論を掲げざるはなく、知名の學者にして賛否の聲を發せざるは無き有樣なりき。以て如何に是問題が當時の社會に重きを爲せしかを見るべし。其源は井上氏にありと雖も、實

は是れ歐化主義を代表せる基督教と國家主義との格鬪にして、殊に防禦の位置に立てる基督教にとりては、啻に盛衰の問題たるのみならず、實に死活の問題を包有したるなり。

是爭論の勝利何れにありしや、單に議論上の爭としては、基督教徒にもそれ〴〵道理の取るべきあり、勿論最初より攻勢を取れる井上氏のかたに多少の優勢を認むと雖ども、何れを全勝、何れを全敗とは決し難かりしに似たり。然れども事實の上より見る時は、基督教徒の勢力是より俄に頓挫して、全く教育上に其根據を失ひ、唯其堡壘を守りて自活の道に汲々たるの勢あり。偶〻同教の中に改革の士あれば、そは從來の世界主義を捨てゝ其説を國家主義に調和せむと務めたるの人たるに過ぎず。基督教の逢迎主義是より漸く明なり。是に反して國家主義の道德は、是論戰によりて愈〻其教育上の基礎を固うし、其勢力延いて廣く社會の四邊に及び、漸く一世の思想を統一するの途に就けり。

然れども當時國民一般の思想未だ幼稚にして根柢より國家主義の眞精神を會得すること能はず、其の所謂國家主義なるものも、形式上より勅語を解釋し、漫に自

尊の氣習に驅られたるの形迹無きにあらず。先覺の士にありては、素より是事なかりしなるべしと雖も國民の全體に就いて是を視れば、所謂國民的意識は未だ十分明瞭に醒覺し了せられざりしに似たり。此事は當時の論文記事を一讀して知るべしと雖も、尤も手近き例は、佛教徒が教育宗教の衝突論に際して專心鋭意井上氏を援助し、共に基督教徒を攻擊したることなり。是れ今日より見れば甚だ笑ふべき矛盾なるにも係らず、當時の名僧智識達が、眞面目に是に從事したるを以て見れば、當時の人には國家主義の甚だ曖昧の中に誤解せられありしを想ふべし。そを如何にと云ふに、抑〻先に掲げたる井上氏が、據て以て基督教に大打擊を加へたる四個條の何れか移して以て佛教攻擊の好利器とならざるべき。井上氏は耶蘇教を攻擊して曰く、國家の差別を認めず、純然たる出世間の道德を以て唯一の道德とする宗教は、忠君愛國の上に立つ勅語と兩立すべかずと。而して佛教は實に是の如き宗教にあらずや。井上氏は耶蘇教を攻擊して曰く、重きを出世間に置き、現在世を以て未來世の門戸と爲す如き宗教は、勅語の現世的精神と相容れずと。而して佛教は即ち是の如き宗教にあらずや。井上氏又曰く、平等無差別の博愛を說く宗教は、差別的博愛を說く所の勅語と正に相反せり。又忠孝を以て道德の基礎となさゞる宗教は、即ち勅語の敵なりと。是れ亦やがて佛教の性質と正さに相適合す。是によりて見れば、井上氏は特に耶蘇教に就いて言へりと雖も其實は佛耶兩教に對して均しく打擊を加へたるなり。畢竟氏が擧げたる四個條の如きは、佛耶兩教の通性たると同時に、一切宗教の本旨なれば也。故に佛教徒たるものは、基督教徒と共に氏の說に對して駁擊せざるべからざる位地にありしなり。然るに事是に出でず、却て井上氏に從て基督教を攻擊し、敢て恠まざりしは實に奇怪千萬なりと謂はざるべからず。是れ佛教徒は、其の多年仇敵視し來りたる基督教が、偶〻攻擊の對象となりたるを見、欣喜の餘り、一も二もなく、己れの敵とする基督教を攻擊するものは即ち己れの味方なりと夙斷し、そが却て佛耶兩教の共同の敵なることに心附かず、其の淺慮短見眞に憫笑するに餘りあり。所詮は基督教攻擊の一語に眩惑して、其攻擊の趣旨の如きは、一々精細に吟味するの遑なかりしに依るとは云へ、抑〻又教育勅語が國民道德の原理たる所の國家主義の性質を明にせず、隨てそれと宗教との關係等の諸問題は、未だ解了するに及ばざりしなり。想ふに是佛

教の援助を受けたる井上氏は、中心意外の思ありたるべく、又早晩佛教徒が基督教徒に對したると同一の攻擊は、即ち自家に對するの攻擊なることを知覺するの秋あるべきを思ひて、彼等が自己の淺見に慚愧するを氣の毒に思ひしならむ。而して當時は知らざる爲して、佛教徒の來援に任せしが如きは、氏も亦策士の術數を有せりと謂ふべし。

何は兎もあれ、是一事にて如何に當時のやゝ教育ある人すら、國家主義の眞精神に通せざりしかを想見するに足る。當時史學社會に喧しかりし、久米氏の『祭天の古俗』と題する一論文に對して、國學家、神道者流が學術界には許すまじき無法の迫害を行ひしにても、國家など云ふことの國學者間にも解せられざりしを見るべし。されば、歐化主義も亦是罅漏に乘じて尙ほ其餘勢を保ち、動もすれば捲土重來の勢を示したり。是時に當りて、外部より思ひ掛け無き一大刺擊の國民思想を根底より搖撼し、所謂國民的意識に明白なる自覺を與へたるあり。二十七八年に於ける日清戰爭即ち是れなり。

言ふまでも無く、日清戰爭は我邦が東洋平和の維持の爲に國命を賭して鬪ひたる國家生存上の一大危機にして、隨て本邦政治史上の最大事實たると共に、又明治思想史の局面を一變したる契點なり。こは最近年の事なれば、精しく說くの要は無かるべけれど、是戰爭は社會の上層下層に論なく、孰れの方面に向ても最も活潑なる國民的運動を催起し、多年理論、否寧ろ空論によりて敎育せられたる國民に向ひ、死活、興亡の嚴肅なる事實によりて、國家國民の眞意義を敎へたり。國家と世界との關係は如何に、個人と國家との關係は如何に、世界に邦し、國家に人となるに於て、國家と國民とは什麼の覺悟無かるべからざるか、一國の道德主義は如何なるものならざるべからざるか、是等の問題を、今や國民は其血と涙とを以て經驗し、研究し、且解釋せり。是に於て敎育勅語は更に新なる光明に照され、多年模稜の間に半信半疑したりし忠君愛國の眞精神は、今や最も適切に會得せられたるを覺えぬ。是の如くにして國民的意識は、從來に較ぶれば、一層明瞭に、一層具象的に又一層生命と活力あるものとなれり。素より戰勝の結果として、一部の國民の間に自尊自負の氣象を生じ、隨て排外の風を示したるもの無きにあらずと雖も、こは國民全體の上より見るも又一世の先覺にして國民指導の位地に在るものに就て見るも、極

めて少數、且一時的のものに過ぎざりき。兎に角所謂國家主義は日清戰爭以後に及び、他年對壘し來りし歐化主義に對しておしなべて全勝を收めたり。

是に於てか國民思想は更に一歩を進め、將來海内にのみ注ぎて自家域内に其反對者を認めたる眼を轉じて、今は即ち廣く世界に注ぎ、顧みて世界の一國として我日本を觀察せむとせり。先には國民思想は内に爭ひたり、今は則ち外に向ひたり。素より國内に於ても、例へば世界主義と國家主義と個人主義等の爭ひはありしかど、そは從來の如く國粹保存主義と歐化主義との爭の如く、其眼界國内に終始せしものゝみには非ずして、廣く世界に對して一國の位置を考察したるより起りたりと見む方妥當なるべし。されば、外面上の形迹は相似たれども、内面上の精神に於ては大に相異るものあり き。世界主義、個人主義を唱へて國家主義に反對するものも、其の說く所は、從來の如く徒に西洋に心醉し、歐化を唱ふるものにあらずして、少くとも表面上にては世界の大勢より打算し來りたる主義なりと稱す。されば二者の爭は何れにせよ、謂はゞ共に日本の世界的觀察に本づけるものにして、從來の歐化主義と國粹存保主義との爭の偏狹なるの比に非ずと謂ふべし。

既に世界の一國として日本を觀察し、悠久なる其前途の爲に國民の實行主義を規定せむとする以上は、廣く知を世界に求め、而も國體民性の發達に裨益する程のものは、如何なるものをも是を攝取し、又國利民福の增進に有害なるものは、如何なるものにても是を排斥するの覺悟なかるべからず。されば、是廣濶なる國家主義者流の眼には、地の東西によりて好惡の情を挾むなく、時の古今に隨て褒貶の意を寄する事無かるべし。是公平無私なる取捨撰擇よりして、茲に從來國家主義の方法上に一新生面を拓き、爲に社會の人心を一時攪亂するの已むべからざるに到れり。是れ明治思想史の上に於ける一大進歩として特筆大書すべきものなり。

そを如何と言ふに、從來國民間の思想の爭に於て明かに現はるゝが如く、明治十年代に於ける西洋主義と保守主義との爭にありては、其區別の根據は主として西洋と日本との土地の差別にありき。故に保守者流は、西洋のものとし云へば一も二もなく一概に反對し、翻て國學、神道、漢學、佛敎等は古より日本に在來せりとの廉にて聯合し、力及ばずながら西洋主義に當りたり。二十年前後の國粹保存主義にありても、亦多少是跡あり。即ち是主義に同情を表したるものは、國學者、神道家、漢

學者、佛教徒なりき。蓋し彼等は歐化主義とし云へば、彼等と先天的に相容るべからざるものと思惟し、日本在來のものとし云へば、先天的に一致すべき性質のもの と速斷し、單に西洋、東洋の名稱の差等によりて離合したりし也。是れ他なし、彼等の目的は歐化主義其物を攻擊するにあり、されば其事業は國家國民の將來の爲に確乎たる道德主義を造ると云ふが如き遠大なる理由ありて爲されたるものに非ざれば也。謂はゞ彼等は何の理由もなく、何の目的もなく、(もし强いて理由を求むれば、歐化主義の跋扈は彼等にとりて不利なるが故に)主として名目の上に就いて所謂毛嫌ひを爲したるなり。然れども、今や偏狹なる盲動は國民的意識の覺醒によりて其の謂はれ無きこと漸く明かになれり。國民は其國粹の保存と云ふが如き事の以上に於て、我國家國民の世界的位置と、其前途と云ふ廣大且つ嚴肅なる問題に遭遇し、玆に其國民的大主義を樹立するの必要を自覺しぬ。今や徒に我佛獨尊的の陋見を固守すべきに非ず。如何に古より我國に存在せしものにても、又我邦に固有せるものにても、苟も將來の國家國民にとりて益無きもの、若くは害あるものは、猶豫無く排斥せざる可らず。謂はゞ世界一切の事物に就いて、名目の東西

に拘らず、其所在の彼我に泥まず、無私公平の秤量によりて是を取捨し、撰擇せざるべからず。是を以て從來味方なりと思ひて相許したるものも、今や案外にも兩立する能はざる仇敵なること、又は從來不俱戴天の讎として相嫉視したるものも、今や思ひがけなく一堂に握手する等の奇觀を呈するに到れり、げに從來の有樣に比すれば、奇觀なりと雖も、實は當然の事にして、敵味方の區別なく其名目に泥みて同居したる是迄の有樣こそ、却て奇觀と云ふべけれ。是を要するに、是迄は單に名目の異同によりて離合せしものが、今や其內部の本質の如何によりて去就を決したるなり。是新運動の主動者となりたるものは、素より國家主義論者にして、そが據て以て斯く一切外物に對して公平なる撰擇取捨を爲したる標準は、我國體及び民性なりき。是國民思想の新運動を代表して興りたるものを日本主義となす。

是れ昨三十年五月の事なり。

日本主義は以上述べ來りたる如き氣運に驅られて起りたるものなれば、そが國民思想に對する態度は、實に雄大なるものなり。即ち素是れ一定の標準に本きて、全國民の思想を統一せむと企つるなれば、其の關係影響するところ廣く且深し。

而して是主義の所謂一定の標準なるものは、我國體及び民性の科學的研究に本けるなれば、其取捨撰擇も、從來のもろ〳〵の主義に見る如く、杜撰粗笨にして菽麥を辨せざる僻ひにあらず、隨てそが一時社會を動かし、物議を釀したるも避くべからざる勢なりと謂ふべきなり。是新運動は明治思想の發達上に最も重大なる意義を有せりと思惟するを以て、聊か其主張者の說を紹介せむに概ね左の如し。

日本主義とは、日本國民の守るべき主義と云ふ義なり。精しくは國體民性に基き、皇祖建國の丕圖を體認して其國家的大理想と國民的大抱負とを實現せむことを期する所の實踐道德の主義を謂ふ。大凡そ人種土地を異にする所の國家國民は、其發達の理想亦相同じきを得ず、故に世界の人文は一規にして律すべからず、國家國民の眞正なる發達は、其國民の自覺心に基かざるべからず。日本主義は、是の所謂國民的意識の上に立てるものなり。蓋し君民一家は我國體の精華なり、實に是れ我皇祖皇宗の宏遠なる遺謨に基き、萬世臣子の永く景仰體認すべき所なり。されば國祖及び皇室は、臣民たるものが無上の崇敬を捧ぐべき所なり。是故に日本主義は國祖を崇拜して、建國の理想を奉體せむことを務む。又我國民は由來公

明、開濶、有爲、進取の人民なり、退嬰保守と憂鬱悲哀とは決して其性に非ざるなり。されば日本主義は光明を旨とし、生々を尙び、夫の退讓を重じ、禁欲を訓へ、厭世無爲を勸むる所のもろ〳〵の敎義を排斥す。又億兆一姓に出で、上下其心を一にし、內に臨みては、棣萼相親み、外に對しては每に國威を擴張して、古來未だ曾て外侮を受けず、是れ我國の宇內に冠絕せる所なり。是を以て日本主義は平時にありても武備を尙び、いよ〳〵國民の團結を鞏固にせむことを務む。然れども妄に自ら尊びて他を容れざるに非ず、國內を修めて海外に臨み、與邦と共に永遠の平和を樂まむことを希ふ。されば日本主義は世界平和の維持を希ひ、更に進みて人類的情誼の發達を期す。要は我日本建國の大理想を發揮し、我國民の大抱負を實現せむとするにあり。

日本主義の新運動は、茲に述べたる如く、國體と民性とに基けるが故に、差當り其攻擊の衝に當りたるものは、基督敎、佛敎にして、儒敎、獨逸風の形而上學、及び佛蘭西派の自由主義も亦多少排斥せられたり。而して他方に於ては、獨逸流の國家主義と英吉利流の功利論とは、大體より歡迎せられたり。そを如何にと云ふに、日本主

義は、我皇祖建國の丕圖の中に、我國家主義の大理想を認め、又其歷史上の研究に本きて開濶、生々、尙武等のもろ〳〵の現世的性質を國民の特質として認めたれば、出世間的、非國家的なる基督敎と佛敎とが、先づ排斥せられたるは極めて自然なりと謂ふべし。かの宗敎々育の衝突問題の際、基督敎と共に業既に打擊を被らざるべからざりし佛敎は、是日本主義に於て遂に其の必然の運命に遭遇したるは、是非も無き次第なりとこそ謂ふべけれ。而して日本主義主張者の重もなる一人は、實に往年敎育宗敎衝突論を草して意外にも佛敎徒の來援を受けたる井上氏なるにても、佛敎徒が今更の如く是打擊に驚きたる迂濶さは知らるべし。若し夫れ、從來常に歐化主義の先天的反對者として、維新の初めより我固來の思想と提携し來りし儒敎が、是日本主義に歡ばれざるのみならず、却て排斥せらるゝの傾きあるは、全く是敎の保守退嬰的なるところがやがて日本主義の進步的なる所と衝突すればなるべし。然れども日本主義は、儒敎の全部を擧げて攻擊するものに非ず、忠孝を尙び、現世的なるの點に於ては、二者其軌を一にせるものなれば、其反對は佛耶兩敎に於けるが如く烈しからざること、亦自然の勢なるべし。又是主義と佛蘭西流の自

由主義との相容れざるは、論無きことなり。さりながら憲法發布以來、是種の極端論は、政治界には殆ど其跡を留めず、唯社會の中に一種の社會主義となりて存するに過ぎざれば、其反對も他に比すれば微々たるを免れず。獨逸の純理哲學は學理の研究としては擯斥せらるゝに非ず、只世の空論を高尙となし、毫も實世間の事に關與せざるもの是派の學者に多きが故に、是點に於て間々日本主義論者の攻擊を被れるのみ、無論根柢的に相容れざるものにはあらざるが如し。是れに反して、獨逸風の國家論が歡迎せられたるは、最も自然の事にして、現に憲法を初めとし、今日の國家主義論者の說は主として是れに據れり。是れ獨逸のと我の國體とは、英佛等のそれよりは比較的に我れに近きが爲なるべし。然れども日本主義論者の國家論の根蔕は、飽迄我國の歷史に本くものにして、只其性の近き所に從て彼邦の說を參照したるに過ぎざるなり。次に英吉利の功利論の歡迎せられたるも、そが我國民性の現世主義と近ければなるべし。然れども日本主義の現世主義が、かの福澤氏一派の拜金宗抔と同日に論ずべきものに非ざることは、是派の人の所論にて十分に世の誤解を辨ずるに足るべし。

言ふまでも無く、歐化主義の流れを汲める洋行歸りの人を首めとし、宗教により衣食する僧侶牧師は言ふを待たず、元來國粹保存主義の系圖を引ける人々の中にも、眞に國家國民など云ふ事に就いて科學的意義を解せざるものは、其外面の運動が所謂八ッ當りに類するに驚きて、何れも反抗の氣焰を揚げ、曾て宗教々育衝突論の當時、高橋氏が井上氏に向て爲せるが如く、日本主義論者の人身攻擊をすら敢てするを憚らず、論難に繼ぐに罵詈を以てし、罵詈に繼ぐに讒誣を以てし、百方其勢を挫かむと力めたり。日本主義論者の中にも一時の客氣に驅られて詭激の言論を弄びしものありしは、世をして是新運動の性質を誤解せしむるの力ありしが如し、是れ同主義の人々の心潛に嘆惜する所なるべし。されど是等は、最近時に關はる事なれば、其影響の大小、勢力の消長は、今日豫め知り難きこと勿論なり。されば茲にはすべて臆說を爲さゞるべし。

さはれ、記者が是主義に對する私己の關係を離れ、上に述べ來りたる歷史的觀察にて明かに下し得べき程の判斷によれば、日本主義の運動は決して一二人の創意に成るものにあらずして、實に深遠なる根據を國民性の中に有するものなり。其

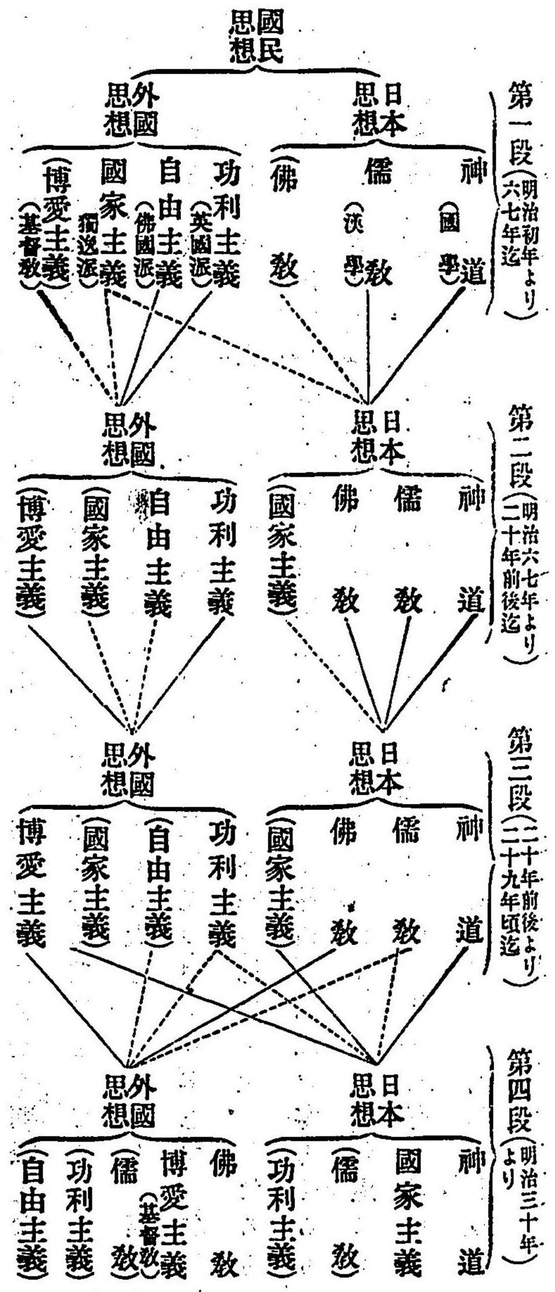
系統を言へば、そは慥に明治初年の所謂皇學によりて代表せられたる保守主義の流を汲めるものなることは明なれども、其性質に於て殆ど見紛ふまでに進歩し來れることは、猶人間が猿より出でゝ而かも其性質に大なる差別あるが如し。皇學的思想は、其本を糺せば本邦歷史と共に初まり、物部守屋の排佛論となり、和氣清麿の忠節となり、菅原道眞の和魂漢才論となり、眞言天台以下の佛教諸宗派を日本化する中心勢力となり、北畠親房の神皇正統記となり、德川時代の諸國學者の神道國教論となり、一時維新の改革に遭て其力を失ひ、更に十九世紀新文明の光によりて、新に其赫灼たる本來の光輝を反射し來りたるものなり。今の日本主義は、やがて其系統の正嫡にしあれば、其根柢は決して拔くべからず、其枝葉花實は年と共に盛になり行くべき也。げに是れ迄皇學、國粹保存主義等の幾度か起伏せし如く、一時の汚隆は或は是れ無きを保せじ、又其名稱の如きは或は渝ることあるべし、唯それによりて代表せらるゝ精神實質に到ては、時と共に發達進歩して、早晩遂に其當初の大目的を實現するの期に遭遇すべきは蓋し疑を容れざるなり。

以上は、明治維新このかた三十年間の國民思想變遷の一班なり。一國の事は素

より多樣、多端、又多岐にして、必ずしも唯一の主義方針によりて活動するものにあらざれども、概して言ふ時は國民の思想が其道德主義によりて決定せられ、隨て間接に其萬般の活動を影響すべきは、毫も一個人に於ける場合と異ならず。されば一國民の根本思想の變遷として、主として其道德主義の發達を述ぶるも、强ちに不倫とは稱すべからじ。是短論文は、素是根本思想に就いて讀者をして一目瞭然たるを得せしめむことを期したれば、故らに煩瑣繁縟の事實を臚列して、さなきだに解し難き思想史に一層の複雜を來たすを欲せず。想ふに、讀者は是によりて、最近三十年間の思想史に就いて少くも大體の觀念を得たるならむ。若し夫れ、是根本思想の變遷が直接に又は間接に如何に政治、經濟、敎育、實業及び一般社會の狀態に影響したるかは、是より逐次に述ぶる所に就て仔細に考察すれば思半に過ぎむ。

最後に讀者をして是發達の徑行を一層明に了解せしめむが爲に左の圖表を添へたり。

明治思想發達一覽表



是表は、假りに三十年間の思想の變遷を四段に分てり。第一段は明治初年より六七年の頃に至るまで、即ち所謂皇學の幼稚なる保守的反動が、幼稚にして而かも强大なる歐化主義に對立したる時代なり。第二段は、民選議院首唱者の政體改革論に對し、保守論者が獨逸流の國家主義論と共に前代に比してやゝ强硬なる反抗

を試みたる時代なり。第三段は、二十年前後に於ける國粹保存主義の勃興、及び其結果として是二主義がやゝ鮮明なる反對を現はせる時なり。二十五年に於ける教育宗教衝突論も、亦是時期に屬すべし。第四段は、昨三十年春に於ける日本主義の新運動が國躰民性を規準として國民思想の統一を唱へたるときより、今日及び今日以後に及ぶ。是時期にありては、日本思想と外國思想の區別全く明瞭となれり。精しくは本文と圖解とを對照すべし。圖中の線は、各時期によりて諸種の思想の離合を示す。中に就き、連線は其量に於て點線よりも大なるを表はし。括弧内にあるものは點線と共に其量の小なるを示す。又是表の中に日本思想と名けたるは、日本固來の思想及び是の思想が中心となりて外來の思想を統一したるものを總稱す。一言すれば日本固有の思想が主となりて外國の思想を客とせるもの也。而して是の日本固有の思想の中にても中心核子となれるものは、神道に本ける國家的觀念なり。又外國思想とは外國の思想を主として日本固有の思想を客とせるものを云ふ。讀者もし第一段より第四段までを通覽する時は、國民的意識の漸く明瞭となるに隨ひて、是二個の思想の差別も亦次を逐ひて明晰となり、殊

に日本思想が我國躰民性の歴史的研究に本き、外に向ては外來の文化を同化し、内に於ては異分子を淘汰せる形迹は尤も著しきを視るべし。但し是れ素より大躰の觀察なれば讀者も其心して覽るべきなり。

（卅一年四月）

（編者附記。右の一篇は先に掲げたる「日本主義」、「國民精神の統一——帝國憲法、教育勅語及び日本主義」及び「國粹保存主義と日本主義」の三篇と重複する點多きも、著者が此等の思想を以て明治三十年間の思想を達觀したる一貫の觀察として、再び之を採錄す。）

過去一年（明治三十一年）の國民思想

一　明治三十一年以前の國民思想

歳革まり人老いたり『新しき日本』も何時しか三十一の齡を數へ了りぬ。（以下は上記「明治思想の變遷」を概陳したる者なるを以て畧す）

二　日本主義と世界主義

吾人の所謂日本主義とは、一言すれば日本の國性國体を第一義とし、外より來れる一切の勢力を箇中に調攝し同化せむとする主義の謂なり。漫に世界の文明と謂ふ、こは抽象の觀念に過ぎず、實在せるものは獨り國民の文明あるのみ。人の人たる所以に於て同ずる所あるべきは言ふまでも無し、されば抽象の觀念としては素より天下に人道ありと謂ふを妨げじ、されど人道の名によりて存在する實際の勢力は是れある無き也。若し夫れ理想としては人類平等の生活を希望するも不可ならじ、されど是に到達する方便としては、換言すれば實際上の主義としては、差別見に據るの外無く、所謂差別見の標準は國家なり。されば日本主義は日本國家の繁榮進歩を以て國民倫理の規準となす。實踐道德の規準としては國家以外に求むる所無し。

斯く日本主義が國家を以て實踐道德の規準と立するの故を以て、直に個人の幸福を蔑視し、人道の發達を希望せざる主義と見做さむはいみじき誤謬なるべし。

個人を離れて別に國家無く、隨て個人の幸福を損害して別に國家の繁榮を希ふの矛盾なるは言ふ迄も無し。又同じ人類として生を斯世に享けたるもの、若し得べくむば博愛平等の生活を營まむの願は、恐らく人類先天の性情なるべし。日本主義爭でか如上の眞理を認めざらむや。唯是等の目的に到達する實際上の主義として、國家に至上の權能を認めたるのみ。そは異なりたる人種が異なる風土に邦して茲に數千年の歷史を經由せば、おのづから國性國体の他邦に殊なるものを生ずべく、隨て世界平等の主義を以て直に是に臨むは、即是國性國体を無視し、其邦の自然の發達を拘束するの結果、所謂角を矯めて牛を殺すの弊に陷らむを恐るればなり。又個人主義によりて直に個人の幸福を現じ得べかりし時代は、既に〳〵歸らざるべう過ぎ去りたり、今の世にありて人類の集合生活は國家を單位とす、されば個人の幸福は國家の富强繁榮を通じて間接に到達し得べきのみ。如上の意味に於て、國家は個人の幸福を實現し、人道の發達を期成する方便なりと觀むも慥に一面の眞理なるべし。されど同時に認むべきは、國家が是場合に於て唯一の方便なることなり、既に唯一の方便ならむには、即がて是れ實際上の目的にあらずや。

是れ日本主義が同時に國家主義たる所以なり。

若し夫れ世界主義に到ては全く別種の原理に本くを見る。是種の思想によれば、世界上の人類は其の等しく人たる所以に於て歳時方處の差別を容るべからず、人類生存の目的素と平等絶對なる人道の圓滿なる實現に存する以上は、國性國体の差別見に執着し、國家を以て倫理の標準と爲さむは偏狹なるに過ぐ、人類の道德的意識の欲求する所のものはさる偏狹なるものに非ず、遙に高上に、遙に偉大なる理想にあるなり。畢竟國家は個人の爲に存するもの、個人が國家に盡すべき義務あらば、そは個人自らの幸福に利益あるが爲のみ。人の人たる所以の目的は單に其人の住する國家の幸福を圓滿に現ずるに依りて果さるべきものに非ず、唯吾人人類が世界永久の眞理と認めたる所に從ひて、天地と共に悠遠の生命を保つにあるのみ。かの國家主義の如きは、國家てふ一の形式を捉へ來り、强ひて個人を拘束せむと擬す、取も直さず方便の末に走りて目的の本を遺れたるもの、謬れりと謂ふべし。我國民はその人たるに於て世界の何れの國民とも同じく、我國家はその國たるに於て世界の何れの國家とも異ならず、さらば國性國體を言ひて偏に差別の

一面に拘泥せむは謬らずや。忠君愛國を以て實踐倫理の標準と立するも、亦やがて人道究竟の大理想を蔑視して一國家一國民の小理想に執着するものと謂はざるべからず。且夫れ世界には世界の大勢あり、鎖國攘夷の昔ならばいざ知らず、苟も世界の一國として國際關係の中に存立せる以上は、是大勢に背戻せむは極めて無謀のわざなるべし。日本國民は如何に忠勇なりと稱するも、土地小にして國貧し、是貧小を以てして世界列國の强大と並立せむと欲せば、世界の大勢を迎合し、隨伴して、敢て抵抗せざらむことを務めざるべからず。若し國性國體にして是世界の大勢に適せざるものあらば、宜しく我を枉げて彼に調攝すべし、是れ今日の世に處し、我國家の安全及發達を企圖する上に於て、萬已むを得ざるなり。かの日本主義、及び國家主義なるものは己を見ること餘りに高くして是主客の辨を顚倒せり。

是の如きは所謂世界主義の主張なり。是種の論者の中には、或は世界主義の名によりて呼ばるゝを好まざるものあらむ。されど世界を先にして國家を後にする點に於ては、慥に是名稱に適應せるもの也。

三　兩者の比較

今是世界主義と先に述べたる日本主義とを比較せむか、目的に於ては兩者必ずしも相容れざるにあらず、そは個人を省いて別に國家無きを認むる點に於て兩者相同じく、所謂幸福とは意識あり人格ある個人に就いてのみ言ひ得べしとする點に於ても兩者相同じかるべく、又人生究竟の目的を平等圓滿なる幸福の實現に存すとする點に於ても亦兩者恐らくは相同じかるべければなり。さらば其爭點は是究竟の目的を實現する方法の上に存すと見るの外なし。日本主義は國家を以て是究竟の理想に到達する唯一の方便となし、唯一の方便なるが故に實際上國民道德の最高標準となす。そは國家は偶然にして成立せるものにあらず、既に成立し又漸く發達するに隨れ、先に是特殊の國家を成立せしめたる所以の要素は益々其差別性を開發し來りて、遂に國家と實際上相容れ難き諸他の性質を現じ來るべし。されば世界に於ける各國民の到達すべき究竟の理想或は同一なりとするもそを實現する所以の方法は、各國民に於て各々異ならざるを得ざるべければなり。

是に於てか日本主義は國性と國體とに本きて國家主義を執る。世界主義は即ち以爲らく、國家は方便なるが故に國家主義者流が思惟する如く爾かく尊重すべきに非ず、されば國性と云ひ、國體と云ふもの、時宜に依りて更革もしくは破壞する、亦必ずしも不可ならずと。されば世界主義は形式論の上に於ては國家を唯一方便とするに於て必ずしも日本主義に異なるに非ざれども、而かも國家其物の實質に關しては必ずしも國性又は國體の動かすべからざるものあるを認めず、是れそが日本主義と異なる要點なるべし。

國家の概念に就いて世界主義の日本主義に異なること既に是の如し、其他もろ〳〵の實踐倫理問題に關して幾多の異說あるは、洵に已むを得ざるなり。其一二を言はゞ、世界主義は日本主義がやがて國家主義なるに反して個人主義なり。獨り社會道德に於て然るのみならず、政治上に於ては、個人を以て君主と並立する重要原素なるを認めむと欲す。されば朕は國家なりとのルイ十四世の言によりて尤も適當に言ひ表はさるべき、我が國體に關しては、絕對的に日本主義と其解釋を異にせるもの也。世界主義の側にある人は、我國民が忠孝に關して有する道德的

意識を以て人道の理想に戻れる虚僞の觀念となし、そを勸奬する國家主義の道德を以て偏狹固陋なりとす。彼等は歴史を見ること國家主義者流の如く爾かく重からず、されば歴史によりて結成せられたる文物は必ずしも國民性情の中に拔くべからざる根抵あるを信せず、隨て是の如き文物にして彼等の理想とする所に逆ふものは、外來一時の勢力によりて容易に矯正し、又は打破することを得べく、且是の如き矯正もしくは打破は、必ずしも國民性情の滿足を傷くるものに非ざるを信ず。是點に於ても世界主義は全く日本主義と正反對の主張を有するものと謂ふべし。

是二主義の異同略ぼ是の如し。世には兩者の爭を以て名義上に過ぎずとなすものあれど、そは類同の一面を見たるのみ、實踐の倫理問題に關しては兩者は當然相爭ふべき理由を有するもの也。顧みれば維新このかた三十一年間の國民思想史は、所詮是兩者の頡頏消長に外ならざりき、殊に最近過去の一年に於て爭點の最も分明となれるを見る。是れ明治三十一年の思想を瞥見するに先ち、特に從來の思潮並びに日本主義と世界主義との綱領を明にしたる所以なり。

四　明治三十一年に於ける二主義の消長

一度び教育の勅語に頓挫し、再び教育宗教衝突論に挫折し、三度び日清戰爭以後に於ける國民精神の勃興によりて大打擊を被れる世界主義は、明治三十一年に入りて漸く反動の氣勢を昂め來れり。一正一反の常理、むしろ自然の趨勢とや言はまし、そはすべての物其昌榮の極みに達すれば、人これに狎れて漸く其德を感せず、却て其缺處を自覺し初むればなり。國家主義今や累年の積勢に乘じて縱横無盡に思想界を蹂躙したりしかば、其主張或は中正を離るゝあるを免れず、茲に漸く一部人心の不滿を招き、遂に世界主義者流の反動を誘致するに到れり、是れはた勢なりと云ふべし。

是年の一月、世界主義を以て目せられたる西園寺侯は文相の椅子に憑れり。侯が國民新聞の記者に語りて『日本の文明は西洋流ならざるべからざる』を公言せしは、流石に時勢に憚りたればにや、其聲高からざりしかど、一國の文相が學政上の意見としては、慥に世界主義者流の耳には野に呼べる人の聲とも聞えしなるべし。

基督教の雜誌『世界の日本』の一記者等は空谷の跫音として是を讃美せり。佛蘭西の一僧侶は『世界主義と日本主義』と題する一冊子を公にして日本主義、國家主義の偏狹なるを駁擊せり。佛教と耶蘇教とは同舟難に遭うて吳越も其怨を忘るゝの翼に倣ひ、神道を味方とする日本主義に對して攻守同盟を作りたり。無節操なる國民新聞の如きはしば〳〵國家主義の頑迷を呼ばはりたり。教育報知記者は『日本主義と世界主義』と題し、日本主義の偏執を論じて『感情によりて立てる極端說』なりとせり。世界主義主張者ならざる一部の思想家も亦反對の意見を公にするものあり、建部水城の如きは『明治思想の變遷』を『日本』紙上に論じ、日本主義を以て時勢を知らずとなし、『十年前の國粹主義の靦然たる踏襲に過ぎず』と揚言せり。耶蘇教の舊派を以て目せらるゝ人々は『新世紀』と名くる一雜誌を發刊し、主筆小崎弘道氏は其初號に於て、『若し吾人にして泰西の政治主義を執らむか、吾人は幷せて其宗教主義(即世界主義)をも執らざるべからず』と公言せり。凡そ是等の事實は、三十一年の後半期に於て世界主義的思想の鬱勃として再び興り來らむとするの徵なりき。

されど如上の反動は大勢に於て素より言ふに足らず、社會は依然として、國家主

義に謳歌せり。されど偶然なる政治上の事變よりして、一時是主客の位地を顚倒せしめたるは、三十一年に於ける思想史上の一大事實として特に大書し置くべきなり、政治上の事變とは言ふまでもなく七月に起りたる所謂政黨內閣の樹立を云ふ。

五　政黨內閣と國民思想

所謂政黨內閣の樹立が國民思想に及ぼしたる影響として見るべきもの、一にして足らざれども、所詮は世界主義の擴張に在り。是れ迄世界主義は言論の上にこそ唱へられたれ、未だ曾て政治上の勢力によりて扶育せられたる事なし。一西園寺侯ありしと雖も、二十年來國家主義によりて結成せられたる教育社會をば如何ともする無かりき。基督教會並に宗教學校は、世界主義の實行の爲に多少の力を瀝したりと雖も、日本主義が國家教育によりて皷吹せらるゝに比すべくもあらず。世界主義の無勢力は素より國民性情に稱はざるにも由るべしと雖も、抑もそが政治、教育の上に何等の根柢無きこと、亦其一主因なりしなり。されば所謂政黨內閣

の樹立は是主義の宣傳にとりて百萬の援兵にも較ぶべかりき。

議院に多數を占むる政黨が內閣を組織すとは、取も直さず政治上の勢力が人民の手に移りたるの謂なり。我國體が果してかゝる意味に於ての政黨內閣を容れ得べきや否やは玆に論ずる迄も無けれども、當時伊藤侯に代りて內閣を組織したる憲政黨の多くの政治家は實に是の如き謬見を懷きしなり。されば彼等は君主の信認を形式上の事なりとし、議院に多數を占むる政黨には即ち時の內閣を組織するの實力ありと思惟したりし也。『內閣は憲政黨の出店なり』と公言するを憚らざりし一輩の政治家が、英吉利流の民主政治を以て我邦に擬せしは寧ろ明白なる事實なりとす。かゝる大謬見の上に憲政黨の內閣は兎にも角にも組織せられたり、彼等は二十年來夢想したる彼等の無何有鄕が一朝偶然にして實現せられたるに狂喜し、英佛流の突飛なる思想より目覺めて國體國性を熟考すべかりし時機なるをも辨へず、忌憚なく是大謬見を宣傳せり。彼等の言は最早や空想にあらずして事實なり、而かも是事實たるや一國政權の上に現はれたる最高の事實なり。世界主義はかゝる目前の大援に會して如何ばかり其心を强うしたるべき。左なき

だに鬱勃たる憂憤の情遣り難き折柄なれば、反動の氣勢はさながら堤を決したらむ如く、蕩々然として社會に迸發せり。

憲政黨員の理想は英國流の民政主義にあり。彼等は陛下の御信任によりて其內閣を組織しながら、却てそを多數人民の意志を代表せる政黨の當然の權利なりと樣に思惟したりき。民政主義は即ち個人主義なり、個人主義なるが故に、君主は國家の主權に非ずして代表者なりと思惟せらる。民政主義は非君主政体なり、非君主政体なるが故に、君主は國權の本体なれども行用の權なしと思惟せらる。かく觀來れば民政主義は畢竟所謂三權分立を理想とするもの也。如上の意味に於ての民政主義が到底我國体國性と相容れざることは問はずして明なるべし。されば政黨以外の社會は一致して是に反對せしが、世界主義者流のみ獨り口を極めて是に謳歌し、帝國教育會の席上に公然勅語撤回の希望を演說せしものすらありき。

是時ゆくりなき一個の事實は、民政主義と國体との關係に就いて最後の斷案を促しぬ。そは他にあらず時の文相尾崎行雄氏がなしゝ所謂共和演說是なり。所謂共和演說をなしゝ尾崎氏の心事は今更是を問ふの要無かるべし、もし是をして

平時にあらしめば、是の如きは有勝なる瑣細の失言のみ、素より深く齒牙に懸くるに足らざるなり。而かも世論が是の瑣細の失言を提へて窮追して假借する所なく、事の結果をして尾崎氏の退官と憲政黨内閣の瓦解に終らしめたるは、又以て突飛なる民政論に對する反抗の氣勢如何ばかり當時の社會に充滿せしかを想像するに足らむか。共和演説は畢竟民政主義と國体との關係問題を呈出し、國民をして十分是を考察し、解釋するの機會を得せしめしものなり。尾崎氏の退官と憲政黨内閣の瓦解とは、即ち是解釋が事實の上に著はれたるものと見るを得べけむか。されば吾人は我國民、殊に幼稚なる政黨者流をして我國體の概念を痛切に會得せしむるの機會を作りたる一事に於て、共和演説の大いなる價値を認めむと欲するなり。

さはれ、尾崎氏の退官と是に續いて起りたる所謂政黨内閣の瓦解とは、所詮民主思想の敗北を證せるものに外ならざりき、世界主義者流の落膽如何ばかりなりしぞ。事の隱諱にかゝはるもの、彼等の無謀を以てしても流石に明らさまに言ひ表はし得ざりけむ、微言譬喩によりて屢に其の憂憤を漏らすもの、今日に到るも尚ほ

絶えず、其説の詭激に亘るや、往々吾人をしてそが公安に累するなきやを疑はしむるもの無きにあらず。例へば某新聞の一記者が『國家は一面に於て明に人民の爲に存在す、君主も亦慥に其一面に於て人民と共に國家てふ機關体の主要成分をなすもの也』と述べて民政主義の眞理を説き、若しくは某雜誌記者が英國の例を引きて我國体に比擬し、『女皇は君臨して治めず』の套語を以て立憲君主政体の眞相なりと論せしが如き、何れか民政主義の失敗に對する世界主義者流が憂憤の激語に非ざるべき。然れども大勢の赴くところ、區々の反抗また何爲るものぞ、國家主義が蕭々として社會の實勢力を把持すること故の如し。

六 結論

日本主義と世界主義との消長として見たる過去一年の國民思想はほゞ是の如し、されば今後の思潮を如何すべきか。社會の事は民人の意志の活動より成る、よろづ自然の徑行に委ね去らむはやがて人類自由の意志を放擲し去れるものなり。

國家主義に反對するものは、動もすれば言ふ、『吾等は國家團体の語を聞き飽き

たり、日本國民にして其國を愛せず、其君に忠ならざるもの何處にかあるべき』と。果して然る乎、惟ふに是の如きは未だ國家主義論者の憂とする所を解せざるには非ざるか。吾人を以て見れば、國家主義は是迄よりも幾層の熱心を以て說かれざるべからず。聞き飽きたるものをして欲するがまゝに聞き飽かしめよ。我國民の國家的精神にして未だ揺醒せられざるもの尙ほ甚だ多き以上は、國家主義論者は是等の味者の目覺むるまで、聲を限りに叫ばざるべからず。我國家は今日是の如き味者の爲めに如何ばかり苦められつゝあるか。

吾人をして事實を語らしめよ。社會は公共心乏しき民衆によりて如何に苦しみつゝありやを思へ。公園の樹木だに警察の監視に非ざれば保護し難きに非ずや。人は己あるを知りて他あるを知らず、況や國あるをや。慈善は虛名の爲に爲さる、自己の名を高く標榜せらるゝに非ざれば、一錢の寄附にだも應せずと云ふ。萬一國家事ある時、位爵誘ふ能はず、勳章勸むるに力なくば、何によりてか國民の義勇心を鼓舞すべき。學術界は國家的觀念なき學者の多きが爲に殆ど死相を現せむとす、世利國益と爲す所無くして如何に自ら高ぶるとも、所詮は死學のみ。世末

にして事多し、國民荷擔に疲弊せる今日、國家共の資を抛ちて敎育に力む、國家と爲す無きものを養ふの謂はれやある。是際學者にして大に國家的精神を振作する無くむば、所詮は死學者のみ。文學は國家的觀念に乏しき詩人、小說家によりて衰頽の極みに陷れり、國民の欲求は毫も顧みられず、彼等は詩人、小說家の私有私念を聞かせらるゝに倦み果てぬ。精靈界の慰藉を與へむもの、今や其人甚だ乏しきなり。國家的精神の政治界に乏しきや、政府も政黨も議員も選擧人も、目指す所は唯私利あるのみ、政治家の其節を賣るは猶ほ藝者の其藝を賣るが如し。個人主義を唱へたるもの何時しか國家主義に變じ、平民主義を說きたるもの忽ちにして藩閥の奴隷となり、超然主義の本尊にして憲法中止をさへ唱へたるもの、其都合の爲めには何時にても政黨と提携するを憚らず、政黨の進退は一に黨略に出で、黨員の左右亦私利に本づく。目的は手段を辨解すとは恐らく彼等の金科玉條とする所なるべし。されば手段としては虛言を忌まず、僞善を憚らず、而て其目的や私利のみ、野心のみ。中心相猜疑して肝膽相照すと揚言し、陰に兩端を持して愼重の態度と稱す。國家の公職を以て自黨の爪牙となし、若しくは選擧の利害を慮りて正理を

抵屈するが如き、彼等が日常の行爲也。而して己れ悔ゐず、人咎めず、詐謀を以て機敏となし、構陷を以て政略となす、蕩々然として百鬼夜行の有樣なり。是時誠意を以て國家を言ふものあるも徒に迂濶の譏を買はむのみ。

國家的觀念に乏しきものは獨り政府、政黨、黨員、議員のみならず、實に全國の選擧人、商工業家、概ね然らざるは無し、誠に地租增徵案に反對し、若しくは贊成せるものに視よ。反對せるものは農民地主にして、贊成せるものは商工業者なるは奇ならずや。農民の反對せるは地租增徵が直接に彼等に不利なればなり、商工業者が贊成せるは彼等に有益なれなり。あはれ是間に何の國家的意義ありて存せりや。國家が地租增徵の案を立てたるは、軍備擴張てふ國家的事業の爲なり、之を贊否する者は却て自家の利害より打算し來る。あはれ國民と國家との關係は是の如くにして圓滿なるを得べしとするか。吾人は一朝有事の日に際せばかくの如き民衆の甚だ賴み少かるべきを憂へずむばあらざるなり。かゝる民衆の選擧せる議員等も亦偏に撰擧區の利益を先にして國家全體の休戚を慮らず、畢竟選擧人の歡心を買はむが爲には如何なるものをも犧牲となすを避けざるなり。吾人は一旦

緩急あるの時、かゝる議員も亦國家の爲に甚だ心細きものなるを思ふなり。選擧人となり、被選擧人となる、一地方の利害素より關心するを要すと雖も、是を統率する所の國家的精神を缺如せば、議院は最早や國家的の議院に非ざらむ。局に當るものゝ迷ふは强ちに怨すべからざるに非ざるも、國民を擧げて恬として怪訝するある無し。吾人はかゝる國民の亦等しく賴もしからざらむを憂ふるなり。

是の如き事例は社會に充ち滿ちたり、社會人民の大々多數の國家的觀念は尙ほ未だ攪醒せられざるなり、吾人は攪醒せられずと云ふ、そは我國民が先天的に忠君愛國の情緒に富めることは吾人が國民の名譽によりて固く信認する所なればなり。誰か人性の善なるを以て敎育を要せずと謂ふものあらむ、さらば何ぞ獨り國家主義論者の言を以て贅疣なりと謂ふや。吾人の見る所によれば日淸戰爭この方國家主義は名のみ唱へられて實はむしろ遺られたり。敎育者は倫理の時間に勅語德名を講ずるを以て國家主義の道德を訓えたりと心得、敎育の全系を包有的に統率する所以を知らず。政論家の國家を言ふものは、國性國體の觀察に本かず、外邦の成見を假り來り、時に隨ひて機宜の辯を弄ぶもの多し、其說に根柢の拔く

べからざるなく、系統の貫ける無し。固陋なる國體論者は世界の大勢に疎くして其說や保守に過ぎたり。是際高上の理想に本き、正大の見地に據り、中正不偏なる國家主義の福音を遍く海內に宣傳し、以て國民精神の統一を大成せむは、獨り國內民人の利福の爲のみならず、外世界に面して一國の光榮を揚燿するに於て最大急務ならずとせむや。吾人は我國の前途に於て國家主義論者の働くべき事業の遙に前日に倍蓰せるものあるを認む。

(廿二年一月)

倫理教育問題

現時の問題 (中) (上は畧)

今日倫理教育が實際に於て振はざるは、掩ふべからざるの事實なり。啻に實際に於て振はざるのみならず、是を統率する所以の主義に於ても世の歸向する所一ならず。大體より觀察すれば、今の中等以下の國民的倫理教育は、殆ど無規律無主義の渾沌裡に在りと謂はざるべからず。若し夫れ其關係影響の上より是を見れば、眞個に是れ教育社會の最大問題、苟も國家に志あるものゝ霎時も等閑視すべからざる所なり。

吾人は平生是問題に關する世上幾多の立言に注意せり、然れども其の言ふ所、偏に弊害の一面を剔抉して其救濟の方法に及ばず。唯夫れ弊害の剔抉に力む、是を以ておのづから其利益の他面を遺却し、往々微瑕の故を以て尺璧を拋つの弊に陷るを免れず。未だ全分の理を盡し、安じて實行の規準とすべきものを見ざる也。今の學風校紀の頹廢を以て、現時の倫理教育が國民生活の進步に背馳するが爲な

りとするものあり。是種の論者によれば、今の社會は進歩的なり、然るに其教育は保守的なり、今の社會は世界的なり、然るに其教育は國家的なり、教育が是の如く社會の風潮に逆行するは、即ち其綱紀の紊亂する所以なりと。蓋し是れ今の國家主義の教育に反激したるの言ならんか。然れども吾人を以て是を見れば、是の如きは先づ好惡の爲に去就を決したるもの、未だ今日の實勢を明にせざるの論のみ。

今日の日本國民が、世界に於ける自家の位地を覺識し、先には一國の畛域に限られたる眼を以て、今は則ち世界の大勢を觀じ、以て其云爲を決せむとするに到りたるは、蓋し時勢に處して其の宜しきを得たるものなり。是を稱して進歩的と云ふ素より可、世界的と云ふ亦妨げず。然れども今の倫理教育は果して是傾向に反對せるか。吾人未だ其十分なる事實を認むる能はざる也。却て今日の國家主義は、世界的知識によりて覺醒せられたる國民的意識の要求に基けるものに非ざるか。想ふに論者の目して今の教育主義となす所のものは、往年の國粹保存主義の類に非ざるか。果して然らば彼は未だ國家主義の眞意義を解せざるものなり。もし世界の大勢に適應して自家の生存發達の策を規定することを以て、世界的と稱す

るを得べくんば、今の國家主義もしくは日本主義は、即ち是れ最も進歩せる世界的の主義に非ずや。漫に世界の二字に眩惑し、他の國家を言ふものを目して狹隘なりとするが如きは、其思慮の淺薄殆ど他に比すべきものを見ず。

且夫れ今の倫理教育の不振として擧げらるゝの事實は、學風の輕薄なり、風儀の紊亂なり、校紀の弛廢なり、中學校生徒等が狹斜の巷に遊びて耻とせざることなり、師範學校生徒職員の演劇に熱中せることなり、生徒が教師に對する反抗なり、是に對する處分としての停學退學なり。是の如き諸多の事實の何れの邊にか果して國家主義の負ふべき責任ありとするか。誤解せられたる國家主義や、或は其の弊の形式に流れ、塗飾に陷れるものあらむ。然れども噎死するものあるの故を以て其食を捨つべからず、焚死するものあるの故を以て其火を惡むべからざるなり。世の國家主義の教育を難ずるもの、他によりて誤解せられたるものを見るに非ざれば、自ら誤解したるものを想ふのみ。彼れ、宜しく其私情を披拂し來て吾人に就て學ぶ所あるべきなり。

吾人は國家主義の教育を以て決して今日の時勢に後れたりと思惟する能はず、

況や逆行すと云ふに於てをや。良し假に百歩を讓りて時勢と教育と眞に並行せずとするも吾人は是の並行せざるの故を以て強て教育をして時勢に阿從せしめざるべからざるの理由を見ざるなり。單に時世の風潮に從ひて甘じて東西すべくむば世豈所謂教育主義に就て劬勞するものあらむや。教育は國民の性情に基きて其理想を追求する一個の能動的主義也、徒に外他に依りて感受するのみならず、内自ら生發する所なかるべからず。夫の時勢と云ひ世界の大勢と云ふものは、天降地生、動かすべからざるものに非ず、其の本く所は各國々民の自由の活動にむり。吾人豈に是に對して絶對的に服從すべき謂はれあらむや。若し所謂時勢に、じて吾人の性情、吾人の理想に背戻するものならむには、吾人は吾人の自由の活動によりて是を吾人の性情理想に稱ふものと爲さゞるべからず。是に於てか吾人時として自家の生存幸福の爲に一世の風潮に反抗するの已むを得ざるこゝあるも也。而して國家の事業として是に當るものは、主として教育に非ずや。故に一國の教育は必ずしも時勢を迎合して進退すべきに非ず、苟も自家の性情理想に照して合はざるあらば、我より進みて是を改造するの覺悟あらむを要す。吾人は今

の時に於て最も是覺悟の須要を認むる也。

吾人を以て是を觀れば、今の日本は最も浮薄なる、根抵なき、一時的の風潮に動かされつゝあるなり。而して是の如き薄弱なる風潮を以て天下の動かすべからざる大勢なりと誤認し、是に隨從し阿附するを以て今の世に處して自家の生存發達を完ふする唯一の方法なりと迷信するもの所謂世界主義者流の少からざるを見て轉た浩歎に堪えざるなり。多年其内を知りて其外を知らざるもの、一朝世界の大觀に面接して自家の弱少を自覺するに及び、惶惑狼狽爲す所を知らず、漫に世界の文明を叫び、世界の大勢を唱へ、壓に外邦崇拜の假面を掩ふもの、殊に『亞米利加歸り』の一派の如きに到ては、殆ど憫笑に勝えざらむとす。今日我邦に於ける『世界的』風潮の大部分は、是輩が拜外夢裡の譫語に出づるもの、素より一時の疣贅に過ぎず。是一時の疣贅的風潮に雷同し、輕率短視の笑を後年に貽さむが爲に、一國教育の大主義を枉屈せむと欲す、識者の同意する能はざる所なり。

然れども吾人は今日の倫理教育に就きて決して滿足するものに非ず、其の『誤解せられたる國家主義』に對しては、眞正なる國家主義の爲に十分其寃抂を伸張せむ

ことを熱望するものなり。吾人は或論者の說けるが如く、今の小中學の倫理敎育が概して形式的、皮相的、塗飾的なることに就いては、最も其感を同うす。是れ恐らくは今日全國の敎育者が均しく認識する所の缺陷ならむ。徒らに勅語の字義に拘泥し、句々の例話を引き、さながら直譯的に、逐條解釋的に講述し去り、以て足れりとするの迹あるは、決して聖旨の所在を體認して薫陶の實効を擧ぐる所以に非ざるなり。若し夫れ論語、大學、小學等の訓詁釋義を傳へて殆ど漢學科程と擇ぶ所無きが如きは、形式的德育も玆に到て極まれりと謂ふべし。惟ふに小中學の敎育當事者如何に淺薄なりと雖も、這般の事理に通曉せざるの理あらむや。德育は理を以て外より强ゆべからず、人物の陶冶は中心の感化を必とする位の事は、今日何人か是を知らざらむ。然るに實際の敎育上是の如きものは、畢竟當事者求めて形式的、皮相的、塗飾的なるに非ずして、倫理敎育本來の目的を到達すべき適當の方法、無きが爲に暫らく是姑息の策に據れるならずむばあらず。故に今の時に於て、敎育當事者に向て其倫理敎育の形式的、皮相的、塗飾的を難ずるものは、恐らくは既に醒めたるものを搖撼するに等しからむ。若し同時に示すに善後の救濟策を以てす

るに非ざれば、空瓶を倒にして是に充たさゞるに同じからざるか。

近時敎育の時弊を論ずるもの多きが中に、吾人は坪內雄藏氏が近刊の六合雜誌に掲げたる『倫理敎育私見』と題する一篇の如く、周匝精緻なるものを見ず。獨り其弊を擧ぐるに密にして、其後を善くするの法を說くこと甚だ疎なるに到ては、吾人潛に恨無き能はず。氏の積極的方案として提出したる所のものは所詮、小中學に良師を擇び、同時に平素に實行し得べき德より、初めて師先づ是を實踐し、子弟にも是を實踐せしむべしと謂ふに過ぎず。良師を擇ぶことは人物感化の上に立てる所の倫理敎育が素より須要とする所なり。唯憂ふる所は小中學校敎員として德行の君子の果して得らるべき事なるかにあり。隨て敎師が其實行によりて子弟を率ふることの實際望み得べきことなるかを恐るゝのみ。是れ敎育者の夙に切望憂慮して措かざる所、若し實際上望み得べき事ならば、是敎育法は今日業既に實行せられたらずむばあらず。其の實行せられざるを以て見れば、其望み得べからざる事實亦自ら明なりと謂はざるべからず。望み得べからざるの事を望む、理として甚だ美ならむも、實行の方案としては聊か肯綮に當らざる無からむや。

若し小中學教員として德行の君子が果して望み得べからざるものならむには、教育者は是最上策の行はれざるの故を以て、倫理教育を全然不可能として拋擲すべきなるか。曰く否。吾人は何れの時、何れの處に於ても、其力の及ぶ限りに於て、其の Best を實行せざるべからず。是れ事に當るものゝ責任なり、義務なり、將又天職なり。吾人を以て是を見れば、今の所謂教科書的倫理教育も亦現下の策として は萬已むを得ざらむのみ。何となれば、今の時に於て教育當事者が其力の及ぶ限りに於て最上策を行はむと欲せば、勢ひ是方法に據るの外無かるべければなり。然れども是方法を施行して其最大の實效を收むる所以の順序、徑行に到ては、現下の教育決して其十全を稱すべきものに非るべし。其訓諭の高尚に過ぎて生徒の幼稚なる理解力に適せざると、其の說く所の談理に傾きて實際に疎きと、抽象に過ぎて明確の感銘を生徒に與へ難きと、其例話に異常非倫の事多くして平素の常道として應用するに適切ならざること、若しくは其の講ずる所或は廣漠にして捕捉し難く、或は深遠にして測度し難く、或は煩瑣にして撫理し難きと、是等は蓋し今の倫理教育の缺點なるべし。吾人は教科書編輯の任に當るもの、及び當該學校の

當事者が深く是點に注目し、德性の淘冶にはおのづから其道あることを會得せむことを希望して已まざるなり。夫の徒に文字理義を訓誨して而して其衷心の感化を顧みざるや、茲に矯飾僞善の病を生ず。吾人素より今の倫理教育の理想的と相去ること甚だ遥からざるを認むと雖も、實行の方法其の宜しきを得む乎必ずしも是病弊に陷るべきものに非ざるを確信する者なり。病弊の一面を見て而して今の倫理教育の全體を否定し、而かも其後を善くする所以の道に到ては茫々として言ふ所無きが如きは、偏頗且無責任の言論なりと謂はざるべからず。

是を要するに、今の世に於て倫理教育の爲に一課程を設くる無くんば則ち已む、苟も是の如き課程を設け、而して國民的品性の淘冶の爲に現下の事情に於て出來得る限の最上策を施さむと欲する者は、必ずや今の教科書的方法を除きて他に道無きを認むるならむ。若夫れ毎週一時間乃至二時間の課程によりて國民的品性の完全なる淘冶を望まむは素より能はざるを責むる也。夫の今の倫理教育を難ずるものは、其の望む所の過大なるに基因する無からむや。如何に完美なる方法と、如何に善良なる教師とを以てするも今の教育組織の下に其倫理科の教程によ

りて生徒の品性淘汰を遂行し得べしとは、何人も想像し能はざる所なり。吾人は、此の如き大目的は、教育課程全體と、家庭教育及び社會教育との綜合力によりて初めて成就せらるべきものなるを確信す。唯道德の概念を明にし、家族社會國家等のもろ〳〵の集合生活と個人との大體の關係を訓ふるを得ば、今の倫理教育の目的略〻達せられたるに庶幾からむ。而して吾人は今日以後の眞正なる國民的道德にありて是の如き知識の須臾も缺如すべからざるを認むるなり。

吾人の倫理教育に對する所見略〻是の如し。如上の所見に據りて、吾人は世上の論者の如く、所謂倫理教科を以て國民道德の汚隆の上に爾かく重大の關係あるものと思惟せざるなり。唯倫理教育は教育全般の精神と家庭社會の道德的感能によりておのづから遂行せられ得べきことを認むればなり。是に於てか、今日倫理教育の最大事業は、國家道德の大主義を以て社會の全體を貫徹し、統一し、小は個人より大は國家に至るまで、同一均齊の道德的感能を以て外來の勢力を調攝するにあり。輓近に於ける學風校紀の頽廢は其原因は決して學校職員の中にのみあらずして、實は社會的道德の頽廢の一反影のみ。是時に當りて區々たる倫理教科

の改良を以て言を爲す、短視に非ざれば淺慮のみ。枝葉の剪栽を力めて而して根蔕の培養を顧みざるもののみ。苟も倫理教育に就いて立言するものは、先づ社會道德の振肅を論せざるべからず。

吾人を以て是を見れば、今日社會道德の頽廢は國家道德主義の一定せざるにあり。吾人不肖の身を顧みず、同志先輩と共に敢て日本主義の運動を興起し、聊か爲に一臂の力を惜まざる所以のものは、實に民心を統一し以て社會道德の乖離を救濟せむと欲するの微衷に出づ。實に吾人は吾人の事業が倫理教育の根本問題に接觸して其解釋の肯綮に中れることを確信するものなり。果して然らば世の倫理教育に關して吾人と憂を同じうするの士は、是際吾人の日本主義に就て愼重な

無主義の教育

(現今の問題下)

(今の教育は國家主義の教育にあらずして無主義の教育のみ)

今の教育者、口を開けば則ち國家教育と云ふ。されど國家主義の教育は果して今日に於て實行せられつゝあるか、吾等甚だ疑ふ。言ふまでも無く、國家教育とは國家の經營、獨立、進歩の爲に必要なる國民を造るの教育なり。今の教育に於ける諸般の設備は果して是目的に對する明白なる自覺と自信とによりて爲されたるものなるか。國民教育の名によりて行はれたる幾多の事業は、是精神を實現するとするか。吾等は茲に是國家教育の根本問題に關して在朝在野の教育者に一大猛省を促すことの甚だ急務なるを認むる也。

吾等の第一に疑ふ所は、國民教育と專門教育とは果して明瞭なる差別の觀念によりて設備せられたりや、否やにあり。是の二種の教育の間には實際上素より截

然たる區劃あるを得ずと雖も、是を經營し設備する當局者の眼中には、常に明瞭なる差別の觀念ありて存し、而して是觀念に準據して、各々其方法の統一を計畫せざるべからず。然らざれば所謂國民教育の精神は何によりてか其適切と歸一とを維持し得べき。若し教育の全般を擧げて專門教育の梯たるに終らしむる如きことあらむには專門の學者、事業家たらむとする少數者を除きたる大多數の國民は、不用の知識を收容せむが爲に、一度び逝て再び歸らざる其の貴重なる教育期を消費するの不幸に陷らむ。吾等は現に今の中等教育に於て大に是憾無くむばあらず。

夫れ尋常中學は固と國民教育の範圍に屬すべきものなり。即ち國家の中堅となるべき中等社會の國民が其國民たる資格に於て有せざるべからざる最小限の教育を受くべき所なり。されば尋常中學の教科課程は主として嚴密なる意味に於ける國民教育の教科課程ならざるべからず。中等教育の大主腦大把柄は實に是に存す。素より國民の中には普通國民教育に滿足せず、更に進みて高等專門の知識を得むとするものあるべし。然れども國家は是專門教育の志望者の爲に特

別の設備を爲すに先ちて、普通國民教育を授けざるべからず。もし是國民教育にして彼等が將來に繼續すべき專門教育との聯絡上不適當なる點あらむには、中等教育は、其國民教育たるの性質を毀損せざる限りに於て、特に其準備の爲に特別の教程を設くることを得べし。是の如くにして、一方に於ては國民教育の精神を貫徹すると同時に、他方に於ては專門教育の前途に適應することを得む。畢竟一般教育としては、是兩面を有すると共に、嚴密に謂ふ所の國民教育と、是國民教育以上の專門教育との間に截然たる主從の差別を立てざるべからず。是主從の差別を維持することは國家教育の主眼なり。

然るに顧て今日の中等教育を觀るに、是の主從の關係の全く顚倒せるものあるを見る。英語科、數學科、歷史科の如きは其例なり。

英語科は今日の中等教育に於ては、其授業時間の上より見るも、授業上の實際に就て見るも、最も主要なる學科として考へられ居ることは明なる事實なりとす。然れども、國民教育として爾かく重きを英語科に置かざるべからざるの理由果して何處にありや。尋常中學卒業生の有する英語の知識は、實際上甚だ卑近なるも

のにして、大体の上より見る時は、普通の讀書會話だも辨ずる能はざるの有樣なり。されば尋常中學卒業後、長く學校教育を離れて實際の業務に從事せざるべからざる運命を有する大多數の國民が、業を卒へて後、期年ならずして殆ど全く英語の知識を遺却し了するは、最も自然の勢なりとす。もし彼等にして、卒業後も亦英語の實用を須要とするが如き境遇に際會したらむには、實際の需要に驅られて、學校教育に於てはよし不完全なりし學力も、實地の練習によりて益々上達し益々其利便を享受するを得む。然れども是の如き境遇の下に生活すべきものは、今日に於ては勿論、內地雜居以後にありても極めて少數なりと觀ざるべからず。されば國民全体の上より見れば、中等教育に於て最も多くの時間と最も多くの勞力とを消費して、辛ふじて、而かも不完全に學び得たる英語は殆ど全く不用なる學科なりと謂はざるべからず。かゝる不用なる學科を最も主もなる學科とせる今日の中等教育は果して國家教育の精神を體認し奉行せるものと謂ふことを得るか。吾等甚だ是を疑ふ。

數學に就いても、吾等は亦同一の疑惑を有す。算術、幾何の普通なる理論は素よ

り中等社會の一國民として、須要なるものなるべし。然れども立体幾何、高等代數もしくは解析幾何學の難解特殊の知識は、將來專門學を修めむとするものを外にして、一般國民に果して何等の實益かある。中學卒業生にとりては是等は全く前に述べたる英語と其運命を同じうすべきものにあらずや。

是の如く、今の中等教育に於て、英語もしくは數學の如き實際國民教育としては不急、無用の學科に重きを置きて是を奬勵せむと力むるは、畢竟中等教育を以て嚴密なる意味に於ける國民教育と爲さず、却て專門教育の階梯なりと思惟せるの結果と觀るの外無かるべし。果して然らば、是れ即ち國民教育と專門教育との間に於て主從の關係を顚倒したるものと謂はざるべからず、今日の中學教育は所詮最少數の專門學志望者の爲に、最大多數の國民利益を蹂躙したるものなり、一般國民に對して學者の教育を施じつゝあるものなり。吾等は是の如き教育方針を以て敢て國家教育の精神に背戻せるものと斷言するを憚らず。

今の教育の中學問題として論ずる所は、如何にして中學と高等學校との聯絡を圓滑ならしむべきかにあり、是を以て尋常中學校に責むるに英語、數學の程度の卑

きを以てす。然れども吾等を以て見れば、是れ國民教育の獨立を認めざる大謬見なり。高等學校は其性質上專門教育に屬すべきもの、然るに尋常中學は純然たる國民教育の機關なり。彼を標準として此を規定せむと擬す、是れ即ち國民教育を以て專門教育の犧牲となすものにあらずして何ぞや。

然れども吾等は普通教育と專門教育との聯絡の必要を無視するものにあらず、是目的の爲に適當の設備を爲すは、學系の統一上、極めて須要の事業なりと思惟するものなり。吾等の見る所を以てすれば、今の尋常中學に於て高等學校豫科と尋常中學本科とを分離し、生徒をして其志望に應じて其科を擇ばしむること、猶ほ高等學校中に大學豫科と高等學校本科とを分つが如くするを以て、最も妥當の方案なりとすべし。然る時は、英語、高等數學等、凡べて專門學科の準備として必要なるものは、主として是を高等學校豫科に課し、尋常中學本科には英語、高等數學の代りに他の卑近にして須要なる學科、例せば社會國家の組織性質に對する一般知識の如きものを以てせば、一方には普通教育と專門教育との聯絡を圓滑ならしめ、他方に於ては一般國民をして不急無用の學科の代りに適切にして且實用的の知識を

享受せしむることを得べし。若し夫れ精細なる方法に到りては、時宜に應じて其恰好を期すべきものなるを以て、素より茲に言ふべき限にあらず。吾等は唯是の如き方針によりて中等教育の組織を改造するの刻下の急務なることを唱道する者なり。

吾等が次に國家教育の振興の爲に普く教育家の注意を煩さむとするは尋常中學に於ける歴史科なり。吾等は先づ問はむと欲す、今の尋常中學の歴史、殊に西洋歴史の教員は、抑も如何の覺悟を以て授業しつゝある乎。歴史は吾人が過去の生活の記錄なりと雖も、是過去の生活を繼續したるものは即ち吾人の依て以て生存しつゝある所の社會國家の現在の事實なり。是を以て人生百般の經營一として歴史に由來し、且準據せざるものなし。されば一個の科學として見る時は、歴史は過去の事實の正確なる記述と說明とに過ぎずと雖も、其の現在の人生に關して有する所の態度は能動的、實際的の他面を有す。是一事は、歴史が純粹なる知識を專らとする諸他の科學と大に其範圍及び性質を異にする所なり。今夫れ尋常中學に於ける國民教育の課程として、重きを是兩面の何れに置べきかと問はゞ、實際的

方面を主とすべきは明かなる事なるべし。何となれば、純粹なる科學的知識としての歴史は、吾人の知識慾を滿足するの外、何等實際上の興味を有するものにあらず、然るに國民として自己の屬する所の社會國家の現在及び將來に關する明白なる知識は苟も中等社會の國民として其諸般の事業を經營する上に於て最も須要とする所なればなり。今の尋常中學の歴史は果して是方針に據りて教授せられつゝあるか、吾等は却て反對の事實を認むるなり。

試に今の中等教育の歴史教科書なるものを取りて是を檢閲せよ、殆ど只一個の純粹なる科學として說述したる者のみ。帝國大學の史學科に於て專門學生の爲に講ずる所のものゝ如しくは史學專門の學者が純粹なる科學の目的の爲に編纂する所のものゝ其大體の方法組織事實に於て是教科書と異なるものに非ざるなり。教科書にして尙ほ且然り、是の如き教科書に依傍して授業する所の教員輩が、毫も國民教育として歴史の實際的方面の須要なることに看到せず、漠然茫然、只動植、理化等諸他の科學を教ゆると同一の覺悟を以て、偏に史的知識の注入を以て能事了れりと思惟するは、自然の勢なりと謂ふべし。彼等は既に史的事實の知識を注入

するを以て歴史科の目的なりと思惟す。是を以て希臘羅馬時代と十九世紀と彼等に於て輕重の別あるなくバビロニア、アッスリアの興亡と日清戰爭と、彼等に於て同一の價値を有す。實に彼等にとりては現下の極東問題の由來は、歴山大王の乘馬が黑色なりしか、又は白色なりしかの問題に比して特に注意すべき理由あらざるなり。吾等は一個の史學者を養成するの道として是の如き方法の甚だ公平なるを認むと雖も、一個國民の資格に缺くべからざる歴史的知識を授くる方法としては甚だ適當ならざるを認めずむばあらず。

中等社會の國民をして其の國民たるの義務を完全に盡さしめむと欲せば、其の屬する國家の現狀如何に就て出來得べき丈け明白なる知識を有せしめざるべからず。殊に今日の世界は如何なる歴史を經由して之に到りたるか、是列國對峙の間に邦する所の我國家、我國民の位置は過去及び現在に於て果して如何、將た又將來に於て如何にすべきか、――這般の知識は、國民の國家的觀念を修養する上に於て最も須要とする所なり。而して是の如き知識を與ふるものは歴史に外ならず、中等國民教育に於ける歴史科の職能は主として茲に存す。是を以て國民教育としての歴史は、主として現在の自國を中心として觀察したるものならざるべからず。夫の現在の世界に關係少き遙遠なる過去世の事、又は我國家と何等の接觸交渉の存在せざる諸他の事實の如きは成るべく是を淘汰し、現在の世界、殊に自國に關係する事實に對して特に精確なる知識を與へむことを期すべき也。然るに今の中等教育が是國民教育としての歴史の大方針を遺却し、恰も專門學者が知識慾の滿足の爲にすると同一の覺悟を以て、其子弟に教ゆるは甚だ誤れりと謂はざるべからず。

是の如き非國家的教育の弊は尋常中學の卒業生に於て明かに看取するを得べし。誠に彼等に向て希臘、羅馬の事蹟を問へ、彼等恐くは聲に應じて答ふるを得む、然れども翻て伯林會議、中央亞細亞問題、もしくはモンロー主義の何物なるかを問はゞ、能く答ふるものは彼等の十の二三ならむのみ。更に現今の世界に於ける我日本帝國の位置如何を問はゞ、恐らくは彼等の中是に答ふるもの無からむ。蓋し彼等の教師は一個の客觀体として歴史を彼等に教へたり。教ふるもの、教へらるゝもの、及び彼等の共に生息し、附屬する所の國土國民が、凡べて是歴史の活劇中に

存在するものなる事に就ては、殆ど意識する所無かりしなり。嗚呼世界に於ける自己の國家自己の國民の位置を知ざるものにして、三千年前の事實に精通し、歴山大王の乘馬の黑白を辨ずるの力あるも、國民として何の益する所ぞや。吾等は今の尋常中學に於ける歴史教育が其大目的を抛擲し、恬然として覺る所無きを見て大に歎惜に堪えざるなり。

是を要するに、英語や、數學や、歴史や、畢竟二三の例證のみ。吾等の見る所を以てすれば、今の國家教育は殆ど空名のみ、其實殆ど主義なく、目的なく、自覺なく、茫然として一般の知識を授受するに過ぎざるなり。げに國家主義の名によりて敕語は捧讀せられ、倫理は講述せらる、然れども眞正の國家主義は倫理上の名義にのみ限らるべきものに非ざるなり。諸種の教科教程凡て是大精神によりて統率せらるるに及びて始めて其完成を稱すべし。世人或は今の教育の不振を以て國家主義の弊に歸す、吾等を以て是を見れば今の教育の大部分は無主義の教育のみ、無標準の教育のみ、其弊豈獨り國家主義の弊ならむや。吾等は反覆して言はむ、國家主義の教育とは徒に忠孝を唱ふる教育の謂に非ざる也

（卅一年四月五月）

誰か我邦を西班牙に比するものぞ

米西戰を交へてより、西班牙の運命日に窘逼せるの觀あり。是れ果して西班牙の末路なる乎、抑々又一時の衰弱なる乎、兎に角も其萎微振はざるは現下の事實なり。吾人茲に西班牙人に就て言ふ所あらむとするは、是事實を解釋せむが爲に非ず、聊か世の空論者流の蒙を啓かむが爲なり。

吾人は西班牙の零落に關して近時我邦に最も奇怪なる一派の論者あるを見る。其の旨趣は、我日本と西班牙との國情を比較して相酷似せるものありと爲し、西班牙の敗衂を以て前車の覆轍と爲すにあり。彼等說を爲して曰く、『西班牙の國民は傲慢自負の念深く、異教人を排し、異人種を斥け、和親を以て外に對せず、列國の感情を害すること甚し。內に臨みては徒に富國强兵を唱へ、忠君愛國の外其他を知らず、是れ恰も我日本の現狀に非ずや。西班牙が歐洲の一角に邦して、今日迄兎に角國家の獨立と體面とを維持し、近時米西戰爭をさへ開き得たるが如きは、一に基督教の力なり。今や我邦人は宗教を無視し、人道を蔑如し、偏に忠孝を以て一國の人

心を壓制せむとす、抑々國家の將來を如何せむ』と。

是の如きは近時連りに見る所の論なり。吾人是を目して奇怪なりと謂ふ。其說に歷史上の根據を缺ければなり、私己の空想に比擬して事實の考察を顧みざればなり。而して是の如き奇怪且つ淺薄なる說を公言して憚らざるもの、悉く皆基督敎の僧侶、信徒なることを一顧せば、彼等が正論識議を以て世に立つこと能はず、其敎勢日に窘迫せること猶ほ西班牙の如く、其存在今や將に社會に遺却せられむとするに臨み、外邦の事に附會して僅に其憂憤を遣らむと欲す、煩悶苦楚の狀寧ろ想像するに餘りありと謂ふべし。

然れども眞に歷史を知れるものゝ眼より見れば、蓋し西班牙と日本とを一視するは、猶菽麥河嶽を混同するが如きのみ。夫れ西班牙人は歐羅巴に於て最も複雜なる人種より成るものゝ一なり(一)。其の愛國心なるものは歷史上寧ろ宗敎心と稱すべし、吾人の所謂忠君愛國と稱する者と大に其趣を異にす(二)。是を、比較的に世界に於て最も純粹に、且最も强固なる國家的觀念を有する民族より結成せられ、單一帝系の下に二千五百餘年の歷史的生活を經由せる、我日本帝國に比す、抑々何

等の杜選ぞや。

第一、西班牙の國土に棲息せる人種は、少くとも五種あることを記憶せざるべからず。一に曰くイベール人なり。是れ所謂バスク民族にして、ツラン人種に屬し、是半島の原的住民と思惟せらる。二に曰く、羅甸人なり。是れ羅馬の權勢と共に是地に移りたる者、イベール人を征服して其土地を占有し、今日西班牙の國語たる羅甸語を輸入したる民族なり。三に曰く、チュートン人なり。是れ歷史上西ゴート族の名によりて知らるゝものにして、羅馬帝國の末葉に當り、所謂チュートン民族の大遷徙に際して是半島に侵入せるものなり。四に曰く、猶太人なり。五に曰く、ムール人なり。是れサラセン民族の勃興の結果として、八世紀の初有名なる回敎會長ムーザーの下に、タリック所謂『三日戰爭』によりて一舉してピレニー以南を征服したる者なり。是外、羅馬時代に於けるフォイニケ、カルタゴの植民の夙に此地に移れるあり。是等の諸人種は、イベール人を除て、未だ全く融化して一國民の特質を結成するに至らず。國民的傲慢心の熾盛なるは疑も無くイベール人の遺傳にして、其酷薄殘忍なる稟資は、慥に西ゴート族の氣象を傳へたり。何となれば是西ゴート族は、諸他のチュートン民

族と大に其性を異にし、異教者に對して如何なる暴虐をも忍び得る人民なることは、歴史上最も明なる事實なればなり。又其門閥と宗教と主權とに執着する事に於ては、西班牙人は正に羅馬的なり。人種學者ブレース氏の説によれば、其の頑固なる個人主義と婦人に對する尊敬とに於ては、日耳曼的にして、戰功を尚び觀兵示威を好むはケルト的なり。而して羅甸民族を中心としたる所謂西班牙人は是等幾多人種の特性を鎔鑄して一圓丸となす能はず、一朝事あれば民心乖離、内訌常に絶えざるとは、十四世紀一統以後の歴史、殊に前世紀の終り及び今世紀の初めに於ける所謂半島戰爭、繼嗣戰爭若しくはマリア・クリスチナ及びエスパルテロの攝政時代の紛擾に徵して最も明瞭なる事實なりとす。

凡そ國家の盛衰は、其の由て來る所一にして足らず、然れども何れの時代、何れの邦國にありても、民心の統一は其隆盛の第一の制約なり。歴山大王の版圖が、墓畛未だ乾かずして分裂せしも、羅馬の滅亡も、ヴラセン民族の衰頽も、所詮は中央政府の權力四裔を括約して民心の統一を維持する能はざりしが爲なり。近くは波蘭の滅亡、澳地利の紛擾、土耳其、朝鮮、支那の衰弱、一として其主因を是に有せざるは無し。西班牙は五個の異なりたる民族に加ふるに、三個の異なりたる宗教を有す、而して是に君臨するにフリップ二世以降、多く暗弱無力の王を以てす、民心の統一得て望むべけむや。暫く諸他の事情を言はざるも、是一事既に亡國の兆ありと謂はざるべからず。

是の如く見來れば、西班牙と日本とは、是國家成立の根柢に於て啻に相類似せざるのみならず、却て對角線的に相背反するに非ずや。今や無學無識なる基督教徒は、事實を曲解して私に爲にする所あらんとす、何ぞ其心事の陋劣にして、其手段の淺薄なるや。

西班牙の國民は是の如く統一を缺ける多數異人種より成る、如何ぞ眞に君國を愛するの情に富むことを得むや。多くの人、西班牙人を愛國者なりと謂ふ、しかれども其の所謂愛國は、吾人の所謂愛國の觀念と果して相同じかるべきや、單に君國の名によりて下民を虐待し、外邦を輕侮する一種の國民的自負心、若しくは宗教的迷信を指して爾か名けたるには非ざる乎。果して然らば、是れ豈吾人の所謂忠君愛國ならむや。

是を其歴史に徴するに、西班牙人の愛國者ならざる證跡は到る處に發見し得べき也。讀者試に亞剌比亞民族侵入當時の西班牙史を一瞥せよ。半月旗を揭げ來れる者は人種の敵なり、宗教の敵なり、國家の敵なり。而して西班牙人は何事を爲したりや。キチザ、ロデリックの諸王は、國家の危機を知らざる爲して其暴政を逞うせり、猶太人は叛旗を飜して敵を迎へたり、貴族は相乖離して權勢爭奪を事とせり、國民の或者は却て猶太人と共に半月旗の擁護を歡迎せり。げに當時の王家たる西ゴート族は、其國語こそ羅甸語を用ひたれ、未だ羅馬の政治を解せず。ケルト、イベール民族によりて繼承せられたる羅馬の文明は、容赦なく是半蠻族の足下に蹂躙せられ、國家の觀念は何人に適歸すべきやを知らざりき。當時西班牙の人民が亞剌比亞人の來襲を以てゴート王族との私鬪の如く思惟せしは寧ろ自然の勢なりき。若し當時の西班牙人にして、眞に愛國の感情に富みたらむには、亞剌比亞人の戰勝如何ぞ斯く容易迅速なるを得べけむや。

西班牙人は啻に國家的觀念に乏しきのみならず、最他邦人に制御せられ易き人民なる事、亦當時の事蹟に徴して明なりとす。抑も亞剌比亞人は、如何に勇敢なりしにもせよ、亞細亞及亞弗利加大陸に於ける彼等が牙軍の一分隊に過ぎず。此方は即ち全半島の國民を擧げて、而かもピレニー山以東の歐洲騎士の後援を有す。誰か其勢力一朝にして崩壞すべきを想はむや。思ひきや、タリックの一戰に破るゝや、擧國風を望みて降伏し、ゴルドワ政廳の半月旗は忽ち絶對の威力を擅にせり。加之當時の貴族は概ね爭て款を其國仇に通じ、回々教に改宗し、以て其榮達を計りたり。中世西班牙の騎士にして其勇名を史上に止めたるもの多く基督教的名稱を有せりと雖ども、概ね半月旗の下に戰ひたるものなりき。

夫のシッド(Cid)は世に所謂西班牙の國民的勇士なるものなり。獨逸人が其ジークフリードとヒルデブランドを稱し、英吉利人がアーサーを敬し、印度がラーマを尊ぶが如く、西班牙人は今日尙ほ自國の歴史中にシッドの名を有するを誇るなり。シッドは果して歴史上に實際存在したりしや、否やは、暫く問はずとするも、其の國民的理想を體現せる人物なるは疑ふべからざるなり。然れどもシッドは西班牙國の爲に戰ひたる者にあらざりき。彼の事蹟は畢竟一個人の勇悍義俠の物語に過ぎざると、猶ほ我邦の岩見重太郎、宮本武藏の如きなり。是を以て名は即ち基督教擁護の爲に

戰ひたりと稱すと雖も、時としては却て回々教徒の旗下に勇名を競ひたり。例せばサラゴッサの回教酋長グコフッドの爲にグレサの戰場に臨みたるが如し。眞に國を愛し、教を護るもの、安ぞ其不倶戴天の深仇に與して、甘じて犬馬の勞を取るべけむや。而してシッドの剽掠を事とするや、時としては其の基督教に屬すると回々教に屬するとを問はず、一切の寺院市邑を蹂躙して、眼中一も宗教上の差別を認むる無し。其部下には幾多の基督教の武士と共に常に多くのムール族傭兵を有して怪まず。シッドの志、一に中世の武士的勇俠を示すにありて、何等國家又は宗教上の意義を有せざりしことは寧ろ明白に過ぐる事なりとす。是の如き非國家的勇士シッドの如きものを理想とする國民は果して眞正なる愛國心に富めりと謂ふを得べきか。見來れば、西班牙人のシッドに於て歎稱する所は、其個人的勇俠の一事のみ。而して是個人的勇俠の一事たる、是國民が其歷史の到る處に發揚せむことを力め、且現に發揚したるものなり。今の人の所謂西班牙人の愛國心とは畢竟是勇俠を誤認したるのみ。

是の如く述べ來らば、或は疑を挾むもの問はむ。ムール人の羈絆を脫せむが爲に

されたる六百年間の爭鬪は、是れ西班牙人の愛國心を表明せるものにあらずやと。然り。永き歲月の是爭鬪は、遂に西班牙の國家を統一したるのみならず、又其國民的性質を陶化するに於て少からざる力ありたること、吾人是を認む。然れども是爭鬪を以て西班牙人の愛國心に出でたる者とするものあらば、是れ歷史を讀むの法を知らざる者のみ。其動機實は主として異宗教の排擊に存せしなり。『教の爲め』とは、當時全歐洲の呼應したる所、西班牙人亦潮流に隨て小十字軍を其國內に起したるのみ。是の宗教戰爭の結果として、國家の統一を見るを得たるは、寧ろ西班牙人にとりて偶然に屬す。是を以てアラゴン、カスチル兩王國合併の後に到りても回々教徒の迫害愈々甚しく、フィリップ二世治下の宗教裁判の如きは西班牙歷史中の最も血痕淋漓たる部分たるなり。

然れども十四世紀以後に於ける西班牙國民が異宗教徒と多年の爭鬪結果として、多少國家的觀念の修業を遂げたるは、疑ふべからざる事實なるべし。然れども吾人は他邦に比して特に優れたるものあるを見ざるのみならず、是を魯英、獨、佛等の諸國民が、近代人文の大勢に乘じて、最も鞏固なる國家的中心政治の方面に、進歩

せしに比すれば、尚ほ相去ること百歩のみならず。吾人は遂に西班牙人を以て忠君愛國の人民と思惟すべき所以を知らざるなり。

今茲に西班牙史を反覆せむことは、讀者の忍ぶ能はざる所なるべし。單に今世紀の事蹟に就いて見るも、西班牙人が其君主及び國土に忠愛ならざるの例證、比々として相連なる。試にチャールス四世治下の西班牙を見よ。國民の一派は奈破翁を歡迎し、マドリッドの朝廷は將に大西洋を超えてメキシコの殖民地に遷移せむとせしにあらずや（一八〇八）。超えてフェルヂナンド四世の時代を見よ。國步艱難の際、民心の統一を須要するにも拘らず、急進黨（エキサルタドス）と、專制黨（アブソルチスト）とは、私爭の爲に國事を忘れ、佛蘭西のルイ十八世が內亂に乘じて兵をマドリッドに送るや議會は却て是を歡迎し、國王の無能力を議決せり（一八二三）。更にマリア・クリスチナ皇后の攝政時代に入るや、國事は愈々朋黨爭攘の器械となり、皇后黨（クリスチスノス）と太子黨（カーリスト）と鎬を削りて相鬪ひ、國內の叛亂となり（一八三五）、憲法の改正となり（一八三七）、遂に外邦の容吻を誘致せり。是の如き事蹟の何處にか所謂忠君愛國の感情の特に現はれたるものありとする や。吾人を以て見れば、西班牙人は世界に於て最も忠君愛國の情緒に乏しき國民の一たるなり。

吾人は茲に西班牙衰弱の原因を說明するの遑無し。想ふに國家經濟の紊亂も其一原因なるべく、倨傲尊大、與國の惡感を買ひたるも其一原因なるべく、專制暴虐を是れ事として、統御の術を知らざる事も其一原因なるべし。其他幾多の原因あるにせよ、國民が國家的觀念に乏しく、忠君の情緒を缺けることは、其の最大なる原因たるべきなり。

然るに今日無學なる基督教徒は、是の如き零落の妖兆を具備せる西班牙と我日本とを比較して、國民が其君國を思ふの情相似たりとなし、暗に忠孝を以て國家の亡徹となす。是れ言を他邦の事に藉りて其の非國家的根性を暴露せるもの甚だ惡むべしとなす。抑々又明治聖代の下、是不臣の民ある、吾人實に是を慚づ。

（三十一年七月稿）

罪惡の一千八百九十八年

世界は漸く其罪惡の歴史を開展し初めたり。一千八百九十八年は罪惡を以て初まりて罪惡を以て終らむとす。

一千八百九十八年は十九世紀史上に於て恐らくは最も記憶すべき年なるべし。世界歴史の局面を回轉すべき運命を有する二個の事實は、實に是一年に於て其端緒を開きたればなり。二個の事實とは何ぞや、極東問題の解釋は其一也、北米合衆國の『帝國主義』は其二也。嗚呼十九世紀史上の何處にか、其影響の局面に於て是の如く廣大なる事實ありや。

一千八百十五年は華德堡の戰爭を產したり、然れども奈翁の滅亡は、歐洲の私事なるのみ。一千八百二十三年はモンロー主義の宣言を產したり、然れども是れ北米合衆國の私事なるのみ。一千八百六十一年は以太利の獨立を產したり、二千八百六十九年は蘇西運河を產したり、然れども是れ何かあらむ。一千八百七十年の普佛戰爭は、所謂プロイセン時代を作りたり、一千八百七十七年の魯土戰爭は、所謂

伯林條約を與したり、而かも是れ人類の一小部分が世界の一小部分に於ける權力の消長に過ぎざるのみ。一千八百八十一年の魯帝の暗殺は、ケルン禮拜堂の落成と共に、人類歴史上には無意義のみ。是の如き事を以て一千八百九十八年の二大事實に比す、多く稱するに足らざる也。

一千八百九十八年は如何なる年ぞ。人類の歴史は是時に至りて初めて其世界的意義を有したり。東西兩半球は是時に至りて初めて其世界的勢力を合成したり。人類は是時に至りて初めて一團となり、世界は是時に至りて初めて一體となれり。

一千八百九十八年は如何なる年ぞ。人類の多數は是時に當りて最も明に其道德的假面を脫落したり。國家の名によりて權力即正義の福音を宣傳せり。人類の多數は是時に當りて初めて自己の文明の虛僞なるを自白せり。所謂道義、所謂宗教の畢竟獸慾の假面なることを暴露せり。

一千八百九十八年は、實に是の如き政治的大影響と道義的大罪惡と、其二大事實を併せて十九世紀史上の最も記憶すべき年たる也。

所謂二大事實は、是道義的大罪惡の政治上に顯現したるものに外ならず。見よ、今日歐洲人の所謂極東問題の解釋とは、支那分割論の實行を外にしては殆ど無意義なるに非ずや。支那分割論とは、其口實名義の如何に拘らず、人の國を盜み、人の民を掠むるの謂に非ずや。學者や、宗教家や、道德家や、其哲學と聖書と經典とを執て、而して一言も其君主の人の國を盜み、人の民を掠むるを言はず、而して尙ほ神を言ひ、正義を言ひ、人道を言ふ、是れ十九世紀文明の眞相也。

魯帝が解兵の提議は、白晝の假面のみ。猶ほ往年ゴルチャコッフが正當防衛の爲めになされたる中央亞細亞侵畧、方に其極限に達したりとの宣言によりて、歐洲列國を欺きたる如けむのみ。所謂ファショダ事件に關する英佛の葛藤は、純然たる野獸の爭利に非ずや。而も兩國々民は歐洲文明の精英が是獸慾の爲に浪費せられむとするを見て、憂ふる所あらざる也。所謂アングロサクソン同盟とは何の謂ぞ。支那及び北米に於ける私利の交換に非ずして何ぞや。而かも彼等は自ら目して人道の普及と言ふ也。若し夫れ米西戰爭の如きは、支那分割論の實行と共に、十九世紀末の一大政治的事實たると同時に、又其一大道德的罪惡也。

モンロー主義に閉鎖せられたる北米合衆國は、今茲一千八百九十八年の米西戰爭を以て歐洲との交渉を開始せり。彼は戰爭の結果として事實に於て玖馬を占有し、又將に比律賓を橫領せんとす、是れ世界歷史の上に於て東西兩半球を結合したる一大事實なり。所謂アングロサクソン同盟なるもの實は主として北米合衆國が東洋に於ける是新勢力の扶植上より打算せられたるものに外ならず。是一大事實より當に來るべき諸般の結果は、來らむとする二十世紀史の重要なる部分を占むべきや又疑を容れざる也。

而して是の如き一大事實は果して何によりて起りたる乎、メーシ號の轟沈によりて一決せられたる北米合衆國の宣戰は、玖馬民人の獨立安寧の爲になされたりと稱せらる、何ぞ其の名の堂々たるや。而かも人の國を奪て人の民を掠む、目して人道と稱す、可ならむ乎。果して然らば夫の人の產を盜みて慈善を營むもの、果して仁者を以て稱すべき乎。二人の宣敎師の故を以て膠州灣を强奪したる獨と、利益不平均の故を以て旅順と威海衛を占領したる魯と英と、一船舶の故を以て人の旅順を攫取したる北米合衆國と、其情狀に於て何の擇ぶ所ぞ、宗敎人道の假面を被

り、白日公々然として虎狼の搏噬を逞うするは、實に十九世紀文明の眞相にあらずや。

歴史家の十九世紀の文明を標榜するを聞くに、曰く博愛の精神、曰く個人の自由、曰く何、曰く何、凡そ這般の名辭の幾百を列ぬるも、是の蕩々たる國家的罪惡を奈何すべき。維納會議は實に佛蘭西革命によりて攪破せられたる十九世紀文明の精神に戻れるなるべし。

一千八百十五年以降の八十年は、實に是會議の斷定を打消さむが爲の歴史なるべし。而かも其末葉に到りて「帝國主義」が如何に翕然として天下の大勢を風靡し、人種の爭鬪は如何に支那帝國の分割に終らむとするかを見よ。吾人を以て見れば、人類歴史の最も慘澹たる齣場は、方に是より開かれむとしつゝある也。

罪惡の一千八百九十八年は是の如くにして初まり是の如くにして終らむとす。知らず、來らむとする一千八百九十九年は如何なる年なるべき乎。

(明一年十一月)

植民的國民としての日本人

今や日本人は、植民的國民として自己の天職を認むべきの機運に到着せり。內國に於ける人口の增殖、商工業の發達、及び海運事業の進歩は、宇內交通の利便に隨れて、何れも是機運を催進せざるは無し。是時に當りて、吾人の祖先が植民的民族として歴史上最も顯著なる成功を留めたるの事蹟を緬想する、必ずしも閑事業に非ざるべき乎。

日本の舊史は古事記を以て始まれり、而して古事記の中、天地開闢說と諾冊二尊の神話とを外にして、日本本土に關する傳說は、須佐之男命の出雲植民を以て端緒となす。須佐之男命は何處より來りしか、大古の事杳として俄に斷言し難しと雖も、恐らくは南瀛の煙波を破り、北太平洋の潮流に駕して日本海に入り、給ひたるならむ乎。古事記一篇の中、殆ど全く大陸神話の特徴を認めず、其神名、事蹟の却て大洋海波に緣故あるもの多きの一事を以てするも、(全集第三卷四三三頁參照)須佐之男命及び其後に來れる天孫人種は、何れも其故郷を海洋中に有したること殆ど疑を容るべか

らず。神話及傳說の比較研究上、吾人は是故郷の南方多嶋洋中に存するを信ずと雖も、茲に論述するの必要なきを以て言はず。兎に角、出雲民族の祖先たる須佐之男命と日向高千穗に降臨し給へる天孫人種とは、共に遠洋の海波を凌ぎて此土に上陸せる者也。而して古事記載する所によれば、天孫降臨に先ち、高天原に於る天照大御神と高御產巢日神とは、是後の使者建御雷神が出雲、戡定の功を擧ぐるまで、幾度びか使を出雲に遣はして大國主命を招撫したるを以て見れば、遠洋航海の術は當時已に著しく發達したりしならむ。

兎にも角にも、日本民族の幹部たる天孫人種と出雲民族とは、遠洋より來りて是土に植民したるなり、而して九州に於ける大山津見神、伊勢に於ける猨田毘古神、若くは出雲に於ける足名椎の如き、所謂『國神』なるものも、天孫人種及び須佐之男命と交通上何等の不便なかりしを以て是を見れば、素より舊來土着の民族に非ずして恐らくは天孫民族と同一の事情により、是土に來住せるものなること、亦想像するに餘りあるべし。

海上に於ける植民的人種は、即ち陸上に於る征服的人種なり。吾人と人種を同

じうして大陸に留まれるウラルアルタイ民族は、或は北狄、匈奴となり、或は韃靼、蒙古人となり、東は日本海より西は大西洋に到るまで、戰勝民族の雄名を歷史上に留めたり。吾人の祖先たる天孫民族も、亦一度び足を蜻蛉洲に着くるや、其植民的政略は一變して戰勝的政略となれり。高千穗宮に偏安するは、豈雄心鬱勃たる冒險的民族の永く耐忍し得る所ならむや。是に於て乎神武東征となり、崇神の四道將軍となり、日本武尊の北征となり、更に轉じて仲哀、神功の熊襲三韓の討伐となり、爾來歷世の帝王事に臨みて遠征を辭せず、中世以降、漸く退嬰保守に傾けりと雖も、建國の當初を去る尙ほ甚だ遠からざりし上古にありては、是の征服的國民の意氣尙ほ鬱然として盛なりしを見る。而して吾人の祖先が殊に植民的性質の面影を留めたるものは航海業の盛大にあり。

神武天皇の東征し給ふや、日向より舟師を以て豐後に至り、豐後より筑紫、安藝、備前に到り、攝津河內より更に紀伊半嶋の西南岸を旋りて、熊野に上陸せり。日本武尊の北征も亦多く海路に依りしが如し。即ち伊勢より海に浮びて尾張熱田に赴き、陸路海道を歷て更に相模より上總に航し、鹿嶋灘の險洋を冒して常陸なる『日高

見國』に到れり。仲哀天皇の熊襲を征するや、天皇は內海を經、皇后は越前敦賀より日本海を經て長門に會し、更に筑紫に航せり。次で神功皇后の三韓征伐は、全く水軍の優勢なるによりて其功を奏したること、言ふまでも無し。爾來應神の朝に海人部を置きて水師商船を監督せしめ、推古の朝修信使留學生を唐土に派遣し、齊明の朝に至りて阿部氏の西奧及肅愼討伐の擧ありたるを以て是を見れば、航海の事業は年を累ねて漸く盛大に赴けりしが如し。殊に阿部氏が舟師百八十艘を越前敦賀に艤し、蝦夷、秋田、渟代より更に日本海を橫斷して滿州地方を征討せしが如きは、天孫人種の冒險的氣象を歷史的に紹述したるものと謂ふべし。其年代を謂へば、實に是れ今を距る一千五百年の往時にして、英國海軍の鼻祖たるアルフレッド大王よりも早きこと殆んど六百年の昔なりとす。吾人は後年に於ける是の旺盛なる膨脹的精神の衰退を以て日本歷史上の最大恨事となすもの也。

然れども人種の根本的性質なるものは、何物の力も得て壅塞する能はざる也。天智以來、朝鮮一帶に於ける我海上の權力は殆ど全く失墜したるより、爾來京都の朝廷は、海外進取の開濶なる政畧を斷念し、寬平、天慶以降、遂に絕對的鎖國主義を取

るに到れり。然りと雖も、海洋國民の冒險的先天的は、最早や國家の力を假らず、船舶取締の禁令を冒してだも、尙ほ且つ其の欝勃たる雄心を披拂せずむば已まざりき。即ち北條氏仆れて南北正閏の爭海內に波及するや、猛將勇士の志を國內に得ざるもの、其滿腔の不平自ら禁ずる能はず、是に於てか所謂『邊民』の高麗、漢土の海岸を侵すもの、虛年無し。殊に菊池氏以來、九州の諸豪族海內の戰亂に倦厭せるもの、多く船隊を組織し、浙東、福建より遠く安南、暹羅を襲へるもの、所謂『八幡寇』として海上の威名を壇にせるは、史家の熟知する所也。近時小笠原長生氏の數ふる所によれば、寬治より文祿までの五百年間に於て我邊民の亞細亞大陸を侵略せる度數は實に五十餘回、而して是の五十餘回の侵略は、毫も國家の保護を仰がず、私人獨立の事業に出でたるを想へば、誰か中世に於る京都朝廷の鎖國的國是を恨みとせざらむや。

然れども我邦人は單に海賊的侵略のみを事とせるものに非ず、同時に植民及交通の平和手段に緣りて遠洋航海を企てたるは歷史上最も顯著なる事實なり。元慶年間、即ち今を去る千十餘年前に當りて、平城天皇の第三子高丘親王の印度に航

するあり、天文年間には僧了西の印度に入りて加特理教を學べるあり、同時代に我國民の始めて葡萄牙に航せるあり、永祿年間には我國民の多く呂宋に住するあり、天正年間には大友、大村、蒲生、有馬の四氏使を羅馬に遣すあり。文祿、慶長年間には我國民の南洋及印度に到るもの甚だ多し。伊達政宗が其臣支倉六右衛門を羅馬に遣し、山田長政等の志を暹羅に得、天竺德兵衛の前印度に航せるは、何れも是時代なり。元和、寛永年間には、伊達政宗の大船を新造して呂宋國に遣すあり、西洋南洋に到る處に『日本町』の組織せられたるも、濱田彌兵衛臺灣に到りて和蘭人を懲らしたるも皆是時代なり（以上の事實は小笠原氏の海軍史論に據る）。見るべし、南北朝以來、足利氏治下の亂世を通じて海外侵略的、はた植民的精神の漸く我國民の間に鼓動し、豐臣氏德川氏の交に到りて、殊に其生氣の塗湧し來れるを。吾人は是に到りて德川幕府の嚴峻なる鎖國主義が其三百年の退嬰的治政の下に再び我國民の先天的冒險性を萎縮せしめたるを慨嘆せずむばあらざる也。

是を要するに、日本民族は由來植民的征服的はた航海的民族なり、而して是民族の主腦たる天孫人種降臨の事蹟は、是精神を最も好く發表したる者也。爾來歷史は常に是精神の實現を反復せりと雖も、中世に於ける藤原王朝と、近世に於ける德川幕府とが、强迫的に絕對的鎖國主義を執行したるの結果は、大に本邦民族の退嬰思想を助長し、是先天的氣象を遺却せしめむとせり。是の如くにして日本の歷史は明治の改革に入りぬ。是に於てか三百年來久屈の反動として、海外的精神の勃然として國民の間に興起し、植民事業の呼稱せらるゝもの日に多きを加へたるは、國民性情の正當なる發達として、吾人の大に喜ぶ所也。是の如く、植民的事業は、日本國民の先天的特性なることを自覺するは、事業の成功を期待する上に於て、國民の最も須要とする所ならずむばあらず。何者『自信は成功の母』なればも也。

（明二年三月）

帝國主義と植民

植民事業の擴張は、吾人が見て以て國民性情の正當なる發達とする所也。而かも植民の方法、是を奈何すべき乎。吾人ぼ植民其物を奬勵するに先ちて、先づ這般

の方法に就て其の本つく所の大主義を問はざるべからず。是れ啻に植民當事者の關知すべき所なるのみならず、一國權力の消長に影響すること甚だ小少ならざる也。

歴史の研究は吾人をして左の如く斷言せしむ。曰く、凡そ其領土及植民地の膨脹と帝國主義の勵行と相伴はざるの國家は、必ず衰亡せむと。是れ吾人の私見臆度に非ず、三千年來の歴史が事實に據りて明白に證明する所なり。請ふ試に是を說かむ。

吾人は先づ近頃頻りに稱謂せられ、而かも最も曖昧なる『帝國主義』の意義を明にせざるべからず。吾人の所謂帝國主義とは、屬邦若くは植民地に於ける異人種若くは異民族に本國人と同一の權利を與へず、他迄權力關係によりて是等異邦人と本國人との間に本支主從の差別を規定する主義の謂也。換言すれば、征服により て得たる屬國の民に與ふるに征服者と同一の權利を以てするは吾人の所謂帝國主義に非ざる也。帝國主義は、必ずしも屬邦又は植民地に於ける異民族を以て劣等人種なりと思惟するを須ゐず、唯彼等が本國人に非ざるの故を以て其間に上下

主從の關係を規定するを須要とす。是の如き帝國主義を强行せざる國家は、他邦を征服することによりて却て自ら滅びたり。將た又當初是帝國主義によりて其版圖の廣大を致したる國家も、最早是主義を施行する能はざる事情の生ずるに及びて、茲に漸く分裂衰亡の途に就けり。是れ古今の歴史が幾多の事例を擧げて吾人に告ぐる所也。

試に羅馬帝國に見よ。古來史家が羅馬衰亡の原因として數ふる所のもの、一にして足らず、然れども吾人を以て見れば、其の最も主要なる原因は、羅甸民族至上主義の破壞ならずむばあらず。蓋し羅馬は史學者の所謂『都府國家』也、國家權力の中心は羅馬の一府にあり、是等權力を握れるものは是が市民たる羅馬民族なりき。是一事は羅馬が共和國たりし時も、帝國たりし時も、毫も變改せざりし也。而して羅馬國の全盛時代は即ち是の幹部たる羅甸民族の團結强固にして其權力尙熾盛なりし時なり。羅馬帝國の基礎、是の羅甸民族に存し、是羅甸民族と幾多の屬邦民族との間に權力關係上、截然たる本末主從の差別を維持し得たる間は、羅馬一府の中央權力と、一族の羅甸民族とは、以て地中海の四岸に號令するに足りし也。然れ

ども戰連りに勝ち、領土亦擴張するに隨ひ、是を統率し司配する羅甸民族の勢力漸く缺乏を告ぐるに及びてや、從來羅甸人の專有せる要職權力等をも、亦漸く異邦人に讓與し、依て以て幹部の勢力を補充するの已むべからざるに到りぬ。是に於いてか從來蠻族として蔑視せられたるもの、今や羅甸民族と共に同一の公民權を享有し、隨て從來異邦人の有する能はざりし將帥、官吏も、亦漸く羅甸人の手を離れぬ。事茲に到りては羅馬建國の國性は半ば崩解し了りたりと謂はざるべからず。實に羅馬帝國は愛國心の缺乏によりて仆れたり、而して是愛國心の缺乏を致したるものは世界主義を唱へたる基督教徒にあらず、敵國たるガリア人、チュートン人にあらず、實に羅馬人若くは羅馬の帝國なりし也。カラカラ帝が一切屬邦人に與ふるに羅甸人と等しき公民權を以てせし時は、是れ即ち羅馬の國家が精神的滅亡を遂げたるの時也。誰かガリア人、埃及人、亞弗利加人、ブン人、イスパニア人、スリア人が羅馬の公民權を與へられたるの故を以て、彼等が宿仇たる以太利の一都府の爲に、盡忠報國の誠意を效すべしと思はむや。

サラセン民族の衰亡も亦同一の原因に本けり。凡そ一百年の間『コラーン乎、貢乎、

然らざれば劍乎』を叫びたるサラセン軍隊の中堅となり、其司令部を成しゝものは盡く亞剌比亞人なりき。然れども領土增殖の結果として、純粹なる亞剌比亞民族の分散を來すに及びて、茲に已むを得ず漸く傭兵組織を採用し、奴隸軍をだに編制し、其上司將校にも亦他民族を用ふるの已むを得ざるに到れり。是に於て乎、サラセン軍隊は漸く其の强健なる國民的觀念を失ひ、地方的利害の爲めに其分裂を見るに到れり。這般の事情略ゝ羅馬帝國の末路と等しく、所詮は吾人の所謂帝國主義と伴はざる征服若くは植民の結果なり。

歷史は是の如く幾多の事例を反復せり。而して最近の史上に於て最も明に是原理を說明せるものは、アングロサクソン及び羅甸民族の植民地也。讀者よ、試に一考せよ、アングロサクソン民族の植民地は、永く本國政府の司配の下に其帝王の臣民として殘留せる間に、羅甸民族の殖民地は何が故に期せずして盡く獨立、若しくは分離するに到りたる乎。是の植民史上に於て最も著しき現象は、是兩民族の間に如何の差別ありて起りたる乎。南米に於ける西班牙及葡萄牙の植民地の本國の羈絆を離れて獨立せるや既に久し、而して玖馬、ポルトリコ、菲律賓、亦新に他邦

の版圖に入る。今やイベール半嶋の植民王國は殆ど自國以外に尺寸の土地を有せざらむとす。然るに翻て是を英國の植民地に見るに、特別の事情ありて北米合衆國の獨立を許したるの外、其印度も、其新嘉坡も、其喜望峰、濠洲も、直轄、自治の差別こそあれ、永く、女王陛下の臣下として存在するは何故ぞや。他無し吾人の所謂帝國主義を勵行すると否とにあるのみ。

羅甸民族が其屬邦若しくは植民地を見るや、殆ど其本國を見るが如し。彼等は輙ち異邦民族たる土人に與ふるに自己と同等の權利を以てし、正式の結婚により て其女を娶り、其の所謂雜種兒（ハーフカスト）を見ること殆ど本國子弟に異ならず。一言すれば羅甸民族は概して異邦人に對して自他の差別を見ず、司配者たる彼等自らの爲に何等の特權を設くること無き也。是を以て、年代を經過するに隨ひ、植民地に於る本國人は何時しか其土人と混淆し、隨て其母國に對する國民的觀念も亦漸く退減し、遂に本國人を見ること異邦人の如くなるに到る。事茲に到れば、餘す所は分離と獨立とあるのみ。南米に於ける羅甸民族の植民地は、是の如くにして其母國の羈絆を脱したる也。若し夫れアングロサクソン民族の植民地は則ち然らず。彼

等は容易に土人と交らず、馬來人や、印度人や、彼等の眼より見れば常に劣等人種なり、彼等と同一の資格權利を享有し得べからざる人類也。是れ必ずしも智力德性の問題に非ずして、寧ろ一種の狹隘なる人種的觀念に本ける嫌忌若しくは輕侮の念なり。彼等は時に土人の女を納る、而かも是れ正當の結婚に非ずして一時の妾に過ぎざるのみ。其間に生まれたる雜種兒の如きも到底其父と同一の平面に生活する能はざる也。彼等は文武一切の要路を壟斷して土人の手を觸れしめず。例へば土人にして印度文官たらむと欲するものは、十九歳を期して文官試驗を倫敦に受けざるべからざるが如き、是れ即ち能はざるを許して却て壓制の實を擧ぐる也。彼等が自己の特權を重ずる、概ね是の如し、是を以てアングロサクソンの植民は民族混淆の爲に國民的觀念を減殺せらるゝの憂なし、是等植民地に於ける中心の勢力は、常に同民族の掌握する所なれば也。但越在日久しければ利害亦相同じからず、茲に同民族の植民地中、おのづから本國政府の直轄にあるを利とせざるもの生ずるに到る。是に於て所謂『獨立植民地』なるもの出で來る、濠洲、喜望峰の如き是れなり。然れども所謂獨立植民地と雖も、素より絶對的獨立を有せるに非ず、

地方自治制と等しく、其總督長官の任免等重要の事體は中央政府の管轄に屬し、以て本國の利害と相調攝せしむ。畢竟アングロサクソン民族は吾人の所謂帝國主義を以て植民政略の大方針となせるものなり。世人或は以爲らく『人道』は英國人の理想なり、人類相愛の大義は英國人の植民政略也と。是の如きは全く事實を無視せる空言のみ。世界の人類中、英國人程、自尊心に富み、他人種を嫌忌し『帝國主義』を以て其勢力擴張の主義となすものあらざるなり。

吾人は茲に所謂帝國主義の倫理的價値を言はざるべし。然れども歷史の吾人に明示する一個の原理は帝國主義に伴はれざる征服若くは植民は常に失敗すと謂ふ事是れなり。世界の人類を平等視し、其間に主從內外の差別を樹てざるもの、例へば羅甸民族の植民政略の如きは今日一派の世界主義者流の見て以て人道の大義を行ふとするものに近からむ。而かも是の如くにして分離若くは獨立の爲に母國の衰亡を來たすとせば、是れ甚だ不利益なる人道の大義に非ざる乎。凡そ國家が其版圖を擴め植民地を造るは、畢竟自國の强大富榮を希ふが爲めにあらずや。自國の强富の爲めになされたる征服若しくは植民にして、却て自國の衰亡を

來さむが如き事あらば、其所謂人道の大義なるものは、寧ろ國家の大罪惡に非ざる乎。論じて茲に到れば、我日本民族が其新領土たる臺灣に對する政策如何の如きは言はずして明なり（上二九六頁以下我國體と新版圖參照）。而して吾人は將來益〻其隆盛を見るべき海外植民地に對しても、吾邦人が其アングロサクソン的帝國主義を遵奉して敢て違はざらむことを希望せざるべからず。北米合衆國が布哇を併有するに到りたる主要の原因は、畢竟アングロサクソン的帝國主義の實行に非ずして何ぞや。

（卅二年三月）

北米合衆國の國情如何

米西戰爭の結果として、西班牙が玖馬及び菲律賓群島の割讓に調印したるの事實は、即ち北米合衆國の國性に一變化を來さむとするの事實也。而して殊に菲律賓の占有に關して、北米合衆國が、將に其建國以來の人道主義に一大汚點を印せむとするの事實を見る。吾人は外交政治を論ずるものに非ず、純然たる歷史上の問

題を語る也。

北米合衆國の建國の歴史は今更説く迄も無し。是れ信仰の自由と人權の神聖とによりて建てられたる國家也。佛蘭西が其帝王の頸血によりて僅に其形骸を摸倣せる民約論的國家は、ベンジャミン・フランクリン氏が齎らしたる一片の宣言によりて、永く世界史上に鏤刻せられぬ。『來れ、王家の壓制に苦めるものよ、教會の束縛を悲むものよ、及びもろ〳〵の腐爛せる祖先舊吏の桎梏に惱めるものよ、來れ、而して共に是の新らしき自由の鄕に將來の榮光を樂めよ』。是れ北米合衆國の國家が天下の耳目を一新せる福音なりき。獨逸の詩人クロップストック氏は、十三州の獨立を歌うて曰く、『爾は將に來らむとする更に大なる日の曙光なる哉、人道の精靈爾を動かせり』と。グーテ亦歌うて曰く、

亞米利加よ、爾は吾等の古き世界よりも勝れたり、
破れたる城壘無く、廢れたる寺院無く
是の活ける時世に當りて、無益なる追懷、
無効なる紛爭の人心を累はす無し。

北米合衆國の國家は實に是の如き精神によりて建てられし也。彼れが二個の大綱領は自由と人權なり。是を以て當初の十三州の團結は脅迫又征服によりて成されたるものに非ずして、自由と人權との安全の爲に有せる共同の利害に本けり。一言すれば、北米合衆國の國家を組織せるものは、權力關係に非ずして、利害關係也。而して是國是を政治上の綱領として發表せるものを所謂モンロー主義となす。

何人も知る如く、所謂モンロー主義なるものは、歐洲大陸に於ける『神聖同盟』の假想的脅迫に對し、自國の利益を保全せむが爲に發表せられたるものなりき。其原因や寧ろ偶然なり、政治史上より見れば、是れジェームス・モンロー氏が一輕舉に過ぎざるのみ。然れども是主義が其精神として發表したる『亞米利加の爲に亞米利加あり』てふ一語は、北米合衆國の建國の國是を最も簡明に標榜したる者也。亞米利加の爲に亞米利加ありとは北米合衆國が征服主義の國家にあらずして、利害關係を以て建國の基礎とするの國家なるの謂に非ずや。是れ即ち東半球諸國の容喙を杜絶したると同時に、自國の國是は自由及人權の上に基ける建國の精神を貫徹

するにあることを天下に公白したる者也。所謂『亞米利加』の中に南北亞米利加を包括せるモンロー氏の意を以て是を見む乎、吾人の解釋恐らくは狹隘なりと謂はれむ。然れども北米合衆國々民が建國の精神及理想は必ずや茲に存せざるべからず。世人の所謂『人道主義』なるもの即ち是れ也。

是の如くにして是を見る、南北戰爭や、亞米利加印度人に對する迫害や、非アリアン民族に對する排斥や、尙暫くモンロー主義の國家が十九世紀の文明に調攝せむが爲に必要なる措置なりとせむ。將た又布哇の合併や、玖馬の占有や、暫く南北亞米利加を以て干涉の範圍とせるモンロー主義に抵觸せずとせむ。獨り菲律賓群島の略奪に於て吾人は北米合衆國の國性如何を問はざるを得ず。吾人を以て見れば、是れ實に十九世紀の末葉に於ける世界歷史の一大問題也。

北米合衆國が菲律賓群島を占有するに到りたる事體は、極めて簡單也。即ち西班牙政府が其戰敗の結果として、合衆國の强請を拒む能はず、遂に二千萬弗の償金と交換したるのみ。吾人は若し合衆國以外の國家、例へば獨逸、魯西亞の如き國にして是擧動ありきとすれば、毫も怪まざるべし。而も北米合衆國に於て是事ある

を見るに到ては、咄々怪事と謂はざるべからず。吾人の言說は毫も政治外交上の意義を有するものに非ず、合衆國の國性に關する純粹なる歷史問題のみ。

試に問はむ、利害關係を以て國家組織の根蔕とするの邦は何の必要ありて菲律賓群島を占領せむとする乎。マニラ灣頭の桑港を去る幾千海里ぞ。亞米利加の爲に亞米利加ありてふ主義は、何の辭ありて一半球以外に其勢力を擴張せむとする乎。アングロ、サクソン民族と菲律賓人とは其人種を異にし、其宗敎を異にし、其歷史、性情、風土を異にす、何處に共同の利害ある乎。布哇の合併は吾人或意味に於て是を是認すべし。何となれば布哇住民の最も勢力ある部分は、其人種文物の上より北米合衆國との聯合を希望したればなり。布哇の合併は權力關係にあらずして利害關係なり、是點に於ては合衆國の國是、將又モンロー主義と雖も、當然其合併を是認すべき也。然れども今や菲律賓併有の事體や全く是と異れり。菲律賓の島人は毫末も合衆國人と共同の利害を有せず、隨て曾に毫末も合衆國の一聯邦若しくは一屬領となるの希望なきのみならず、年來西班牙政府に反抗して自由克復の戰鬪を續けたる島民は、今や其生死を賭しても合衆國の主權を否定せむと力

めつゝある也。征服主義に反對して起れる合衆國たるもの、何の辭ありて菲律賓島民の上に其主權を强行せむとするや。合衆國にして自ら其建國の精神と理想とを拋棄し、自ら其モンロー主義を蹂躙するに非ざるよりは、是の如き擧動は、歷史上國家として大矛盾の行爲と謂はざるべからず。

國際法上の理論によりて吾人の說を否定せむとするものあらば、是れ全く吾人の說の歷史論なることを知らざる者也。菲律賓の島民は其主權者たる西班牙に對して叛抗しつゝありし間に、果して國際法上の交戰者たる地位に達したりしや否や、是れ吾人の問ふ所にあらず。良し列國の眼中には只米國が西班牙に勝ちたる事實あるのみなりとするも、又正當なる媾和條約によりて、主權の合衆國に移りたる後、島民尙ほ其主權を認めたるは、即ち正統政府に對する叛亂の行爲なりとするも、何れも吾人の問ふ所にあらず。吾人は唯北米合衆國が其建國の精神理想を拋却し、世界に向て誓ひたるモンロー主義の國是を蹂躙するに非ざるよりは、菲律賓併有の權利無き事を言はむと欲するのみ。

菲律賓の占有は、合衆國々民の將來の利益の爲に必要なりとの理由も、亦人道主

義の肯定し能はざる所也。菲律賓島の住民は合衆國と等しく人類に非る乎。其大統領と自稱するアギナルド、及び其の統率せる部下は、群島將來の司配者として決して無能力なる者に非ざる也。是等島民の希望に反對し、是を塵滅しても尙ほ且つ其主權を强行せむとするは、果して自由と人權との上に建てられたる國家の所爲なる乎。抑又自由と人權とはアリアン人種以外の民族に對して言ふべき語に非る乎。若し合衆國民にして歷史上定見ある國民ならむか、彼等は惡政に苦みて主權に反抗する革命者に對して當に同情を表すべき也。然り彼等が西班牙に向て宣戰したる一の主なる理由は、實に玖馬及菲律賓人民の倒懸を救濟するに在りし也。而して倒懸民人を救濟せむが爲に戰ひたる有義の國民は、今や如何に却て是倒懸民人を苦めつゝあるよ。イロイロ府に於る一戰に於て、二千餘人の島民は彼の彈射の下に斃れたり。是れ果して何の狀ぞや。吾人は合衆國民の行爲を以て僞善と謂はず、何となれば吾人は國家の行爲を審判するの道德を有せざれば也。然れども建國の精神に背き歷史上の國是に戻れる無定見の擧動なることは斷じて爭ふべからざる也。

菲律賓併有が合衆國の國是に背戻せるは前述の如し。而して是戰爭に際して米軍に不正の行爲ありと稱せらるゝは合衆國の歷史上の一汚點として後來の考證を待つべきものなり、試に是を一言せむ。

頃日菲律賓叛民の將として自ら大統領と稱するアギナルドは、米國司令官の宣言に對して宣戰の布告を發表し、盛に合衆國民の不義非道を指摘し、以て文明國民の同情を求めたり。其言必ずしも信を措くに足らず、恐らくは自己の利益の爲に事理を曲構したるもの素より多々あるべし。アギナルドは素と一匹夫、其叛旗を擧げたるは寧ろ偶然のみ。前年菲律賓總督より賄賂を得て其部下を賣り、大將デュキーのマニラ灣頭に現はるゝや、更に再び叛旗を翻したるが如き、彼れは寧ろ叛逆を賣物とする一奸雄のみ。是の如き輩の言素より多く信憑するに足らざる也。然れども是を米國の側より見れば菲律賓島民に對する食言罪の今や掩ふべからざる事實なるが如し。米西戰爭已に終り、巴里に於る媾和談判方に其開始を告ぐるや、アギナルド、其部將アゴンシリロをして巴里に赴き談判の趨向を覘察せしむ。アゴンシリロ揚言して曰く、海軍大將デュキーは吾人に約して言へり『諸君若し吾人

を援助せば必ず其獨立を幇助せむ』と。人あり米將軍メリトッに問ふに、アゴンシリロの言の實否を以てす。メリトッ答て曰く、『大將デュキーは菲律賓島民に對して正式の談判を遂げたるに非ざるべし、然れども予は大將の談話によりて、必ず是事ありたるべきを信ず』と。是事はアギナルドが香港よりマニラに上陸せる際、大將デュキーより受けたる熱心なる歡迎、且軍隊組織の幇助を受けし事、米軍が菲律賓人民の自由保護者たるを宣言せし事、アギナルドが食言の罪を以てデュキーを痛罵せる等の事實に徵して、殆ど將に十分の依信を措くに足らむとす。果して然らば、米人は即ち菲律賓島民を欺罔して、是を陷れたるものに非ずして何ぞや。良し暫く是事實を不問に附するも、菲律賓島民が米軍の成功に與へたる援助は、十分に承認せられざるべからず。彼等が西班牙兵に反抗したる所以を以て米人を助け、彼等の自由の保護者を以て米人に依信したるは、寧ろ明白なる事實也。米人は何故に其德に報ゆるに其怨を以てせむとする乎。アゴンシリロは人の問に答て曰く、『吾人は海軍を有せず、未だ以て一國として峙立するに足らざるべし。是を以て吾人は合衆國民が若干年の間準備政府を組織することに就いては、喜で是に應ずべし。

唯吾人の望む所は究竟の自由と獨立とにあり、是點に於ては篤く合衆國人の人道主義を信憑する者也』と。非律賓人の事業と彼等が米人に與たる幇助と、及び北米合衆國の人道主義と、倒懸民人の救濟者を以て任じたる其宣言とを認むるものは、良し大將デューキーの食言問題を言はずとするも、誰か同時にアゴンシリロの希望を是認せざらむや。吾人論じて茲に到ればアギナルドが『予は以上の事實を告げ、以て米國と吾人と、孰れか國民の虐壓者なる乎、孰れか人道の遂行者なるかに就て、永遠なる宇宙天道の審判を乞はむと欲す』との慨憤に一片の同情を表せざるを得ざる也。

吾人は以上の理由により、北米合衆國近時の行動を以て其國性の變動を標示するの事實となす。吾人は敢て土民を庇護する者に非ず、又米人を誹謗する者に非ず、唯自由と人權との上に建てられたる北米合衆國の國性としては歴史上矛盾の行爲なるを論ずるのみ。而して米國にして若し非律賓群島の併有を遂げむか、二十世紀の世界史は、其活動の中心となるべき東洋の局面に於て一新要素を加へたりと謂ふべし。

遮莫、西班牙に打勝ちたる合衆國は却て『帝國主義』の征服する所となれり。其建國の精神及理想たる人道主義、詩人クロップストックをして『人道の精靈爾を動かせり』と唱はしめたる其人權自由主義は、其一百年の名譽ある歴史を擧げて、一非律賓群島にだも若かずとする乎。昔者ヂョルヂ三世治下の新英國人民は其の如くにして起たざりき。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

是一論を草し了りたる時、恰も二月十六日、倫敦發の電報は吾人に告げて曰く『米西媾和條約の批准は決して非律賓群島の永久保有を許せるものに非ず、米國は同島人をして自治政府設立の準備を爲さしめむと欲すとの意志を宣言する決議案、廿二票に對する廿六票の數を以て米國上院を通過せり』と。嗚呼果して是ある乎。若し是決議案の動機にして眞に非律賓民人の自由と人權とを保護するにあらば、北米合衆國の人道主義は尚ほ其命脈を保てりと謂ふべし。然れども『ブライアン氏一派の反對黨が、現政府の政策に反對する口實は『非律賓群島の併有は合衆國に經濟上の不利を來すべし』と謂ふにありて、多く其建國の精神と理想とを言はざる

を以て是れを見れば、一片上院の議案によりて合衆國々性の人道主義を言ふは、蓋し早計ならむ乎。想ふに是れ向來幾年の趨勢によりて事實の上に決定せらるべき歷史的一大問題也。

（卅二年三月）

日本主義と大文學

吾人文藝復興期前後の史乘を讀む毎に、常に一個の疑問を提出するを忍ぶ能はず。曰く、フヰレンツェの一市は何が故に爾かく多數の詩人、美術家を產出する事を得たりし乎、而して是等文藝史上千古の盛名は何が故に特に十五六世紀の間に於て爾かく多きを列ねたりし乎。

フヰレンツェは眇たる以太利の一市也、史學者の告る所によれば、其最盛時に於てすら人口僅に六千に過ぎず。六千の人口は、我東京市の二百五十分の一、是を十五倍するも尙本鄕區に及ばざる也、而して此の如き眇たる一市が僅々百數十年間に於て世界文藝の歷史に貢獻せる所のもの、百五十萬人の東京市は果して幾千年の後に於て匹敵し能ふべしとするや。ダンテや、ジオットーや、レオナルドや、ペトラルカ、ボカチオや、ギベルチ、マキャベリ、ミケランジェロや、是中の一人を有するも以て百世の天下に誇るに足る、而して是れ皆六千人のフヰレンツェが百數十年の間に於て產出せる所なりし也。フヰレンツェたるもの何の祝福ありて果して能く是の如きを得し乎。ミラノや、ナポリスや、將たエチチャや、當時の以太利に於て慥に彼れよりも大なる都府なりき、天の光寵は何故に是等の諸市には降らざりし乎。抑も又十六世紀以後のフヰレンツェ及び全歐洲は、何故に文藝史上に於て是の如き盛觀を再びする能はざりし乎。

是に於て同一の問題は、他邦の文藝に關して起らざるを得ず。曰く、チョーサーより大沙翁に到るまでの二百年間に於て、英國は何故に一の大詩人を出だすこと無かりしや。ミルトンの死よりワーヅワースの生まるゝまで百餘年間の英國文學史は、何が故に爾かく落寞を極めたりし乎。抑も又ニーベルンゲン時代よりレッシングに到る數百年と、其後に踵跡相接續せるゲーテ、シルレルの盛時を併せたる一百年と

は、盛衰何が故に爾く相反せる乎。

是を我邦に見る、延暦遷都以後の平安朝の文學は、竹取物語以下源氏、狭衣、多武峰の諸物語に到るまで、典麗の文字獨り今古に俯仰せるに反し、源平以下の數百年は、何が故に爾かく國民文學の蕭索を致しゝ乎。何が故に特に元祿、享保と文化、文政とは德川文學の精英にして、其間の一百年は何故に然らざる乎。化政より明治の二十年代に到るまでの六十餘年間に於て、何が故に我文學は爾かく甚しく衰頽したりし乎。

是の如き疑問は幾度びか問はれ而して幾度びか答へられき。想ふに是れ人文史上の根本問題に接觸せるもの、俄に斷丁すべきに非ずと雖も、尙ほ一事の炳焉として疑を容れざるものあり。何ぞや、大文學の勃興は時代精神の統一に伴ふこと、換言すれば、時代の精神定まらざれば其文學亦雄大なるを得ざる事是れ也。夫の平和の世にあらざれば藝術起らずと謂ひ、或は物質的傾向盛なれば文學振はずと謂ふもの、吾人を以て見れば何れも是の眞理の一面を看取せるの言に外ならず。

夫れ藝術は畢竟時代の鏡也、時代の制約を離れて存在する藝術及び藝術家は未

だ曾て是れあらざる也。夫れ唯時代の鏡也、是を以て時代の精神常に動き、隨て其理想亦定まらざらむ乎、時代の鏡たる藝術は獨り如何ぞ雄大なるを得べき。止水にして初めて鑑すべし、風波搖蕩須臾も已まざらむ乎、是に醮映するもの、獨り沈靜なるを得べからざる也。若し藝術家にして時代の生兒ならば、彼れの心亦時代と動靜を共にすべし。若し對して寫すべき定在の精神なく、緣りて寫すべき靜止の心なくば、是の如くにして產出せられたる藝術、亦一旦夕の物ならむのみ。

吾人は我邦文學の振はざる所以を以て、文學者が時代を解せず、隨て顯現すべき其精神と理想とを洞察するの明無きが爲なりとせり。是れ今の凡ての文學者が決して否定する能はざる所なりとす。所謂時代の精神其物に就いては、吾人多く說き及ばず、是れ時代精神の內容如何に論なく、今の文學者なるものは是を靜觀し、批評するの能力無きを想へば也。實に吾人は今の時代に定在の精神と理想とを認むると同時に、大天才に非ずむば是際に處して能く千古の名を成すことを得ざるべきを想ふ也。而して顧みて是時代精神の實在せざるをだに看取し得ず、其狹少なる管窺の中に嗚吁して得たりとする今の文學者の大多數を憐まずむば

あらざる也。

人或は謂ふ、興奮と激昂とは大なる藝術を生むと、吾人を以て見れば是れ其一を知て未だ其二を知らざるの言のみ。大なる藝術は大なる動機によりて生まるゝこと、誰か之を疑はむ。實に一念の動くや、日星の光耀、河嶽の流峙、何物の力も得て是を壅塞すること能はず、萬境一心に靡きて六合我の外に一物無し、是不撓の精力ありて萬古の名初めて成る。是意味に於て藝術家は向上不退轉の大勇猛心を有せざるべからざるや、言を待たざる也。而かも是の如きは物を以て我に攝するに、あり、我を以て物に調するに非ず。萬境流轉の外に超然として、一心靜に是を觀取するの別天地を有するに非ざるよりは、如何ぞ過眼の形體以外、別に幽玄なる人生の意義を捉ふるを得べき。若し念々外界に執着して其の搖かす所とならば、見る所定まらず、感ずる所深からず、塵に日常の皮相を描きて了らむのみ。されば藝術家は世を知ると共に世の動かす所となるべからず、人生世相の流轉を一念の靜に寓して、而かも其の累はす所とならず、永く其純一の自我を保ち、翻て萬境を止水に觀ずるの覺悟あらむを要す。古より大なる藝術、大なる哲學、宗教、皆是の如くにして世に出でき。

菩提樹下に無上道を成すまでには釋迦は幾年の靜思を凝したり。基督は四十日間沙漠の中に冥想せり。マホメットはヒラの山上に沈思して幻影を見たり。ダンテはラヱンナの森林中に、セルワンテスとバンヤンは獄窓の裡に、何れも多年の默思を友とせり。スコットは軍馬の響の中にマーミオンを草し、ゲーテは祖國の傾危を知らざる爲して其詩篇に耽りたり。ヘーゲルはイェナ大戰の日正に其哲學の論稿を脱し、反て佛蘭西軍隊の街上に絡繹たるを見て問て曰く『是れ何國の兵ぞや』と。凡そ大なる創作の世に出づるや是の如きもの多し。是れ豈人生の眞義を觀ずるもの須らく寂靜中に於てすべきを證するものにあらずや。

吾人は是點より見て、今の我邦に大なる文學の產出せられ難き一の理由を見る也。今の我邦にありては、時代の精神尙ほ未だ統一せられず、隨て一般社會はまだ一定の理想を有するに到らず、內外事物の變遷は日に其急激を加ふるのみにして、人各々安じて適從する所を知らず、一に當眼刻下の必要に制せられて其『今日』を經過するもの多し。されば世を擧て永遠の渴仰なく、沈靜の趣好なく、時尙旦暮に渝

り、人は流行を追ふて走る。文明史家は十九世紀の全體を以て革命の時代と云へり、吾人は我邦の最近三十年に於て特に甚しきを見る也。實に本邦現時の社會は猶ほ走馬燈を見るが如し、藝術家をして超然として靜かに觀察するの餘裕を得しめむが爲には、餘りに紛然たる社會也、餘りに囂々たる社會也。是の如き社會の中、必ずしも有力なる精神と理想となきに非ず、但だ是の如きは今の凡庸なる文學者の單簡なる頭腦によりて解釋せられむには餘りに複雜なる也。一言すれば、今の世に大なる文學の產せられざるは、文學者と時代と互に其責を分たざるべからざるなり。

論じて茲に到れば、大なる文學の出づるを望むもの、先づ時代精神の統一を望まざるべからず。而して時代精神の統一は、必ずや敎育道德の主義の統一より初まらざるべからず。是に於てか大公至正なる日本主義の必要起る。（全集二卷六〇—六一參照）

（卅二年四月）

時勢と詩人

一尺の木、山巔にあり、亭々として蒼空を摩す、木の高きに非ずして、居る處の高き也。世に勢なるものあり、是に乘ずるものは勞せずして功を收む。識必ずしも高きに非ず、力必ずしも强きに非ず、居る所の地おのづから然らしむる也。凡そ政治界にまれ、宗敎界にまれ、實業界にまれ、古より時代の革新者として歷史上の功名を收めたるもの、多くは是の勢に乘じたる者に非ざるは無し。

所謂勢は時代の精神也、凡そ何れの時代と雖も其の精神を有せざるは無し、而かも其の精神は、凡ての時代に於て必ずしも統一せられざる也。成功の祕訣は統一せられたる時代精神に乘ずるにあり。其の未だ統一せられざるに當りて、將に來らむとする時代精神の統一を先見せるものを預言者と謂ふ。其識見高邁、遠く時流を拔けりと雖も、而かも勢を距ること尙ほ遠し、是れ其の事業の多く失敗に終る所以也。是を以て基督の前に預言者は迫害せられたりき、ルーテルの旗未だ揚らざるに先ちて、サボナローラの頸血は空しく濺がれき、維新の革新に先ちて、幾多の志士

識者は、其後に來るべき平凡兒の成功の爲に勢を造るの犧牲となりたりき。是の如きは啻に政治宗教の史上に於て見るのみならず、文學史上に於ても亦是を見る、而して最も近き例しはテニゾン氏なり。

今やキップリング氏の名聲は全世界に轟けり。彼れが三十七歳の一青年詩人にして、獨のズーデルマン氏、ハウプトマン氏、魯のトルストイ氏、那のイブセン氏にも優り、殆ど佛のゾラ氏と角逐して英語國民の間に崇拜せられつゝある情況は、十九世紀の文學史上に殆ど其類を見ざる奇觀也。往年彼れの北米に病むや、英國人は恰もグラッドストーンの病を憂ふるが如くに憂へたり。Kipling Shrine なる名辭は殆ど普通の用語とならむとせり。彼れの崇拜者は揚言して曰く、若し英國の國是にして變更することあらば、其の第一の聲はキップリング氏の口より聽かるべしと。盛なる哉、一青年詩人にして圖世の人心を籠絡する、彼れが如きは、少くとも英國文學の史上に於て殆ど見ざる所なり。而して是の如き名望の由て來る所は、畢竟彼れが帝國主義の詩人たるが爲に外ならず。

帝國主義が近年俄然として英國の人心を司配し來りしことは、隱れも無き事實

也。即ち是れ現代英國の勢也、時代精神也。キップリング氏は、偶〻是の勢に乘じて、一代民衆の渴仰に明晰なる發聲を與へたる者に外ならず。然れども焉ぞ知らむ、歷史上帝國主義を唱へたる最初の詩人は、キップリング氏に非ずしてテニゾン氏なるを。英國の政治家が、夢にだも想ひ到らざりし時に當りて、早くも帝國主義の新福音を宣傳せし詩人は、實にテニゾン氏也。然るに世に帝國主義の詩人としてテニゾン氏を言ふもの無く、今日却てキップリング氏の全盛を見る。吾人は轉た人事の成功の偶然なるを歎せざるを得ず。英國人の帝國主義とは、植民地統一主義の謂に外ならず。政治歷史の上に於ては、近年フォルスター氏が是の主義を唱道せし迄は、一國の輿論は非帝國主義に存したりき。即ちサー・ロバート・ピールが、上下加奈陀の獨立を主張せしは、千八百四十一年にして、ビコンスフィールド伯が是に和して『斯かるつまらなき植民地』は放棄するに如かずと論せしは、千八百五十一年なり。

千八百七十年、史家フルードはグラッドストーンの說を引き、各植民地をして自治獨立せしむべしとの意見を公表せり。越て三年、『タイムス』新聞は當時の輿論を代表し、自治制度を加奈陀人に許すべきことを論じて曰く、『彼等が見習奉行の時期は既

に過ぎ去れり』と。是の如き非帝國主義の風潮に反對したるものは、政治上に於てはフォルスター氏にして、文學上に於ては實にテニゾン氏なりき。

吾人の見る所を以てすれば、テニゾン氏の帝國主義は、千八百五十二年に於て既に其の萠芽を現はせり。氏は小奈破翁の暴横に反對して歌て曰く、

吾等の存する間、良し全歐洲の暴風吾等の上に落ち來るとも、吾等は自由に主張せざるべからず。吾等は日耳曼の一聯邦に非ず、歐洲の一大國也、吾等は他迄自由に主張せざるべからず。良し吾等にして爲に斃るゝとも、吾等の事業は永遠に傳はるべし（意譯）

是の愛國の感情、後に到り最も熱心なる帝國主義の皷吹となりて表はれたり。Idyls of the Kingの跋として女皇に呈したる一小詩は、純然たる帝國主義の主張也。曰く、

吾等は近頃北方の植民地に就いて吾等を侮辱する宣言を耳にせり。曰く『北方の友よ、汝自ら汝の事を爲せ、今の如き狀態にありて初めて忠義たり得べく、むば、忠義は汝にとりて餘りに不廉也。友等よ、汝の王家に對する愛情は、汝にとりて寧ろ重荷たらむのみ、若かず束縛を解きて分離し去らむには』と。是の

如きは果して英吉利帝國の言ふべき言なる乎、吾等を司配者たらしめし信念は、果して是の如きものなりし乎。

當時の人心は彼れの豫言に耳を傾けざりき、然れども今や彼の詩は英國政治家の政略と爲れるに非ずや。彼れ同じ詩に於て更に是の意を述べて曰く、

吾等の王室に忠なるは、即ち吾等の子孫に忠なる所以也。吾等の大英國の爲に是の島帝國と、其の無數の屬領と、其の東洋の大半島とを愛護せよ。哀い哉、我島帝國は、尙ほ未だ自國の大なることを自覺せざる也、若し自覺するに及びて自ら其の大いなるに畏怖せむか、吾等は即ち滅びたる也。（意譯）

今日英國政治家の唱道する『帝國同盟』もしくは『植民同盟』の思想も、亦明にテニゾン氏の主張せる所なり。

吾等の名譽ある過去に於て相提携したる吾等兄弟は、遂に別れざるべからざる乎。凡ての禍福、凡ての變遷を通じ、吾等は一國民として團結する能はざる乎。耳を傾てブリテン國民の聲を聽け。『子供等よ互に力めて一帝國たれ、心よりして一ブリテンたれ。唯一個の生命、唯一個の旗幟、唯一個の王位――吁ブ

『リテンの子供等よ、何ぞ自ら保たざる。』

是の如きはテニゾン氏の帝國主義也、而して同時に英國の帝國主義也。今やキップリング氏は、帝國主義の詩人たるの故を以て、名聲天下に轟けり。然れども、ビコンスフィールド伯が加奈陀の放棄を說き、グラッドストーン氏が愛蘭土自治に熱中する時に當て、是の如き思想を宣傳したるテニゾン氏に頒つに同一の名譽を以てせざるは訝しからずや。帝國主義は文學上キップリング氏によりて創唱せられたる主義に非ず、氏に先つこと少くとも二十年の往時、既にテニゾン氏により最も明かに宣傳せられたる主義なり、而して獨りキップリング氏を以て帝國主義の詩人と爲すは何ぞや。大凡そ時勢と詩人の遇不遇は、實に是の如き也。機尙ほ熟せず、勢未だ成らずむば、豫言者の聲も世に解せらるゝに由無し、一旦風雲に際會すれば、凡夫庸者尙ほ勢せずして飛躍し得む。一人にして時勢を作るは得て望むべからず、大なる成功は唯時勢を見て是に乘ずるにあり。而して時勢は如何なる世に於ても必ずしも功を成すに可ならず、功を成すに可なるの時勢に遭遇すると否とは、所謂天運のみ、人力の如何ともする能はざる所なり。

（三十二年十月）

人の天分

諸君、昔し西洋の或る學者が、青年の爲めに一場の演說を望まれた時に、其學者の答へて言ふたには、吾は青年の爲めに語ることを憚る、何となれば未來の英傑は必ず彼等の中にある可ければなりと。私が今日この演壇を濱しまするのは是の古の學者の言葉に對して、深く耻ぢ入りまする次第でムりまする。

併ながら前會に於て姉崎正治君が我丁酉倫理會の趣旨を申された時に言はれたる通り、吾々丁酉會員は牧師が說敎壇の上から信者に御話しするやうな態度を取て御話するのでは毛頭ないのである。又吾々が御話しすることは、吾々自身が實際行ひ得た事でもないのである。唯吾々が道と尊び、義と信ずる所の理想を諸君に御話して、さうして諸君と吾々とお互に相提携して、是理想を實現することに力めやうとするのに外ならぬ次第である。喩へて言はゞ、宗敎に所謂敎會と云ものゝあるやうな譯と同じでありまする。御承知の如く總ての宗敎に敎會と云ふものがある、あれは一寸考へますると不思議の現象のやうに見へまする、何故に內心

の信仰のみにて滿足はせずに、何故に故らに斯かる教會と云ふ樣な外形的組織を作るのであるか、是には必然の道理があつて存するのであります。何となれば信者が銘々の心の中に信仰を持て居るばかりでは甚弱い、甚心細い、動ともすれば外界の強い力の爲に動かされ易い、それ故大勢の人と團結してお互に其信仰を維持し進歩せしむる爲めに茲に教會と云ふ樣な外形的組織を要することになるのである。それと同じ理由で此の丁酉會も社會に存在する必要があると考へまする。

諸君、言は誠に易いものである、恐らくは吾々が言ふこと位は諸君既に御承知でありませう。又吾々とても、昔の聖人賢人と同一の言葉も隨分言ひ得ないのでは無いのである。けれどもそれを行ふと云ふ一段に至ては、甚だ慚愧の至に堪へませぬが、なか〳〵出來難いのである。若し御互に是の行ふと云ふことが出來るならば、又出來たならば、吾々は諸君に向て是の如き丁酉會を組織し、又此の如き詰らぬ御話をする必要もございますまいし、又諸君に於ても、吾々の此會にお出になる必要もなからうと思はれる。兎に角吾々は吾々の道と信じ、義と尊べる所のものを諸君に御話し、其理想を御互に固めて、各その職分を盡したいと思ふのでございまする。

唯今桑木君がなされたる『健全なる思想とは何ぞ』と云ふ御論は、甚だ有益に且高尚なる學術上の御話でございまして、諸君も定めて御滿足であつたらうと思ひまする。然るに私のは左樣な學術上の高尚なる御話ではないので、極めて卑近な、云はば常識上から割出したるまことに詰らぬ御話であります、――甚だ耻入りまする次第で是點は前以て御斷りして置きまする。

諸君、天分と申しますると、大べんるらい事の樣でムりまするが、私の考へまするには、此世界中の總ての物は、其ものゝ性質、そのものに存在する境遇に從て各爲すべき事、進む可き道、又居る可き處があるであらうと思ひまする、是の分に應じたる事と道と處とを天分と假りに名付けたのでありまする。そして天分と云ふことは、人間社會に於てのみ云ふべきことではなからうと思ふ、即ち一枚の木の葉でも、一塊の石でもそれ〳〵の天分があり、且それ〳〵の天分を盡して居る。此の極めて複雜なる世界が大いなる矛盾もなく、衝突もなく、滑かに調和して進み行くことが出來ると云ふのは、詰りは其葉なり、石なり、自然界の凡ての物が各〻其天分を盡

して居る必然の結果であらうと思ひまする。即ち一枚の葉も、一塊の石もそれ〴〵其の爲すべき事を爲し、往く可き道を行き、又居る可き處に居る如く、天地間の總ての物が其天分を果した結果、是等の物を包含せる天地其物が調和して進んで行くことが出來るのであると思ひまする。唯是等の自然物は、吾々人間の如く意識がない、無意識にして知らず〳〵其職分を果して居るのであらうと思ふ。我々の見る所では、調和のある所、其處には天分が果されて居る。先に桑木君の言はれたる通り、吾々の身體に健全なる機關あればこそ、身體の總てが健全に調和的に働いて行く事が出來るのである。耳は耳、眼は眼、胃の腑は胃の腑の働を健全に爲した結果、身體全體のこゝに調和的活動が出來て、人間其物が健全に存在し、發達する事が出來るのであらうと思ひまする。人間以外の意識のないもの、若くは意識の發達しないものは知らず識らずの間に、天然が彼等に與へたる天分を果し、行く可き道を行き、爲す可き事を爲して居るのであるけれども、吾々人間は彼等よりも高尚な自由な意識を以て居る、而て是の意識に本いて始終行動をして居る。此樣に意識的に行ひをすると云ふことは即ち人間の人間たる所以でございませう。然るに

此の意識、自由の意識を有つて居る人が、斯く自由の意識を有つて居る爲に却て往々にして天分を果さゞる事があるのである、さうして其爲に己れ一個人の不幸のみならず、己れの住で居る社會の不幸、從て己れの社會の屬して居る國家、世界の調和を破ると云ふ不幸が往々あるのである。詰り私の今日御話をする大趣意は、吾々人間は銘々天分を知て、さうして夫れを行ふ所の修練を努めなければならぬと云ふことに歸着するのでありまする。

諸君、天分を知ると云ふことを、もう一層具体的に申せば、己れと己れの住で居る世の中との關係上から、己れの爲す可き事、往く可き道、居る可き處を辨へると云ふ事に歸着するのでありまする。吾々はお互に生れた所も違て居る、さうして生れた後に於ても、其性質境遇はそれぞれに違ひがあるのである、それ〴〵の違つて居る性質境遇に從て、さうして其人の住で居る社會との關係上から爲す可き事があらう、往く可き道、居るべき場所があらねばならぬと思ひまする。それで自覺——自分の爲さゞる可からざる事、又爲す可き事を自分が心の中より自覺して、さうして是の自覺に基きて活動すると云ふことは、人間が天より賦與された自由を最も立派に

使用したものであると思ひまする。詰り人間が禽獸に異なれる重なる點は、自覺的動物であると云ふことに歸着する。犬は牛肉と云ふ旨い物は知て居らうが、己れ自らは知らぬ、己れ自らが何の爲に牛肉を食ふかと云ふ樣な事は少しも知らぬ。猫は鰹魚節と云ふ旨いものは知て居らうが、是の旨い物を食ふものゝ己れ自らなるとは知らぬのである、何の爲に食ふかと云ふ事も知らぬのである。然しながら人間は己れと云ふものに就いての知識を有つて居る、知識を以て居るのみならず、己れが爲すべき事、居る可き處、往く可き道を知て、此自覺に基いて活動するのが人間の人間たる所以である。是が人間が下等動物或は自然物と違ふ所の重なる點であらうと思ひまする。されば我々人間として務むべきことは、自覺的生活である。人間は自分を知り、又社會を知る所の自覺心を有するものであるから、此自覺心に基いてさうして自分の行爲を規定して行くことが、即ち人間の道德的行爲であるし、さうして又人間の下等動物と違ふ所の要點であると思ひまする。自覺的生活、是れを吾々は求めなければならぬのである。

前會に於て姉崎君は色々今日の道德上の狀態の甚だ低いと云ふことを慨嘆されたるが、其の言葉の中に一の警句があつたのを記憶して居ります。それは今日其財產を以ては百世の子孫を養ふことの出來る人多々ありますけれども精神上に於ては一日暮をして居らぬ人が如何程あるであらうかと云ふ事を言はれたのである。實に今日の時弊を穿つた語であると思ふ。諸君、今日巨萬の財產を積で居る人は幾らもあるけれども、精神上の富を有する者は甚だ少いのである。彼等の多くは毫も知らぬのである、又知らむとも思はぬのである。抑〻彼等は何故に世の中に住で居るか、何故に此の如く金を儲けて貯へなければならぬのであるかと云ふことの理由をば少しも考へないし、又考へ樣ともせぬのである。縱しむば考へた所が、其考へ、其の自覺が間違て居ると云ふことは、隨分多いことであらうと思ふ。詰り斯の如き人は、即ち自分の天分を自覺せず、只何となしに茫々然として此の世の中に生活して居る人、所謂醉生夢死の人と云はなければならぬのである。此醉生夢死の人が今日甚だ少なくないとは吾々の甚だ慨嘆に堪へざる次第であります。

諸君、天分を知ると云ふことは、强ちにむつかしいことではなからふと思ひまする。如何にも大なる此世界の上から自分の位地を打算すると云ふことであれば、それ

はむつかしいでありませう。如何にも理論の上から云へば一個人は一個人として生活するのでは無くして、世界の一人として生活するのである。然るに世界は過去に於ては數千年の歴史を有つて居るし、そして何億何萬年と限りなき將來を有つて居るのである。さう云ふ長い歴史を有つて居り、そう云ふ永い未來を有つて居る是の世界であるからして、理論の上から申すと、己れの境遇、己れの位地と云ふことを自覺することは到底出來ぬことである。それを自覺するには是の大なる世界の昔からの歴史を知らなければならぬ、將來往くべき處も明らめなければならぬ、さうして現在の總ての事柄をも考へなければならぬ。一個人は一個人で生活する者でなくして、桑木君の言へる如く、社會的に生活して居るのである、社會は社會の上に國家の一要素として存在して居るのである。國家と雖も世界の一國としての外は存在し得ないのである。されば客觀的に一個人の位置を考へますれば、それは〳〵極めて複雜なもので、人間業の到底解し得ることでない。併し實際上から考へますれば、強ちさう云ふむつかしい事ではないのであります。世界と云ひまするが、實際各個人の考へ居る世界はそれ〳〵違ふのである、此處に五百人の

諸君があるとすれば、即ち五百の世界があると云はなければならぬ。其中には大きな世界もあらふ、小さい世界もあらふ、低い世界も高い世界もあらふ。詰りは一人を以て世界として居るものもあるであらうし、一村を以て世界として居るものもあるであらうし、又一つの地方を以て、世界として居るもの、或は一つの國を以て、或は全體の世界を以て世界として居る人もあるであらう。主觀的に見れば己れが住むで居る世界と云ふものは、強ち理解し惡いものではなからうと思ふ。是の主觀的の世界、即ち是れ各人に對する實際的世界に外ならぬのである、其世界に於ての己れの位地を自覺し、さうして是自覺に基いて自分が行動をすると云ふことは、強ちにむづかしいことではなからうと思ふ。唯むづかしいことは、此自覺を行ふと云ふことであります、是の行ふと云ふことが吾々の大なる困難を感ずる事である。是の自覺を實際行ひ得た人が世の中にあれば、其人は大人物である、大豪傑である。諸君、吾々が諸君と共に務めなければならぬ事は自覺的の生活を辨へて、さうしてそれを實際に行ふと云ふ精神の道德的修練であらうと思ひます。それに就いて私は詰らぬ例ではありますが、二三を例を擧げて諸君に御

話しゝたいと思ふのでありまする、

諸君、諸君の內に本郷の駒込附近に御住みの方があるならば、私の御話しすることは諸君は既に御承知のことでもあらふと思ひまする。駒込附近には夜になりますと往々辻占賣が參りまする、其邊には辻占賣は幾人もないのである、恐らくは一人しかありますまい。あの辻占賣は私が本郷に住むで六七年以來知て居りまする。呼聲は何と云ふかよくは覺えませぬが、仕舞の方が『花の便り戀の辻占』と言ひまする。其花の便り戀の辻占と云ふ哀れつぽい呼聲は今日でも聞くことが出來るのであるが、私は六七年以前の本郷に住み始めの時にも聞いて居つたのである。恐らくは六七年よりか遙か以前から此辻占賣はあの邊に辻占を賣つて居たのであらふと思はれるのである。私の友人の一人は此辻占賣が大べん氣に入り、で、少し興に乘ずると其の眞似をして樂で居た人すらあつたのである。所が吾々の今日の境遇と云ふものは吾々の辻占賣を嘆美した六七年以前の時とは甚だ變つて居る。獨り吾々の境遇のみならず、吾々の住で居る此社會も非常に變つて居る。併しながら諸君、此辻占賣のみは少しも變らぬのである。雨の降る夜も、雪の

ふる晩も、相變らず戀の辻占を面白可笑しく呼びあるくのである。少し變つたと認められるのは、昔の美はしい音聲がいつしかさびれて、哀れつぽい老年の悲しみを帶び來つたと云ふことのみである。諸君、辻占賣の呼聲を聞きますると、私一個人の感情を申し升ると、私は一種の何とも言へぬ敎訓の聲を耳にする心持がするのである。御互に青年と云ふものはなか〳〵空想の多いもの、野心の多いもの、希望の多いものである。自分が獲ざる所を獲やふと思ひて、爲してはならぬことも爲さうと云ふ。隨分空想の爲めに苦しめられて居るものである。然るにさう云ふ空想の盛に起りつゝある時にこの辻占賣の聲を聞きますると、恰も熱して居る頭に冷水をあびせられたる如く、人間の天分と云ふことに就いて何となく考へ到るのである。辻占賣はどう云ふ考へで其辻占を賣て居りますか、それは知りませぬ。併しながらもし萬一私の想像する如くであるならば、彼れは盗賊にもならず、相場師にもならず、今日まで辻占を賣て居るのを見れば、其精神に安ずる所があるのではあるまいか。六ケしく言へば自分の天分を知て居るのではあるまいか。さう云ふことが果して有るか無いか知りませぬが、若しさうであつたとすれば、爰に吾

々にとりて一つの尊むべき教訓があるのである。――是話は誠に詰らぬことでありませうが、併しながらこれと同じ事柄を私は毎々歴史上の大なる事柄の中に發見しまするのである。

諸君例へば佛蘭西の百年戰爭の救主とも云ふべきジャン・ダルクの事は如何であるか。ジャン・ダルクと辻占賣とは甚だしい相違ではありますが、自己の天分を知り、そしてそれを行ひ、それに安じたと云ふ點に於ては少しも差別はありませぬ。若し私の想像した通りの辻占賣でありましたならば、佛蘭西のジャン・ダルクと彼れとは大した差ひはなからうと思ふ。ジャン・ダルクは十六歳の少女でありました。百年戰爭を御承知の方には言ふ迄もないが、當時の佛蘭西は英吉利にさんざんに破られて、唯オルレアンの城のみが國家の命運を一髮の間に繫いで居る。其時にジャン・ダルクは、吾は佛蘭西の救主として生まれたものであると信じて、さうして是の信仰を實行したのである。人が氣違と笑ふにも拘はらず、危險と戒むるにも拘らず、此十六才の一少女の身を以て、今や將に倒れんとする佛蘭西國を助けやうと志し、そして是の志を實際行ふたのである。其決心の鞏固なることは今日に於て幾

多の不可思議なる物語を以てそこに附加へられて居る程であります。詰りはジャン・ダルクと辻占賣とは其境遇に於てこそ大へんな違ひもありますが、併しながら己れの天分を知て是を行ひ、若くはそれに安じたと云ふ點は一樣なる事で、吾々には等しく尊むべき教訓として見られなければならぬと考へまする。

諸君、斯う云ふ風なことを言ひますると、何か天分を知ると云ふことは、足るを知ると云ふことゝ同じやうに聞へまするが、知足――足るを知ると云ふことゝ天分を知るとは實際大へん違うのであつて、この天分を知ると、足るを知ると知ふことの間には、道德上の主義に於て相容れざる差別があるのである。足るを知ると云ふこと――爰に知足主義と假りに名けませうが、此知足主義は東洋流の最も惡い道德の主義である。今日に於ては決して吾々が尊むべき筈のものではなからうと思ふ。尊むどころではない、却て排斥しなければならぬものであらうと思ひまする。昔から東洋では斯う云ふ考へが大へんあつた、高明の家は鬼神之を窺ふとか、或は喬木は風に倒されるとか云ふことを云つて居る。詰り是はあまり自分の位置が高くなる時には、其身が危くなる、それ故足ることを知て程良い所で止めて置かな

ければならぬと云ふのである。老子なども『足るを知れば是れ富めるなり』などゝ消極的に人に安心を訓へて居る。けれども足るを知ると云ふことは、個人主義の最も惡い思想で、自分一個人さへ安心であり、幸福であればそれで宜しいと云ふことに歸着するのである。知足主義は少しも社會を言はぬのである、家族を言はぬのである、國家を言はぬのである、況むや人道と云ふ如き思想は毫頭無いのである。唯己れ一身に於て足るを知らなければならぬ、さうでないと己れが危いと云ふに過ぎない。即ち極端なる利己主義、個人主義である。併しながら此天分を知り、知て之を行ふと云ふことは、己れの他に家族あることを認める道德主義である、社會あり、國家あり、人間あるを認める道德主義である。自分のみ良いのみではならぬ。天分と云ふことは、社會と國家に對する職分を自覺して、是の職分の爲めに死するまでも退かぬ、若し其職分を得たならば、そこに安せよと云ふ積極主義であるのである。即ち個人主義、極端なる利己主義の道德たる知足主義とは非常に違ふのであります。然るに東洋では知足と云ふことを大へん良いことに思て居る結果として、例へば功成り名遂げれば退く、高踏勇退と云ふことは、一の英雄の資格でもあ

るかの如くに考へて居る。けれども諸君、高踏勇退と云ふことの中には如何なる道德主義がありまするか。一身を保つの外に君主もない、國家もない、何もないのである。是れは吾々の所謂天分を知るとは雲泥の差違があるのである。

諸君、吾々は天分を知らなければならぬ。さうして啻に知つたのみならず、是の天分を行ふと云ふ大執着心を起さなければならぬ、大煩惱心を起さなければならぬ。さうして是を成し遂ぐる迄は死ぬる迄も進まなければならぬ、如何なる敵とも闘はなければならぬ。吾々の天分を知るとは積極主義である。今茲に假りに天分主義と名付けることが出來ませうと思ひます。

諸君、それで東洋流の知足主義の一例を歴史上より擧げますれば、歴史上に於ける菅原道眞の行動でありまする。今日菅公と云へば、人間として殆ど缺點の無い理想的の人物の如く人々が考へて居る。菅公が右大臣になつた時に三度辭表を奉て辭したと云ふことは、菅公が謙讓の美德を有つて居つたのだ、若し何か野心を有つて居つたならば、太政大臣の内命をも請けたであらうが、菅公のみは足るを知つた、誠に立派な人物であると、かやうに菅公を嘆美することになつて居る。が、是は

東洋の知足主義である、私は菅公の知足主義に對しては同意することは出來ないのである。菅公の當時の歴史は玆に言ふ迄もありませぬけれども、菅公が宇多天皇に拔擢せられたることは、私の考へでは、宇多天皇が藤原氏を抑制すると云ふ大御心があつた爲めに違ひない。當時藤原氏の勢力は非常に盛なものである、宇多天皇御自身さへ基經の御蔭で天皇の位に登ることが出來られたのである。それであるから、藤原氏の權勢は非常なもので、時としては天皇の大權を無視して、暴戾至極の行をした、かの阿衡問題の如きは其の最も著しき例である。是の藤原氏の暴戾を抑制する爲めに、菅公を拔擢せられたのが、即ち宇多天皇の御心であつたと云ふことは、今日疑ふことの出來ない事實であると思ひます。さう云ふ風に菅公が宇多天皇の御心を受けて、藤原氏を抑制すべき位置に居る、即ち天分を有つて居る。然るに右大臣になつた時には三度まで辭退した、是れは當時の慣習たる形式上の辭退とのみ見ることの出來ない遣り方であつた。つまりは其身の危きを恐れて其位を退かうとしたのに過ぎないである。――願くは早速臣の職を止めて貰いたい、是のまゝ高官に居ては是身が危いからと云ふ主義であつたのである。併

しながら當時宇多天皇の御心が菅公に知れたならば、言換へれば其天分を知つたならば、そうして是の天分の自覺の上に斷乎たる行動をすることが出來たならば、斷然右大臣をも、又後に至りて太政大臣の內命をも受けなければならぬのである、受けてそうして藤原氏を抑へなければならぬのである。然るに菅公は知足と云ふことを悟り得たものであると云ふ理由で、歴史上に重せられて居る。是れはむしろ菅公の爲めに大に惜むべき事であり、又悲しむべき結果を生じた原因でもあると思ふのである。（全集三卷一九九―三〇〇頁參照）

兎に角知足と天分と云ふことは、道德の根底が違ふ。一方は極端なる個人主義、一方は己れの幸福のみならず、己れの屬して居る團體の幸福をも認めて、其團體の幸福を進める希望の上に自己の安心を有つて活動するものでありますから、道德上の根底は全く違ふのであります。それであるから天分を知で行ふ人のする仕事には、到底個人主義、即ち足ることを知ると云ふ道德の上に活動する人の夢にも眞似ることの出來ない尊い性情を顯はすことが出來るのであります。

諸君、更に一二の極く卑近の例を諸君にお話致しませう。或は御承知でもあつ

たでございましようが、往年地中海に於て英吉利の ヰクトリヤと謂ふ軍艦が暗礁に觸れて沈むだことがあつた。さうして當時 ヰクトリヤの沈むだ狀態は、到底多數の人が助かることの出來ない有樣であつた。船體は次第に傾きつゝあつた、而して船員の運命は數分時間に決せらるゝの狀態であつた。其時 ヰクトリヤの艦長は、己れの支配して居る艦の最後の見廻をした時に、甚だ歎美すべき事實を見出した。それは何であるかと云ふと、五百人の乘組人員は各爲すべき事を爲して居る。數分時の後に己れ等の運命は如何になり行くやを知らざるものゝ如く、鐵砲を磨くべき職に在るものは鐵砲を磨き、掃除を爲すべき役にあるものは掃除を爲して居る、皆それ〳〵の任務を盡して居つて、今艦の傾きつゝ將に沈沒せんとする恐るべき事實を知らぬかの如くであつた。それでビクトリヤの艦長は、英吉利の今日あるは、ビクトリヤの如き脆き軍艦のあるが爲めではなくして、此の如き天分を知て是に安じて居る兵士が多かつた爲めであると云ふことを歎美したのであります。誠に己れの安ずべき所、己れの爲すべきことを自覺して、其自覺を以て神とも仰ぎ佛とも仰ぎ、そして活動しますれば、其人の勇氣は死と雖ども迫害するこ

とは出來ないのである。恰度それと同じ例は、往年亞米利加のミシシピー河に大洪水のあつた時、一人の電信技師の行爲に現はれたのである。其電信技師が實に歎美すべき行ひをしたのである。どう云ふ行ひであつたかと云ふに、此電信技師が中央電信局から洪水の模樣を報知すべき命令を受けて、其報道に從事して居つた。所が其電信技師の居つた電信局も水に浸されて、さうして二階まで水が浸しつゝあつた。けれども電信技師は少しも自分の身の安危は考へず、水將に自分の膝を沒し、腰を沒して來る迄も報知の手を止めなかつたのである。洪水は遂に首を沒し口を沒し、今や將に死せんとするに臨で、今吾れ死すと云ふ最後の電信を發して死だと云ふことであります。諸君、是の如き電信技師は非常に勇氣のあるものではあるまいか。斯樣な勇氣は何れより得來つたかと云ふと、外でも無い、彼は己れの天分を能く辨へて、そうしてそれを實行するだけの精神の修練があつたと云ふことに歸着しなければならぬ。斯う云ふことは非常な例でありますが、若し總ての人が斯う云ふ修練を實際有つて居つて、さうして平常社會に於て之を行つたならば、例へば今日日本の社會にあるが如き幾多の嘆かはしき缺點はなかつた

らうと思ひます。

それで私の望むことは、人々各々天分を自覺して、さうしてそれを實現することに力むる事であります。此天分を自覺して是を實現した人は、昔から最も得難い所の人物である。其實例は一一諸君の前に申上ることはくだ〳〵しいことに思ひますから申しませぬが、殊に大なる學者、大なる文學家、或は大なる美術家とか云ふやうな人は、皆、この自分の天分を自覺して、此を實現する爲めに、如何なる迫害、如何なる不幸に陷るも顧みないと云ふ熱心のある人々であつたのである。例へばダンテの如きである。諸君、ダンテは自分の故郷を放逐されて、吾は終生フローレンスを見ることが出來ないと嘆じた。併しながら是の如き迫害の下にありても尙ほ其筆を止めることが出來なかつたのである。

諸君、獨逸の詩人テオドル・キョルチルと云ふ人は、ナポレオンの爲に將に滅ぼされんとした獨逸帝國の獨立の義戰に赴いて打死をした人である。其年を問へば僅に二十三歳で死だのである。彼の二十三歳迄の生活は實に幸福なるものであつた。死ぬる少し前までは、墺地利亞の維納に居つて、劇場の一詩人として非常なる

喝采を受けつゝあつた。けれどもキョルチルは自分の天分は、此際詩人となつて終るべきものではない、祖國の滅亡を眼前に見ながら默視して已むは國民として有るまじきことであると云ふことを自覺したのである。其のアスペルンの戰の凱歌を聞く際にも、國民の呼聲に對して一種の謂ふ可からざる苦痛を有つて居つたのである。彼れは遂に予のファテルランドが吾を喚ぶと言つて、他の人が羨む所の最も幸福なる境遇を捨て、其の最愛の妻をも去て、單騎軍に投じて遂に死んだのである。實に此のキョルチルの如きは天分を自覺して、そして之を實現することに努めたる人である。而して是の天分の自覺と實現との爲に彼は實に一個の愛國者として、又一個の詩人として不朽の名譽を得たのである。

斯う云ふ例は美術家や詩人の中には澤山あることでありまして、美術家の內には其の爲に餓死した人もある、乞食になつた人もある、首を斬られた人もある。併ながら斯樣な迫害を受ける迄も、尙自分の藝術上の執心を捨てることは出來ぬ、飽く迄藝術上の良心に忠實ならざるを得なかつたと云ふことは、實に歎美すべきことである。否美術家の如きは其の一例であるが、古來より大聖人大賢人と云はるゝ人は

何れも其の天分の自覺の確乎たる人であつた。釋迦は天上天下唯我獨尊と言つたのである、孔子は天德を吾に下せり桓魋それ吾を如何せんと云ふことを言つたのである。

斯う云ふことは誰しも御存じのことで、私が今日御話しする迄もないのである。斯の如く言ふことは何より易いことでありますけれども之を行ふといふ事、是を行い得る樣に吾々の精神を修練すると云ふことに至ては、大に困難なことであらうと思ふ。今日の社會などに於て、自分の往くべき道を往き、爲すべきことを爲し、居るべき處に居ると云ふことを能く辨へて、そして辨へるのみならず、それを實行する爲めに努めつゝある人は如何程あるかと考へますと、吾々は實に慨嘆せざるを得ぬのであります。今日では政治家とか、實業家とかは腐敗して居ると謂はれて居る。又學者、普通人よりも自己の天分を承知して居るべきはづの學者はどうでありませうか。今日の學者の多數は謂はゞ體の良い辯護士である。左に向てエースと言つた、其の同じ事柄に向て同じ口で右に對しては、ノーと言ふのである。エースと言ひノーと言はせるものは何であるかと云ふと、金である。さう云ふ事實は吾々の現に

見る所である。日々の新聞紙は是等の事實を傳へて倦まないのである。

諸君、文學は高尚な者であると謂はれて居る、恰もダンテの考へた如く、ミケランゼロが美術に就いて考へた如く、所謂る文學者は其の初めには非常に高尚な考へを持て居ても、何時しか浮世の名利の爲に誘はれて或は商賣人になる人もある、或は學校の敎師になつて餘念の無い人もある、さう云ふ人は多々あるのであります。是等の人々は皆自個の天分と云ふことを自覺したのか、或は自覺し得なかつたのか、或は自覺しても之を行ふ力がなかつたのか。初めの覺悟は迷ひで、今の迷ひが悟りであつたのか。

諸君、敎育者は今日年功加俸とか恩給とか言つて、色々の奬勵方法によりて鞭撻せられつゝある。けれどもお可笑いことではありませぬか、諸君若し金持に成りたければ相場をやるが宜しいのである、商賣をするが宜しいのである。金を儲けんが爲めに敎育者となると云ふのは、抑ゝの心得違ひであるのである。さう云ふ精神であるならば、直樣辭職しなければならぬのである。諸君年功加俸とか、又は恩給とかに依て初めて奬勵せらるゝ敎育者が世の中に何程の益を爲すであらうか。

話しが永くなりましたが、畢竟するに吾々は吾々の位地、吾々の性格、吾々の境遇に從て、それ〳〵爲すべき事柄があるのであらう。是は決して抽象的に言ふのではない、各自が自分の境遇に對して能く考へて見たならば、必ずあらねばならぬと思ふ。そこに安ずるとの必要が一方にあるし、さうしてそこに往く迄は決して安ず可からざる必要が他方にあるのである。今日人間以外の者、一枚の葉にも、一介の石にもそれ〳〵の天分があつて、彼等は知らずして己れの天分を盡して、そうして大なる世界に是の如き大なる調和を與へて居るのである、誠に尊い仕事を爲しつゝあるのである。然るに人間が愁い自由の意志を持て發達して居るが爲めに、自分の天分を等閑にし、往く可からざる處に往かんとし、居る可からざる處に居らんとを冀ふと云ふことは、天の授けたる大なる恩惠、即ち自由と云ふ事を濫用したものであると思ふ。是の如き濫用のある爲に世の中に色々の不調和があるのである、大豪傑も出ないのである、大なる事業も世の中に爲されぬのである。——諸君、くれ〳〵も斯く言ふは易いが、さて行ふことはなか〳〵難い。詰りは宗教の教會に於けるが如く、是の如き理想を有し、是を實現せむとの希望を有する人々が互に團結

提携して、其の永遠の成功を期するの外は無いと思ふ。諸君、世の中に神樣ばかりがあつたならば進歩と云ふことも無いのである。吾々は不完全な、缺點の極めて多い人間であるのである。不完全な丈に、缺點の多い丈けに、今日是の如き會合の下にお互に性格の修養に力めることの必要があるのである。吾々の丁酉倫理會の事業も是の點に關して何等かの効力があるならば、是れ吾々及び諸君の幸福のみでは無からうと思ひます。

（卅三年三月演說）

死と永生

死は生きとし生けるものゝ免るべからざる運命なり、故に又避くべからざる問題也。されど世に生を惜む人はあれども、死を惜む人は少く、生に就いて慮る人はあれども、死に就いて考ふる人は稀なり、訝しからずや。

如何にして生くべき乎、是れ人生の大いなる疑問也、然れど如何にして死すべき乎は、更に大なる疑問には非ざるべき乎。吾等は歴史を讀みて大いなる宗教の起るを見たり、されど宗教とは、生きむが爲めの教に非ずして、死せむが爲めの悟り也。釋迦は人生の四苦に感じて、解脱の途を説きぬ。耶蘇は同胞の宿罪を贖うて永世の道を開きぬ、解脱や、永生や、死を外にして何の意義かある。最も賢き人の説ける哲學の旨趣も亦是に外ならざる也。天地人生の理法を明にするは、人をして安心立命の地を得せしむるにあり。安心立命とは所詮は死を安からしむるの謂に非ずや。道德は現世の爲めにのみ存するものにあらず、名譽の不朽を思ひ、事業の永遠を言はゞ、是即ち死後の世界を言ふなり。あはれ其生を見て其死を見ざる者は、人生の根本を遺れたり。死は凡ての物の終りにして、又凡ての物の初めなれば也。されば人々死を考へよ、死を考ふるは即ち人生の目的を考ふる也、如何にして生くべき乎の問題は即ち如何にして死すべき乎の問題也。死を考ふるは死滅を考ふるに非ずして永生を考ふる也、死は人生の究竟なるが故に永生は人生の目的也。夫の生死の優劣を爭ひ、人生の價値を疑ふものは愚なる哉。吾等は生を知る未だ死を知らず、如何ぞ其優劣を知らむや、人生の價値は絶對なり、他に比すべき者なし。厭世と謂ひ、樂天と謂ふ、吾等其の何の意なるを知らず。吾等は唯人生の實在せるを知るのみ。

されば吾等は生きざるべからず。永遠に生きざるべからず。死は萬物の運命なり、されど吾等は死を超絶して其永生を續けざるべからず。如何にせば死して生くるを得む乎、人生究竟の問題茲に集まる。

世に神に縋りて永生を求むるものあり、佛に願ふものは人生の倏忽を歎きて涅槃の寂寞を求む。されど形體を離れて魂魄無きを如何にすべき。其の墳墓を壯大にし、金を鏤め、石に刻して、名の後世に傳はらむことを求むるものあり、されど時は凡ての物の破壞者なり。風雨幾歳、時移り人渝り、桑滄幾度か變轉して墓標獨り全きを得べきや否や。是の如きは永生の道に非ざるなり。

まことの永生は名によりて生くるに非ずして、事によりて生くる也。儒教の存する所、今尚ほ孔子あらざるは無く、佛寺の建つところ到る處に釋迦あり、耶蘇は十字架にかゝれりと雖も、今尚ほ基督教徒の命也。楠公の史蹟に感激する者胸には

楠公其人の生命あり、蒸汽機關の動く所には、ワットの血液あり、電氣の線のかゝる所は、即ちフランクリンが永生の地にあらずや。まことの永生は、時と共に深さを加へ、人と共に廣さを加ふ。されば一人の精神は、千萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、蕩々汨々として、遂に世界を動かさずむば、已まざるべし。十九世紀の文明は、是の如き幾多永生の結果に外ならざるなり。

我少年諸子よ、諸子は曾て死を考へしことありや。其年の弱きを以て早しとする勿れ。死を思はずして生きたるは、空しく生くる也。其の死をして恨無からしめんと欲せずして、獨り其生の完からむを望むは、これ的なくして道を歩むなり。死を思ふは即ち永生を思ふなり、而して最も好く是の問題を解釋したるものは、哲人傑士なり。

（三十二年八月）

外山博士を悼む（憶ふ）

一　世の鹽

今は故人なる外山博士に關して第一に追懷せらるべきは、其の人物の高潔なること也。若し利を見ては爲さゞる所無き星亨氏の如き人を大人物と稱する眼より見れば、博士は寧ろ小人物と謂ふべかりき。博士は星氏一輩の當世的人物と全く其の撰を異にす。博士は徹頭徹尾、正義の人也、勢利に依りて去就を決し、功名に誘はれて良心を枉ぐるが如きは、博士に於て夢にだも見る能はざる所なりき。博士は今の俗流に投じ、夫の汝々者流と共に方便主義の人たらむには、其の知見餘りに聰明に、其の道念餘りに嚴肅なりし也。政黨者流は疑も無く博士を以て融通の利かざる人物と爲せしならむ、されど融通の利く人物の寧ろ多きに勝えざる今の世に於て、吾人は特に博士の高潔なる性格を懷慕するの情を忍び能はざる也。

博士は今の世に缺けたる幾多の美質を有したりき、是の意義に於て博士は實に今の世に缺くべからざる人物なりし也。主義なき今の世に於て、博士は飽迄主義